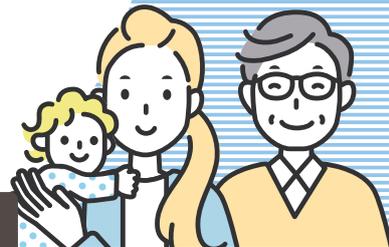
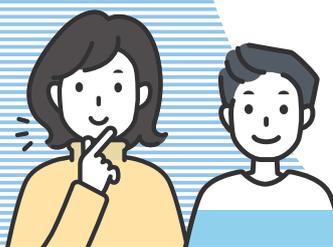


こく さい か し じん
国際化市民
フォーラム
in
T O K Y O



せい かつ し てん かんが た ぶん か きょうせい
生活視点で考えるこれからの多文化共生

実施報告書

令和5年2月4日（土）10：00～17：00

ZOOMによるオンライン開催

主 催	国際交流・協力TOKYO連絡会	一般財団法人東京都つながり創生財団
共 催	東京都	日本国際連合協会東京都本部
後 援	独立行政法人国際協力機構（JICA）	一般財団法人自治体国際化協会

目 次

I	開催概要	2
II	実 施	3
	A分科会	
	多文化共生をとらえなおす ～自立支援から包摂、社会の一員としての外国人へ～	
	B分科会	
	外国ルーツの子どもたちが自分らしく輝くために	
	C分科会	
	みんなで創る多文化共生	
III	国際化市民フォーラム in TOKYO アンケート結果	72

I 開催概要

(1) 目的

1992年1月に約25万人だった都内の外国人住民の数は、2022年1月には約2.08倍の約52万人となりました。

地域や職場、学校、飲食店などで外国人住民を目にすることが当たり前となった今、主に1990年代より使われるようになった「多文化共生」とはどのような社会なのか、参加者とともに考えることで、新たな気づきや行動するきっかけとなることを目指します。

(2) 実施方法 分科会方式（3分科会）

(3) テーマ 「生活視点で考えるこれからの多文化共生」

(4) 内容

A分科会： 多文化共生をとらえなおす
～自立支援から包摂、社会の一員としての外国人へ～

B分科会： 外国ルーツの子どもたちが自分らしく輝くために

C分科会： みんなで創る多文化共生

(5) 日時 令和5年2月4日（土）10：00～17：00

(6) 開催方法 ZOOMによるオンライン開催

(7) 定員 各分科会250人

(8) 参加費 無料

(9) 主催 国際交流・協力 TOKYO 連絡会 一般財団法人東京都つながり創生財団

(10) 共催 東京都 日本国際連合協会東京都本部

(11) 後援 独立行政法人国際協力機構（JICA） 一般財団法人自治体国際化協会

Ⅱ 実 施

A分科会

テ ー マ 多文化共生をとらえなおす ～自立支援から包摂、社会の一員としての外国人へ～
多文化共生社会とは「支援と自立」、「外国人と日本人」といった二極構成ではありません。これまでの外国人住民への対応は自立支援の色合いが濃い反面、すでに外国人は地域社会の一員としての現実があります。ふりかえって「言葉の壁、制度の壁、心の壁」は取り除かれたのか、当初の視点は有効なのか、多文化共生の変遷を見てきた方々の視点でお話いただき、今後の地域社会について考えるとともに午後の分科会につなげたいと思います。

司会進行 山本 重幸 共住懇 代表
パネリスト 吉富 志津代 武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科 教授
NPO 法人 多言語センターFACIL 理事長
新居 みどり NPO 法人 国際活動市民中心 コーディネーター
富田 莉莉 一般財団法人 町田市文化・国際交流財団
町田国際交流センター センター長
ジギャン クマル タパ 公益財団法人 かながわ国際交流財団 職員

参加者 226名

● 事例発表

吉富 志津代 武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科 教授
NPO法人 多言語センターFACIL 理事長



・多言語センターFACILの活動拠点
～たかとりコミュニティセンターのあゆみ～
28年間、色々な団体がくっついたり離れたり、新たにできたりやめたりして活動している。組織を守る、団体を続けるといったことは考えず、必要だと思うことをしていたらこのように広がって

いった。

・たかとりコミュニティセンターの設立経緯
～住民自治意識の起こり～

阪神淡路大震災をきっかけに住民自治の意識を持つようになった。社会的課題解決を行政に任せるのではなく、何かあったときは自分たちで命を守らなければならない。震災時の被災者は国籍・ジェンダー・年齢など様々。住民が同じ被災者になることで、社会の多様性と、少数者の視点での社会の不具合に気づかされた。当時立ち上げたラジオ局「FMわいわい」でも、スペイン語の番組ではスペイン語を話す人自身が情報を伝えた。復興のまちづくりのプロセスで、社会に参画するための居場所だけでなく、出番や役割を担って一緒に社会を作っ

ていくことをしてきた。

• 多言語センターFACILについて

多言語・多文化に関する事業を通して地域社会に働きかけている。運用が曖昧であった翻訳・通訳業務に適正基準を設け、ソーシャルビジネスを展開してきた。外国にルーツを持つ人のエンパワーメントにも繋がっている。団体のルーツは阪神淡路大震災のボランティア。多言語でのラジオ放送のために集まったボランティアによって立ち上がり、コミュニティビジネスとして当事者である外国ルーツの人と一緒に活動を続けてきた。現在、翻訳・通訳登録者は1631人、対応言語は74言語。

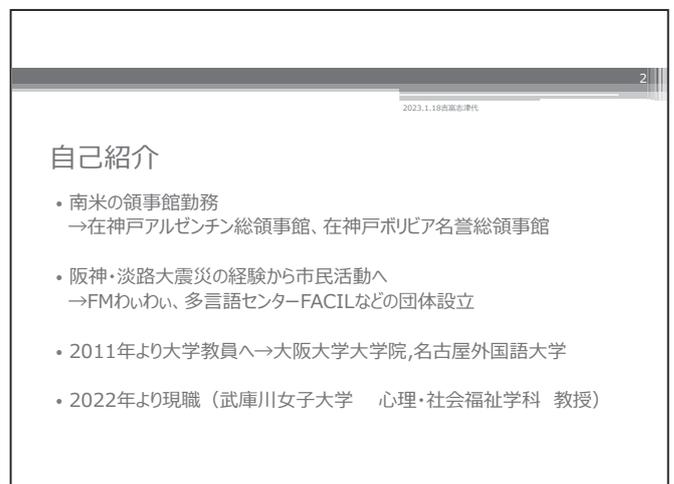
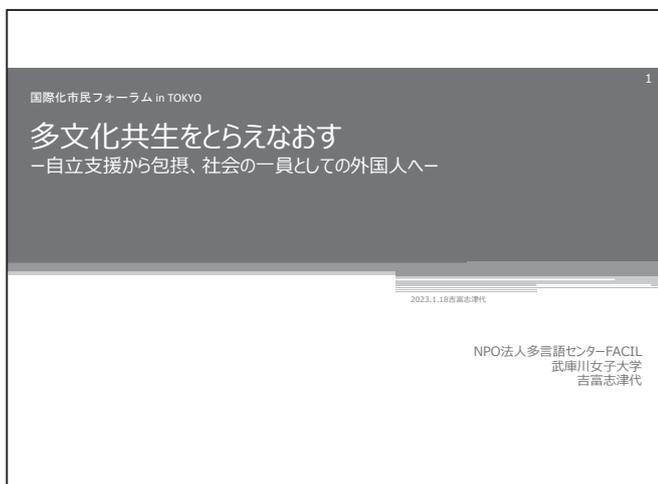
アグリツーリズムやインバウンド事業ではまず在日外国人に地域を知ってもらい、神戸アンバサダー事業は外国ルーツの人が中心となり、神戸をPRするということで活躍する機会を創っている。コロナ禍では様々な情報の多言語化や医療通訳システム構築事業においても遠隔通訳の促進を行った。海外にルーツを持つ子どもへの活動も保護者とともに行っている。こうした活動を通して日本社会の課題を知ることが、地域の発展に繋がる。

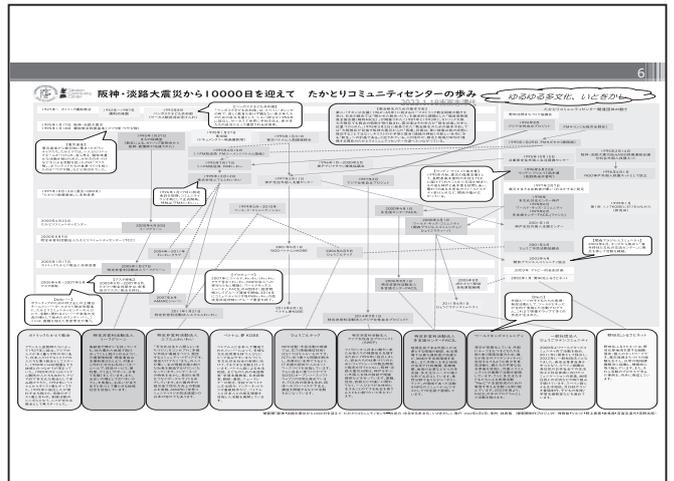
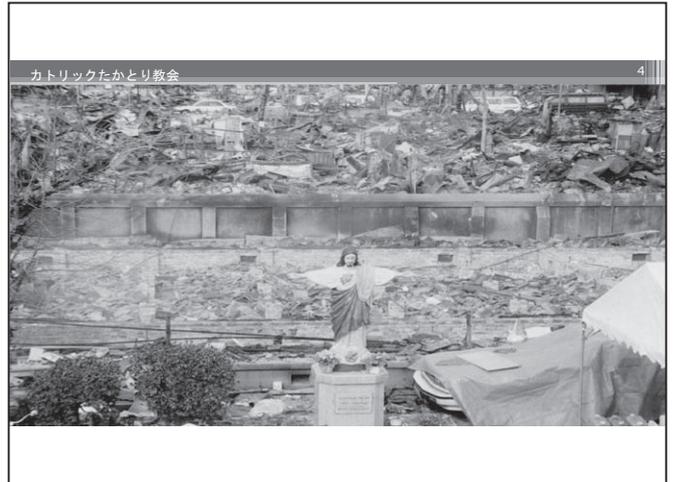
目指すのはインターカルチュラルシティ。誰も

取り残さない、誰も排除されない、多様性を活かした地域の共生社会が前提にないと社会自体が衰退していく。多様性を積極的に活かす社会を目指し、強みにする。

地域社会には多様なマイノリティがいて、社会の中でハンディがあれば色々な立場の人がサポートしていく。それはサポートが目的なのではなく、地域社会に参画して役割を担ってもらい、一緒によくしていくことだ。それが共生のまちづくり、本当の意味での共生である。体験という小さなプロセスを数多く積み重ねていくことで相互理解の機会を作り、共感を得たことが実行につながり、それがルールや政策となる。そのプロセスに色々な立場の人が少しずつでも関わることが大切である。

活動は1年前と同じことをしているが、震災から28年経ち、社会は明らかに変わってきた。多言語・多文化という意味では、コロナの情報を厚生労働省も19言語で出した。課題は多くあるが、10年スパンで見ると変化している。小さいことの積み重ねが必ず地域社会を変えようという実感を持っている。これからも地域住民の意識を変えて、その先にルールや政策を積み上げていきたい。

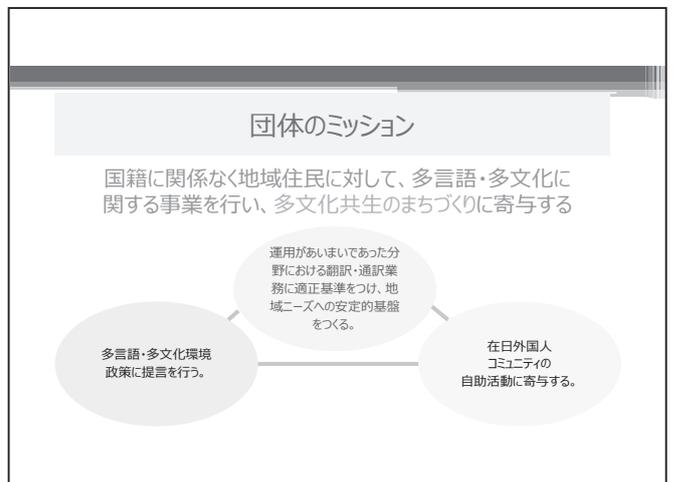




Multilanguage Center
FACIL

・特定非営利活動法人 多言語センターFACIL(ファシル)

2023.1.18 高橋あゆみ



団体のルーツ

1995.1.17 阪神・淡路大震災後のボランティア活動
 (※当時、約8万人の在日外国人が被災、約3万人がとばの壁に直面と言われている)

被災者への多言語での
 情報提供活動を開始！

ボランティアを組織化
 ↓
 多言語センターFACILへ



団体が取り組む社会課題と想い

<課題>
 少数である
 外国ルーツの住民への
 「心の壁」
 「制度の壁」
 「ことばの壁」

社会参画機会の欠如

生活情報の多言語化
 多文化・多言語企画を
 コミュニティビジネスとして開拓

地域社会の雇用
 (外国ルーツの住民の
 就労機会創出)と
 多文化・多言語環境の
 促進

パートナー（登録会員、外国人コミュニティ、
 NPO/NGOなど）と社会（地域住民、企業、
 行政など）をつなぎ、相互協力により社会を
 つくる仕組みづくり

→少数者の視点が社会の気づきへ



活動内容

翻訳通訳者登録数： 1,631名 (2022年6月現在)
 対応言語： 74言語



活動実績

- ◆外国ルーツの住民が地域で暮らすために必要な手続き、生活情報、学校・保育所・自治体の案内などの翻訳・通訳
- ◆医療通訳システム構築事業（すべての住民が安心して医療が受けられる仕組みづくり）
- ◆災害時の緊急および支援情報の多言語化とその企画立案コーディネート
- ◆多言語に対応したコンテンツの企画制作
- ◆多文化・多言語イベントの企画立案コーディネート
- ◆新型コロナウイルス関連多言語支援活動
- ◆上記にかかわる行政への提言



活動実績 (災害支援)

- ◆台湾地震（1999年）
 地震情報を文字と音声で配信、番組制作
- ◆新潟県中越地震（2004年）
 ・災害情報の翻訳、音声化、配信
 ・臨時災害FM局支援
- ◆新潟県中越沖地震（2007年）
 ・翻訳協力
- ◆東日本大震災（2012年3月～2012年3月）
 ・災害情報の翻訳、音声化、配信
 ・臨時災害FM局支援
 ・災害時多言語情報データベースの活用
- ◆新型コロナウイルス関連多言語支援活動

- ◆災害時多言語情報データベース作成（2006年）
 自治体国際化協会CLAIRからの委託
- ◆災害時・非常時多言語緊急情報翻訳業務（2006年～）
 自治体や国際交流協会からの委託



翻訳・通訳 多言語WEBサイト・DTPデザイン制作 多言語ナレーション



住民自治の意識

★住民とは、国籍に関わらず、そこに住んでいる人すべてである。

- ・多様性の重視
- ・少数者自身の視点、発信



違いや新たな視点が多数者に気づきをもたらす

2023.1.18高尾志津代

居場所と出番



震災で始めた多言語放送局「FMわいわい」の番組放送



スペイン語情報誌

2023.1.18高尾志津代

運営/経営

持続可能性への挑戦 社会課題を解決するために…

- 年間事業費：約1億200万円（2021年度）
寄付金1200万円、助成金410万円
- 職員：14名（内フルタイム8名）

【職員の内訳】

- ・通訳・翻訳コーディネーター：8名
(医療通訳コーディネーター 兼務：2名)
(会計担当 兼務：1名)
(通訳者兼務：1名)
- ・Web・DTPデザイナー：1名
- ・コーディネートアシスタント：1名
- ・会計・デザインアシスタント：1名
- ・ベトナム語遠隔通訳者：1名
- ・ウクライナ語遠隔通訳者：1名

日本語が母語ではない職員への配慮と
その職員自身の努力

日本国憲法と日本が締結した条約及び確立された国際法規

憲法第25条（生存権、国の社会的使命）

- ①すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。
- ②国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない。

内外人平等原則⇒外国人にも自国民と同じ待遇を与えることを国際的に約束

*納税義務は居住地主義 ⇨ 在留資格の範囲内で、という考え方ではなく、社会保障は公平に

- ・国際人権規約(1979年批准—国内法の改正なし)
- ・難民条約(1981年批准—ベトナム難民受入れが契機)
- ・人種差別撤廃条約(1995年批准)

2023.1.18高尾志津代

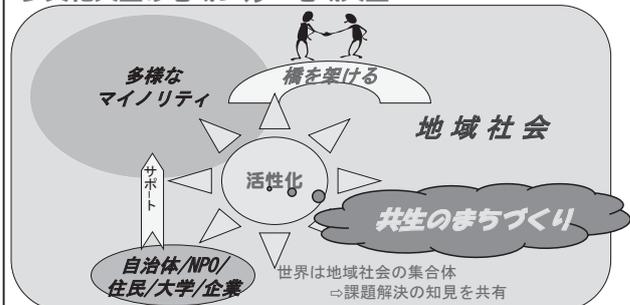
めざすのは「インターカルチュラルシティ」

「多文化共生」社会を前提として、

その「多様性」を、積極的にまちづくりに活かす

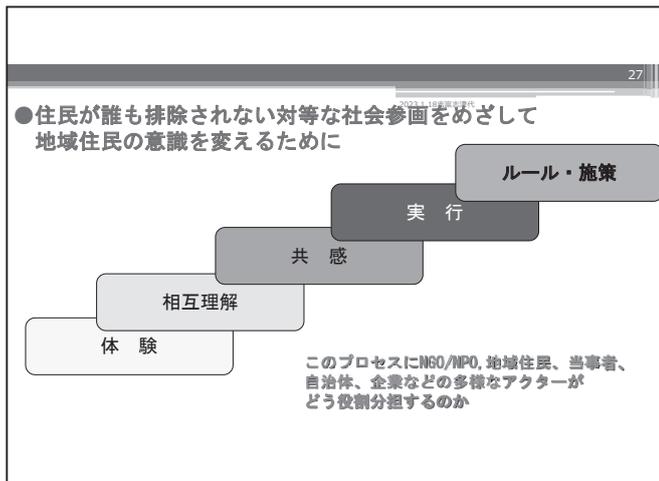
「多文化共生社会において、多様性を強みに」
豊かで成熟したまちづくり

多文化共生の地域づくり→地域共生



2023.1.18高尾志津代

26



新居 みどり NPO法人 国際活動市民中心 コーディネーター



・ CINGA について

NPO 法人 CINGA は 2004 年設立。元々、東京都内の国際交流協会に参加してきた市民たちが専門性を活かして行ってきた活動を、その地域だけでなく東京全体に拡げていくためにできた組織。特徴は外国人支援領域にかかわる専門家が会員であることと、ネットワーク組織として活動してきたこと。いわゆる、中間支援組織である。日本における外国人支援・多文化共生事業が大きくなっている傾向にある。

・ CINGA の事業内容

事業の大きな柱として外国人相談がある。今年でいうと、ウクライナなど、難民・避難民を支援する相談センターをなんみんフォーラム、笹川平和

財団と共に行っている。中間支援組織として、全国でウクライナ避難民を受け入れている自治体や企業、日本語学校などの職員・支援者を支援する活動をしている。また JICA と民間企業等が運営する「JP-MIRAI」では、日本のサプライチェーンで働く外国人の人権蹂躪が起きていないか、労働搾取が起きていないかなどを監視しながら同時にアシストする事業を受託し、相談を受けている。

こうした外国人相談事業に加え、もう一つの大きな柱は地域日本語教育である。地域での活動の中で、地域日本語教育は外国人相談と表裏一体であることを感じてきたため、CINGA もその精神を受け継いで活動している。

・ 東京と CINGA

東京が誇れるのはネットワークの強さである。外国人支援・協力をする組織がネットワークを作っている。2003 年に東京都国際交流財団の解散により、東京都を広域で見る組織がなくなった。その中で各自治体の国際交流協会や窓口、NPO、大学などの団体がフラットな協力活動を通してネットワークを作ってきた。名刺交換をするだけでなく、活動を互いに支えている。これに CINGA は強くコミットしてきた。

・ 東京の多文化共生において問われていること

CINGA のコーディネーターとして感じることを4つのポイントで提示する。

1 点目、自治体間の支援格差への対応である。上記に述べたようなネットワークが力強い活動をしてきた一方で、そこに頼りきりになることで自治体間の格差が大きくなってきたのではないかと思う。

2 点目、外国人専門組織の視野の拡大と多様な外国人対応力向上の必要性である。外国人専門組織の活動が充実する一方で、視野が狭くなっているのではないか。医療や福祉など他職種や他領域の組織と外国人対応を一緒に考えていき、共に対応力を向上させていく必要がある。

3 点目、国籍・言語を越えて個人として捉えることの必要性である。CINGA の組織には約 20 の国籍の人がいて、外国人支援をしている。その中で「ネパール人」や「ベトナム人」と一括りに発言してしまうが、国籍や言語を越えて個人として考えなければならない。そうしなければ、いつまでも個人が埋没した状態で広がってはいかない。

4 点目、マジョリティ側の自己認識の問題である。日本人又は日本語を母語とするマジョリティ側が意識の変革をしなければ、本当の意味での包摂や社会の一員へということをつくっていくことはできない。

・ 求められる具体的な行動

まず、東京は自治体による格差が激しいので、広域対応体制を充実させていく必要がある。日本語教育の充実も区・市によって本当に違う。ライフステージにあった支援を、せめて都内では標準化すべきと訴えていくべきである。

次に、東京のネットワークを的確に活用し、1 つの問題に対して多角的なアプローチにより解決していくこと。同時に、地域の担い手に対する専門教育、在留資格や言葉の問題を知る機会を提供する必要がある。外国人との協働が組織内のダイバーシティの推進と活力になることを感じて実行することが大切である。

また、国籍・言語を超えて個人として捉えるとき、出会いがないと一人ひとりがつながっていかないため、原点回帰し国際交流の機会を地域で作る必要がある。出会いだけでなく、プロジェクトを一緒に行うことで、市民同士の話し合いができるような活動を広めていくべき。

最後に、CINGA には 20 か国・61 人の職員がいるが使う言葉は日本語であり、会議においても日本語が得意な人の発言が多い。これは、日本語が知らないうちに力を持ち、日本語話者で形を作っているということである。マジョリティ側はこの事実気が付かなければならない。同時に、組織の中で外国人にわかり易い日本語を使おうとするあまりに、言葉遣いが上から下へととなっていることもあるかもしれない。やさしい日本語はマジョリティ側である日本人が言葉の力に気が付いて、一緒に議論するために言葉を調整すること。待ったり聞いたりする姿勢も必要である。

R4年度 国際化市民フォーラムA分科会

多文化共生をとらえなおす

～自立支援から包摂、社会の一員としての外国人へ～

NPO法人 国際活動市民中心(CINGA)
コーディネーター 新居みどり

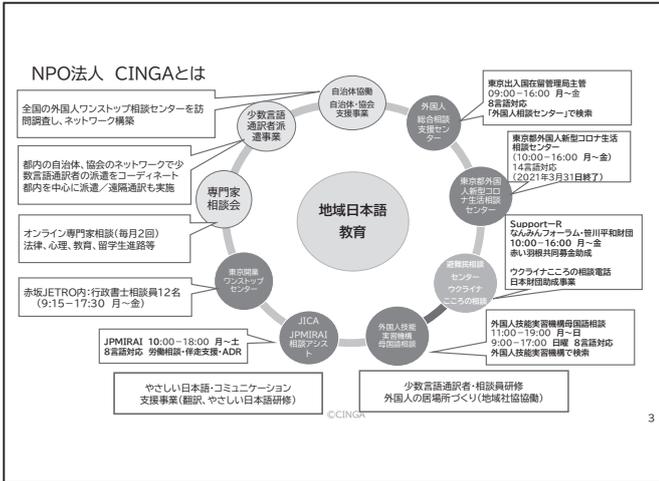
CINGAとは・・・

<http://www.cinga.or.jp/>

NPO法人国際活動市民中心 2004年設立
Citizen's Network for Global Activities <CINGA/シंगा>

■特徴:外国人の支援を行う専門家集団/ネットワーク組織/中間支援組織
弁護士、行政書士、心の相談、労働相談、社会福祉士、社会保険労務士、通訳者
日本語教師、メディア関係者、協会職員などが専門性を活かして市民活動を行っています。

■会員数47名、職員数(非常勤含む)61名、2022年度事業予算 3億1000万円
■東京都千代田区神田神保町2-3神田古書センタービル6F 03-6261-6225

- ### CINGA2022事業計画
- 受託事業
- (1) 外国人技能実習機構母国語相談事業
 - (2) 多文化共生総合相談支援センター事業
 - (3) CINGA 日本語学習支援者研修プログラム普及事業
 - (4) CINGA「生活者としての外国人」のための日本語教育事業
 - (5) ①JPMIRAI相談教育センター(jica ロット)
②JPMIRAI相談教育センター(企業ロット)
 - (6) 山梨県立大学多文化共生講座
 - (7) 富山県外国人相談センター支援事業
 - (8) 講師・専門家派遣協力事業(国際交流協会・自治体等)
 - (9)「やさしい日本語×医療」映像化事業
 - (10) その他受託事業
- 助成金事業
- (1) オンライン専門家相談会(中央共同募金会)
 - (2) 避難民相談センター(中央共同募金会)
 - (3) ウクライナ寄り添い電話相談(日本財団)
 - (4) 新型コロナワクチン相談センター(みんなの外国人ネットワーク)
- 自主事業
- (1) 東京都リレー式専門家相談会(12月10日(土))
 - (2) 地域日本語教育(基礎日本語教育領域)開拓事業
 - (3) 少数言語通訳者派遣コーディネーター事業
 - (4) 研修会事業(生活オリエンテーション用語集・考える会)
 - (5) 専門家相談会実施支援事業(港区国際交流協会 ほか)
 - (6) その他事業(海外調査研究事業)
- 組織内事業
- (1) CINGA相談員・職員のためのメンタルヘルズ対応事業
 - (2) プライバシーマーク取得事業
- 4

多文化共生において、いま問われていること

1. 支援の自治体間格差への対応

2. 外国人専門組織の視野の拡大と多職種の外国人対応力向上の必要性

3. 国籍・言語を越えて個々人として捉えることの重要性

4. マジョリティ側の自己認識

□東京都の広域対応体制の充実

□ライフステージに合った支援の標準化

□問題解決のための多角的アプローチとネットワーク

□専門職教育における教育機会の提供

□組織内のダイバーシティ推進と組織活力への転換

□交流や人びとの出会いの場の拡充

□協力して活動する機会と対話の場づくり

□「ことば」のもつ力への認識「日本語教育」「やさしい日本語」

□「わたし」からスタート

➡ 自立支援から包摂、社会の一員としての外国人へ



・ 町田市について

町田市の人口は約43万人。外国人の数は8,000人を超え、人口に占める割合は1.8%。国籍別に見ると、中国、韓国、ベトナムの順に多く、世界の約105か国・地域から来た人々が居住している。在留資格は、永住者と留学、技術・人文知識・国際業務が多い傾向にある。

・ 町田国際交流センターの事業内容

町田国際交流センターでは、地域の一員として日本人と外国人が支え合えるような環境をつくる「多文化共生社会」を目指し、4種類の事業を7つのボランティア部会とともにやっている。

国際交流センターの活動はボランティア会員を中心に運営しており、現在の会員は340名ほど。子育てが終わった方、就労をリタイアした方、海外暮らしの経験者、教師、経営者、大学生などが集まり、活発にボランティア活動をしている。新型コロナウイルスの流行により、元々約700名いた会員は半分に減り、対面の支援活動が思うようにできなかった時期もあったが、コロナ禍でもできることを探り、オンラインによる相談や日本語学習支援を実施してきた。国際交流部会では、新た

に交流する方法として対面とオンラインの両方で、やさしい日本語や多言語で楽しく友達の輪を広げることが目的の「おしゃべりくらぶ」を立ち上げることもできた。活動を通して、ボランティア（市民力）の果たす役割の大きさを改めて感じた。

・ 経験を通じて感じたこと

プロパー職員として長年現場で経験してきたことや、私自身が外国人であることを強みとして捉え、2018年からセンター長を務めている。初めて国際交流センターに来る同国の方に母語で声をかけ、相手が笑顔になる様子を見ると、来日したばかりの苦労を知っているからこそ、私自身がほっとする。後に親しくなるにつれて相談相手になっていく。外国人にとって同じ民族・言語の人と一緒にいると安心するが、それでは日本社会に溶け込むことはできない。日本人と外国人が触れ合う場を増やすことが国際交流センターの役割であるが、外国人会員が少ないことが課題である。今後も外国人会員の担い手育成や活躍できる場づくり・機会を提供し、自己実現ができるよう、一層力を注ぎ、皆で楽しい活動をしていけるように努めたい。

外国人は日本語を流暢に話せないが、分かりやすい日本語で接してもらえると、日本社会に溶け込みやすくなる。外国人への支援は重要だが、多文化共生の実現にあたっては外国人も地域社会の構成員として、地域社会を支える主体であるという認識が大切。日本人も外国人も、日本社会とともに生きるパートナーとして、互いに支え合う関係性こそが多文化共生の重要なポイントである。

一般財団法人 町田市文化・国際交流財団



町田国際交流センター

〒194-0013

東京都町田市原町田4-9-8 町田市民フォーラム4階

TEL: 042-722-4260

FAX: 042-722-5330

E-mail: info@machida-kokusai.jp

Http: //www.machida-kokusai.jp



自己紹介

- ▶ 出身地 中国東北地方 遼寧省 瀋陽市
- ▶ 90年に日本語専門学校の就学生として来日、その後大学へ進学
- ▶ 大学卒業後、約3年間日本の中小企業に就職
- ▶ 99年に 町田国際交流センターの前身の「町田国際協会」に就職して、今年で24年目になる

町田市について

人口は
約 **43** 万人



外国人数
8000 人超
(全体の **1.8%**)

町田国際協会 設立

1998年7月 町田市国際親善協会設立検討委員会 答申

市民が国際交流活動の中心となり、
主体的、創造的な活動を行うとともに
民間団体や住民等との緊密な連絡調整を行うこと

財団法人 町田市文化・国際交流財団 設立

2004年4月 町田市民ホールと統合

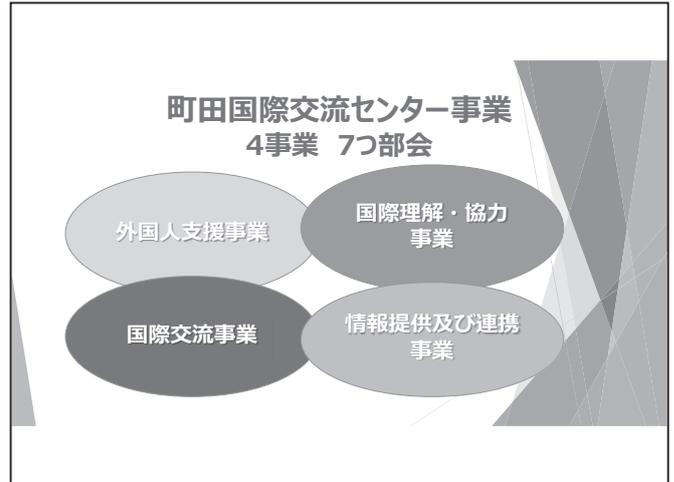
地域レベルの国際交流を積極的に進め、
地域に居住する日本籍市民と外国籍市民との友好親善の絆を深め、
文化の薫り高く国際感覚豊かなまちづくりに貢献する。

(定款第3条)

一般財団法人 町田市文化・国際交流財団

2011年4月 公益法人制度の改正

- 町田市民ホール
- 和光大学ポプリホール鶴川
- 町田国際交流センター



- ## 1. 外国人支援事業
- ▶ 日本語教室部会
 - ▶ 外国人相談部会
 - ▶ 子ども教室部会

1-1 日本語教室部会

- ▶ 日本語教室
- ▶ 日本語発表会
- ▶ 文集作成
- ▶ 教材・図書
- ▶ ブラッシュアップ講座

グループ形式の日本語教室の学習風景

- ### 1-2 外国人相談部会
- ▶ 相談活動日 ⇒ 火曜（要予約）・木曜・土曜
 - ▶ 同行通訳 ⇒ 市民病院・市役所・学校など
 - ▶ 翻訳 ⇒ 9言語対応可能
 - ▶ 専門家による相談会 ⇒ 外国人のためのリレー専門家相談会
 - ▶ 専門家による研修会の開催

1-3 子ども教室部会

市内小中学校の外国籍児童・生徒、
帰国子女の日本語のハンディを補うために
学生ボランティアが中心となり、
日本語や教科学習の支援を行っている。

活動日⇒ 土曜日 10:45~12:15 祝日、第5週目はお休み
10:00~10:30 プレスクール（オンラインによる支援）

2. 国際理解・協力事業

1-1 外国語部会

1-2 国際理解・協力部会

1-1 外国語部会

世界各国の言語に接し、異文化理解を深め、多文化共生構築
のための担い手づくりに寄与することを目指す。

- 英語 (2クラス)
- 韓国語 (2クラス)
- スペイン語 (1クラス)
- タイ語 (1クラス)
- 中国語 (2クラス) 5言語8サークル

1-2 国際理解・協力部会

世界には様々な民族、文化、宗教、価値観があり、それぞれが共生していく上で、
互いを認め合い理解し、対等な関係を築き、地域社会の構成員として生活する
上必要な知識等を共有する。

町田市内のNGO・NPO団体が行う国際交流・協力活動と連携し、
団体紹介やステージイベントを通じて市民との交流を行う。

- ▶ トークプラザ（留学生・働く外国人）
- ▶ 懇談会/講演会
- ▶ 町田発国際ボランティア祭「夢広場」



3. 国際交流事業（国際交流部会）

外国籍住民と日本人との交流の場（機会）を提供し、
地域で支え合える環境を作る。

- 外国人のための交流ツアー（みかん狩りなど）
- おしゃべりくらぶ（オンライン）
- 日本伝統文化体験（お茶会、囲碁など）
- ホームビジット&ホームステイの受け入れ
(市内大学の短期留学生)



囲碁で遊ぶ国際交流

4. 情報提供・連携事業

■ 広報部会

町田国際交流センターの活動を会員や市民、
外国人、近隣の人々にPRする。

- ・情報誌「ぼろんていえ」編集（年6回）
- ・センターニュース発行（年6回）
- ・他団体機関との連携
- ・ホームページ管理・運営

5. 事務局

- ・地域イベント及び推進事業
- ・日本語学習支援ボランティア基礎講座の開催
- ・外国人サポーター事業（外国籍の方）
- ・地域日本語コーディネーター事業（2021新規事業）
- ・市内小中学校国際総合学習理解授業への外国人講師派遣
- ・連絡調整委員会の開催（7部会への支援・環境整備）
- ・その他国際交流センターの目的を達成するための事業



お茶体験



FC町田ゼルビア試合観戦



外国人によるトークプラザ



盆踊り大会



天満宮例大祭山車巡行





・ 在日ネパール人の傾向から見えること

在日外国人を国籍で見ると、中国・ベトナム・韓国・フィリピン・ブラジルに続いてネパールが多い。2000年はネパール人が2～3000人であったが、今では125,000人もいる。在留資格別では、家族滞在、次いで留学。来日するネパール人は、ネパールの中でも都市部での生活・居住経験がなく、いきなり日本での生活を送る人が増加しているのが苦勞している人が多い。日本でもネパール人に地域の活動に参加してもらいたいと思うが、生活者の中には“vulnerable”、脆弱な立場の人が多くことも理解してほしい。

・ NRN について

海外在住ネパール人協会は75か国にあり、日本でも2004年に設立された。現在も北海道から沖縄まで支部があり日本とネパールの架け橋になっている。東日本大震災のときには、東北に住むネパール人を都内に避難させるためのバスのチャーターや、ネパール人が東北に炊き出しに行く手配をした。参加したネパール人からは、「日本のために役に立てたことはすごくいい機会だった」と言われる。日本語ができる人がブリッジ人材として日本とネパールのつなぎ役になることが重要である。

・ NRN の活動内容

2016年にはネパール人留学生のための就職面接会を開催。貸会議室にネパール人の留学生約500人が集まり、数十名の就職に繋がった。驚い

たことに参加者の中には履歴書を持ってこない人もいたため、履歴書を書くキャンプも行った。日本人ボランティアがチェックした履歴書をそのまま就職活動にもって行く人もいた。

また、在日ネパール人留学生による日本語スピーチコンテストも毎年開催している。公私ともにきちんと日本語ができるネパール人がいることを日本社会に示すことも重要であると考えている。

ネパールフェスティバルも開催。昨年は中野で実施した。フェスティバルは全国で行われる。民族衣装や食べ物(カレーや餃子)などとおし、ネパールが多様性のある国であることを紹介する機会になっている。標高3,000mの辺りに住んでいる人と、インド近くの海拔60mの辺りに住んでいる人では郷土料理も全く違う。ネパール人の中でも多様性があることを知ってほしい。

そのほか、ネパール人向けの相談会を実施。在留資格に関する相談が多い。更新できるかギリギリの生活をしている人が多くいる。ネパール人が急激に増加したため、どう対応すべきか日本側も困っているのではないかと思う。医療、出産、教育など相談は多様である。一方で、現在の在留資格による収入だけでは生活が困難である、家族を働かせたい、安定した在留資格に変えたいといった相談もある。

・ 外国人生活者として思うこと

ネパール人はコミュニティ内だけで解決せず、自分たちがこの地域社会の一員であるという意識を持ち、日本社会と接点を持ち繋がっていく必要がある。一方で、行政は外国人の政策を作るときは当事者の意見を聞いてほしい。

1,937人。この数字は昨年1年間に日本で生まれたネパール人の数である。コロナ禍でもネパール人が顕著に増えていっているのは、日本で子どもが生まれているからである。そうした子の中にはダブルリミテッドとして日本語もネパール語もできないという問題も出てきている。

国際化市民フォーラムA分科会

在日ネパール人の活動から ジギャン クマル タパ

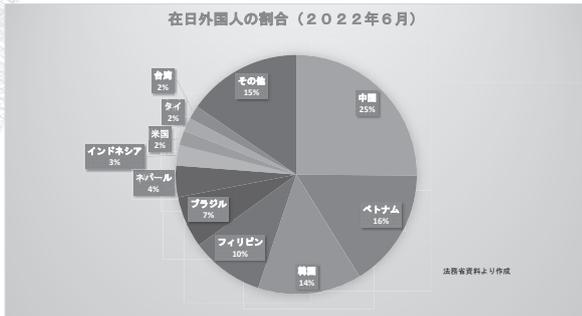
2023年2月4日

自己紹介

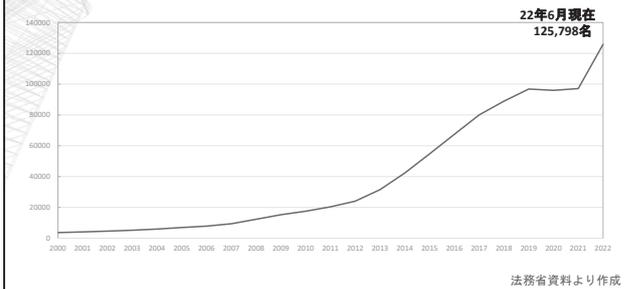
- ・留学生として2000年に初来日
- ・横浜国立大学大学院修了
- ・（公財）かながわ国際交流財団に勤務
- ・ネパール政府公式通訳者
- ・シャプラニール評議員
- ・海外在住ネパール人協会（NRN）顧問
- ・エベレストインターナショナルスクール理事など



在日外国人の割合（2022年6月）



在日ネパール人の推移



在留資格別の在日ネパール人

順位	在留資格	人数
1	家族滞在	37,882
2	留学	32,336
3	技術・人文知識・国際業務	24,127
4	技能	12,703
5	永住者	5,977
6	特定活動	4,569
7	経営・管理	2,159
8	日本人の配偶者等	1,174
9	定住者	1,035
10	永住者の配偶者等	886

生活・ビザが不安定の方にボランティアは頼めない

海外在住ネパール人協会（NRN）が活躍している国・地域



日本支部
2004年に設立
↓
設立メンバー
↓
幹事長を得て
現在は顧問

NRNの取り組み

- ネパールフェスティバルの実施
- 各種ネパール文化紹介
- 勉強会
- 講演会
- ネパールからのVIP来日レセプション
- 在日ネパール人のサポート

東日本大震災の支援

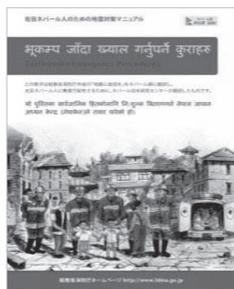


都内に避難

炊き出し

マッサージやヨガ

ネパール語のマニュアル作成



ネパール人留学生のための就職面接会



日本語で履歴書

"LETS GET SELECTED"

FREE RESUME PREPARATION WORKSHOP

RESCAMP JAPAN
2016 // NOVEMBER 26, SAT

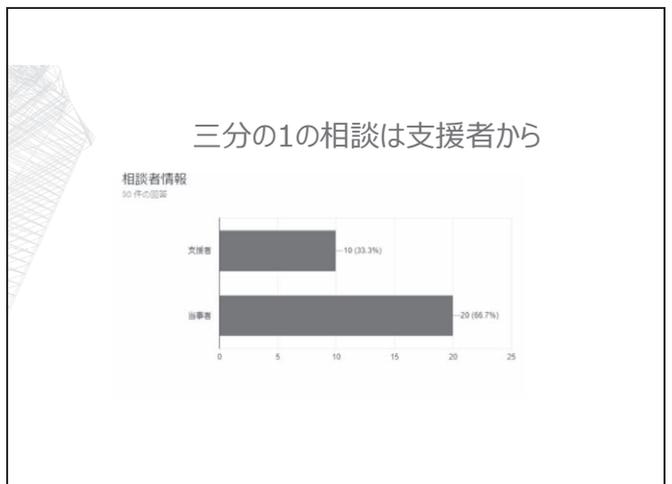
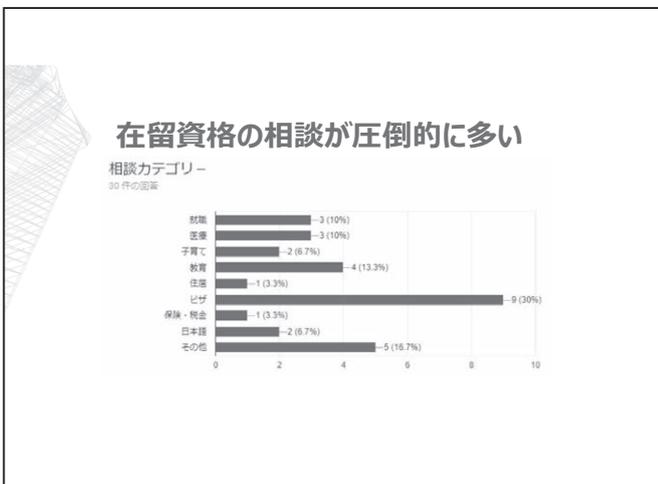
NEPALI MURA HALL (SOLMARI) SHINJUKU, TOKYO
13:00 TO 16:00

Hurry Up!
BOOK YOUR SEAT
REGISTER ONLINE
www.nepaaru.com/rescamp

- Resume (履歴書) Preparation in Japanese.
- Japanese Business Manner.
- Advice From Nepalese Senior(Senpai)
- Interview Training by Japanese Experts
- Free Resume Printing

Organized by :





医療の相談

- 妊娠中に受診した病院で患者と医者間で言葉ができず困っている。
- 留学生が精神病になってビザが切れて不法滞在になった。

教育の相談

- 家族滞在の男子が入学しようとしているが 本国の高校(12年制)卒業しておらず、入学できる学校はないか。
- 中学校にネパール人が転校しており、日本語ができない。入学式に併せて学校の伝えたいことなどネパール語に通訳して欲しい。

在留資格関連の相談

- 技能ビザのcockさん、配偶者来日に伴い日本語学習させたい、無料の日本語教室を探している。
- 専修学校卒業後の進路が決まらず、在留資格の有効期限が切れそう。日本で働きたい、方法はないか？
- 難民申請中の方が他のビザに切り替え安定した生活を取り戻したいが、どんな方法があるか？



杉並区と大久保

名古屋



小岩

蒲田

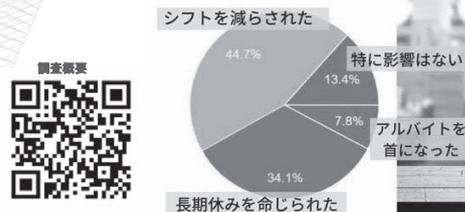
コミュニティー内でどうにかしちゃう！問題

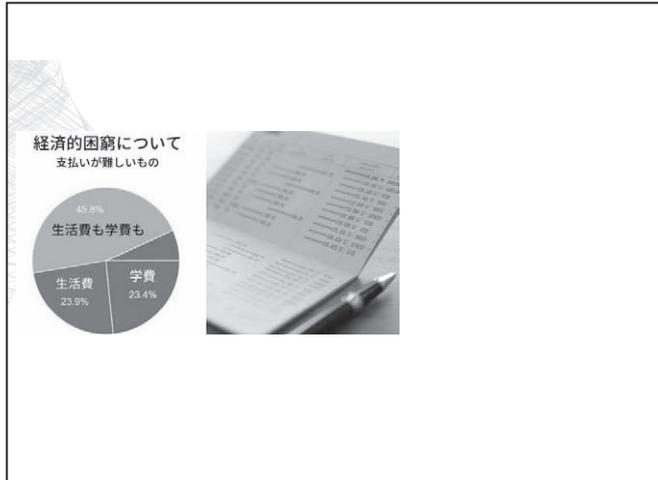
コロナ禍のサポート

- 日本にいるネパール人医師と連携、カウンセリング
- 日本語の情報をネパール語に翻訳、随時配信
- 三者通話による通訳サービス
- 政府との調整をサポート（文章作成も）
- 食料、資金援助
- 再雇用の機会を提供
- 日本政府・自治体の支援（情報提供）

在日ネパール人留学生のコロナの影響

新型コロナ感染拡大のアルバイトへの影響





- ### 外国人の社会参画
- ・川崎市の外国籍代表者会議
 - ・神奈川県では外国籍県民会議
 - ・様々な提言が行政の政策に活かされるケースもある
 - ・例：医療通訳、住居支援、多言語表記、やさしい日本語など
 - ・KIFでは子育てチャート、多言語医療問診票、防災マニュアル、高校進学ガイドなどを作成・配布

- ### 市民参加型で施策を考える
- ・外国人の幅が広い
 - ◆ 国籍だけではなく、文化、宗教、性別、年代、来日の時期や経緯、今後のライフプランなども考慮
 - ◆ 個人の意見か、ある程度コミュニティを代表しているか
 - ◆ 合意形成の枠組みが大事
 - ◆ 行政に注文をする×協同する考え
- 日本語や行政の仕組みの理解度が課題

増加するネパール繋がり子ども達

1,937人

昨年日本で生まれたネパール国籍の児童

期待も課題も多い

Topi Diwas @Kanagawa Nepal Community

多民社会×耕論 第2回～ネパールから日本をめざす理由 2023年1月27日午後7時～

第1部 ネパールってどんな国？

動画アクセス

岡田玄

ジギャン・クマル・タバさん

● パネルディスカッション

山本：新居さんに伺いたい。マジョリティ側の自己認識の話があったが、どのようなところから変革すべきか。

新居：2つの側面がある。一つは、多文化共生領域に関わっている人から始めていくこととして、日本語を使って意思決定をする際、きちんと外国人の声を聴いているかということである。外国人がその場にいればよしとされていないか、本当にプロセスに関わっているかということを見直す必要がある。

もう一つは、組織として本当に多様性が進んでいるのかということである。例えば東京には多くの国際交流協会があるが、会員はほとんどが日本人になっていないか。日本語教室やお料理教室など色々な教室が開かれているが、そこに来る外国人はお客さんになっていないか。イベントが終わったら外国人は帰ってしまって、日本人だけで話し合ったりしていないか。そうではなく、皆が楽しい場所に日本人も外国人もいて、そうした中で活動が行われるように意識づけを変えていく必要がある。そうしなければ、これから本当の意味での協働はできない。その意味で富田さんやジギャンさんがいっていることはその通りで、組織的な力の部分と個人の思いの両方を動かしていく必要がある。

山本：ジギャンさんに伺いたい。ネパール人コミュニティの中だけで問題を解決せずに、社会との繋がりを持つためには、どのようにすればよいか。

ジギャン：感じているのは、トライアンドエラーを全部自分たちでやる必要はないということ。ネパール人に限らず、在日外国人は同じような課題を乗り越えており、多くの経験が蓄積されている。例えば子どもの教育は母語か日本語か、家庭での言語は何語にすると子どもの学習・言語能力が向上するのか。それらをネパール人がゼロから解決していく必要はない。日本に住んでいる多くの外国人コミュニティと繋がることで、そのノウハウを教えてもらうことができる。

一つ例を挙げると、行政の手続きが難しく、なかなかコロナのワクチン接種ができないネパール人が多かった。その際、韓国の民団という組織が、外国人がワクチン接種できる機会を作ってくれた。行政の手続きが難しい人向けに、そこで簡単に接種できることをネパール人コミュニティに紹介したところ、成功した。大事なのは日本社会と外国人コミュニティを繋いでくれる存在である。日本の国際交流は一つの箱の中に留まっているので、そこから出ていって、こうした繋ぎ役、フィクサーとなってくれることを期待している。

山本：吉富さんに伺いたい。外国人が入ることで日本人社会への気づきがあったと言っていた。神戸のたかとりコミュニティセンターでの気づきと学びについて教えてほしい。

吉富：例えば医療通訳の仕組みづくり。母語と日本語が堪能な外国ルーツの人が病院に通訳に行くのは、患者のためでもあり、医師のためでもある。日本の医療機関では時折、医師が詳しく説明してくれないことがある。例えば、「様子を見ましょう」という一言は訳すことができない。どういった意味なのか、何をどうすればよいのか、通訳者は医師に聞くようになる。そのようなことを繰り返すうちに、医師の説明が徐々に丁寧でわかりやすくなったと通訳者から報告があった。この医師は日本人にもわかりやすい説明をするようになるだろう。ある一人の外国人患者を通じて医師が変わってくれたことは、日本社会でもプラスになる。

たかとりコミュニティセンターの中には、ベトナム語、スペイン語、ポルトガル語などのコミュニティがあるが、当事者と一緒に仕事をする中で当たり前を捉え直すことができる。ディスカッションで決めるときに異なる意見を聞くことは時間がかかるが、効率以上に得られるものがある。

山本：それらは社会参画を目指すプロセスにもつながるのか。

吉富：つながるだろう。何ごとも一から一緒に組み立てることが必要。私たちが海外で暮らすとしたら、日本語で話すコミュニティにいればそこは居心地がよく、安心・安全で相談もしやすいが、それでは社会との接点ができない。日本人も外国人も一緒になり、母語や母文化が尊重されながら、お互いの社会のことも伝え合えるような、そういったプロセスがたくさんあることが望ましい。翻訳のコーディネーター一つとっても、日本語の言い回しや文脈は国によっては真意が通じないことがある。例えばコロナのときに「自粛しましょう」とよく言われたが、「自粛では、ベトナム人はみんな外へ出てしまいますよ」と言われた。そういう細かいことから気づかされるが多々ある。

山本：昨年のA分科会では社会福祉協議会に発表をしてもらった。先ほど新居さんから福祉領域との繋がりが重要になってくるという話があったが、改めてどう考えるか。

新居：吉富さんも言っていたが、エスニックコミュニティは居心地がよいのでその中で生活をしていて、日本社会とつながってないことも多かった。それがコロナ禍で給付金や貸付などの対象となったことで、そういった人たちも市役所や社会福祉協議会（以下、社協）の窓口に出向き、手続きをする必要ができた。コロナ禍を経て、社協の方が「こんなにも外国人住民や日本語ができない人が地域にいることを知らなかった。」と言っていた。日本人と同じ対応でよいとは言え、福祉領域の方は外国人特有の問題を知らない中で一から勉強し、一生懸命対応した。そうした際、ジギャンさんが仰っていたように、私たちの持つ知識やノウハウを提供して一緒に行くとスムーズである。そのため、「私たちと一緒にやりましょう」と声をかけて共に勉強することがコロナ禍で広まった。特に福祉と医療領域の人が呼応して繋がったのがコロナ禍であった。

吉富：コロナ禍で社会福祉分野の方が外国人住民の存在に気が付いたことは大きい。多文化ソーシャルワークという言葉があるが、まだ多文化ソーシャルワーカーの育成はメジャーになっていない。社会保障制度が税金を払っている人に行き届いていないことは問題であり、社会福祉の分野に多文化共生が入り込むこと、国際交流協会と社会福祉協議会とがより一層連携することが必要である。しかし、社会福祉協議会という組織の位置づけと、国際交流協会の形態は異なるので、一概に対等な形で協働することが難しいといった課題がある。組織のバックグラウンドも意識しながらどう連携していくのか。国際交流協会の強みを活かして社会福祉の分野をつくっていくべきだと考える。

山本：富田さん、町田で福祉分野での連携の工夫があったら教えてほしい。

富田：町田国際交流センターでは、同じフロアに社協がある。社協には日本語がわからない英語圏の方が支援金等の申請に来たりした。同じフロアで連携があったため、町田国際交流センターの英語ができるスタッフが対応した。町田市には裕福な外国人が住んでいると思っていたが、コロナの厳しい状況の中でこんなに困っている人がいるのだと実感した。

山本：ジギャンさんに伺いたい。ネパールのコミュニティと医療福祉の連携は考えているのか。

ジギャン：ネパールコミュニティでは困ったことがあれば随時対応しているが、フルタイムの職員がおらず財力や人材等が十分でないのが現状。担わなければならない最低限の行政サービスは在日ネパール大使館が行うが、全国では色々な問題が発生している。まだ今年は始まったばかりだが、既に1ヶ月間で5、6人のネパール人が亡くなった。そういった問題はメディアにも出ない。日本は「日本に働きに来てください」というが、来日した人への対応は理由をつけて責任逃れしている。このような状況に対し采配できる人がいたり、組織とつなぐ役ができたりすればよいが、日本語を話すことができる人が少ないので、課題は深刻である。

吉富：外国人のリーダー的な人が自助組織や外国人コミュニティ、当事者を中心とする組織を作るのは大変である。ずっと頑張っていないといけない。たかとりコミュニティセンターでは、ラジオ局で多言語の番組を作るというプラットフォームの中から生まれたリーダー的な人に、まずは条件付きで職員になってもらい、生活できるようにした。活動を共にした後は、独立して自分たちで資金を得ていく。ブラジルコミュニティは5年、ラテンコミュニティは10年かかった。そういった長いプロセスを経ていくということを感じて、日本社会をよりよくするために協力してほしいという思いで、日本人側が積極的に活動することが必要である。

新居：東京はウクライナ避難民を多く受け入れ、都営住宅を提供している。地域の人は冬が来るので、ウクライナ避難民に洋服やコートを買いたいと思っていた。これを受け、ある地域では、そこで活動する市民活動組織のコーディネーターが都営住宅の近くのネパール料理屋に、ランチタイム後の2時間場所を貸してほしいとお願いした。ネパール料理屋は快く貸してくれ、日本人がコートを持ってきて、ウクライナ人が取りに来て、そこでお茶を飲みながら2時間ほど会話をして解散した。吉富さんがおっしゃるようなエスニックコミュニティを作っていくことも重要である。ジギャンさんが言うように日々の生活は忙しいが、何かできることはきっとあるはず。そしてそれを調整してくれるコーディネーターの存在が重要であると感じる。偶発的に生み出すことは難しいが、社協、国際交流協会、NPOなど場を取り持つ人がいることが重要である。

山本：私たちの生活は地域が土台であり、地域でアプローチできるのは自然なことである。東京でも外国人が地域に定住、定着していく中で、長く外国人との共生を進めてきた神戸での工夫があれば教えてほしい。

吉富：地震のときは外国人と避難所で助け合い、一方でルールなどの決定事項で揉める経験もした。こうした経験を経て、夏祭りなどでは「ベトナム料理も出して」「ペルー料理も出して」と言って、これまで参加する側の外国人が主体的に活動するようになった。町からは「ベトナム料理はこんなに美味しいのか」と発見もあり、とても豊かになった。しかし、10年20年経つと「なぜ夏祭りにこの人がいるの？」という話が出てくる。プロセスを説明し続ける、メンテナンスをし続ける必要があり、常に課題に対する意識を皆が持つことが重要である。

山本：プロセスを経てもなお、メンテナンスを続けなければならない。富田さん、何かやってみようか。

富田：町田国際交流センターは、多文化共生を目指してボランティア部会と事務局とが共有認識を持ち、豊かな生活のために活動していく必要がある。今7つのボランティア部会と事務局が一体となり、やさしい日本語の講座などを通じてよりよい多文化共生を目指し活動している。皆で行うことが重要。町田市に増加する外国人によるニーズが増えており、これからの町田国際交流センターの役割も大きくなると感じている。

山本：東京の強みは関連団体のネットワークの強さだと言っていた。他の地域では連絡会議があっても情報交換で終わってしまうこともある。東京のネットワークについて新居さんに伺いたい。

新居：東京のネットワークの強さは行政も国際交流協会もNPOも大学も弁護士会も、各団体や組織が平場で会話できること。平場とは、自由な意見交換をする、顔が見える関係づくりである。協会職員は1人2人と少人数で活動する団体が多い中、ネットワークに行けば皆で議論することができる。現場職員の関係性こそがネットワークである。東京は歴史的な背景に加え、大都市圏で多くの組織がある

ためこのようなネットワークが形成されたという経緯がある。地域でネットワークを作る際は、参加する職員が楽しいことを基準にすることが大切である。それがないと地域にもつながらない、コーディネーターも生まれない、エスニックコミュニティにもつながらない。楽しさが多文化共生の力である。

また、東京のネットワークの強みは協働の事業体を持っていること。外国人のためのリレー専門家相談会などを担っている。平場で話す場があるだけでなく、一緒に事業を作って取り組んでいくことが大切である。

山本：この国際化市民フォーラムを企画・運営する TOKYO 連絡会もそうやって発展、成長してきた。ジギャンさん、神奈川の事例はあるか。

ジギャン：神奈川にも外国人が住んでいて、コミュニティの歴史も長い。年に一度か二度、コミュニティの横のつながりの場をかながわ国際交流財団が提供している。日本に来て困ること、社会制度、年金の問題などを話題にしている。近年の外国人のトレンドを見ると定住していく方向にある。定住するというのを前提に、制度の仕組みを理解すること、コミュニティの連携を神奈川県では行っている。

山本：吉富さん、こういったネットワークの参加・参画の方法のアドバイスあれば教えてほしい。

吉富：食べ物やファッション、お祭りなどは入りやすい。地域の避難訓練は参加しない人が多く、神戸でも来るのは年配の人だけ。そこでベトナムの人が炊き出しを行い、楽しいイベントにすることで地域と外国人とのつながりができる。それが目的ではなく、気づきやきっかけが次につながるような仕掛けをたくさん作る必要がある。

山本：ジギャンさんに伺いたい。災害支援に関わったと話していたが、そこで感じられたことはどんなことか。

ジギャン：東北や熊本の震災で多くのネパール人がボランティアとして関わった。ネパールでは宗教上奉仕することは当たり前のこと。ただ、日本に来ていると支援の対象と見られがち。お金がなく言葉は堪能でないが、奉仕の気持ちはある。ネパール人が持つポテンシャルをキーパーソンが取りまとめて文化を活動に繋げる。各団体は活動する中でキーパーソンと接点を持ち続けることがエスニックコミュニティへの情報伝達のよい方法である。

山本：共生の地域づくり担うこれからの世代は、どのような人か。

富田：町田国際交流センターでは外国籍の方が活躍できるように 2006 年に外国人サポート制度を開設した。この制度は日本語ができるという条件があるものの、何らかの形で日本の社会に貢献したい外国人のための制度である。具体的には市内小中学校の「総合的な学習の時間」における国際理解学習の外国人講師派遣や、通訳・翻訳などを行っている。まだ人数が少ないが、こういった人材を増やしていきたい。

新居：未来志向が重要。自分で来日を決めてきた 1 世から、親に連れてこられて小中学校・高校から日本で生活する 1.5 世、日本で生まれる 2 世もいる。1 世は自分が苦労したことから他者への支援に熱心な人が多いように思う。1.5 世や 2 世は一つの仕事としてこの領域を捉えている人が多いように感じる。それは自立から包摂、包摂から一員という流れに自然に身を置いている。彼らを応援し社会の中でみえる存在にしていくことが重要。一方で閉塞的な状況に身を置く人もいる。スポットライトが当たらない人のことを忘れてはいけない。

山本：1.5 世、2 世が増加する中、ルーツとなる文化や言語への配慮はどうすればよいか。

ジギャン：日本語がどれだけ重要かは人によって異なる。日本人は外国人の日本語能力を簡単に比較するので、頑張っている人が挫折してしまう。皆すでに日本で生活できているのが現状で、日本人は日本語

に重きを置きすぎているのではないか。日本社会はもっと日本語に寛容であってよいと思う。一方で、権利として日本語教育の場を作ることが必要。

山本：たかとりコミュニティセンターでは外国につながる子どもたちの支援を早い時期からしている。このことについて聞かせてほしい。

吉富：日本社会は完璧な日本語、日本語の読み書きができるまでの高いレベルを求め過ぎている。それを求めるのであれば、きちんと日本語を学ぶ機会を作るべき。また親に連れてこられた子どもたちに対し、教育現場で「ここは日本だから日本語だけにしましょう」とよかれと思って言ってしまうケースも多い。子どもは言語形成の途中にあるので、これまで身につけた母語を土台とし、伸ばしながら日本語を学習する必要がある。

山本：社会包摂とはどのようなことから進めていけばよいのか。

新居：社会包摂という表現は、日本語の曖昧さを表している。包摂・多文化共生・統合などに共通理解がない。それを議論する必要がある。包摂は何かと問われた時に、一人ひとりが言葉にできることが大切。私は福祉の領域の言葉だと思う。無関心な人たちからも、そこにいてもよいと否定されないことだと思っている。距離感を保つこと、普通でいられる関係性もご近所作りやコミュニティ作りの中で重要と考える。

山本：多文化共生という言葉も同じく曖昧である。最近この言葉も広がりを見せているが、果たして共通認識はあるのだろうか。

吉富：私は寛容性だと思う。「ゆるゆる社会」と言っている。たかとりコミュニティセンターは皆が緩やかで、違いが居心地のよさとなっている。多文化共生もマジョリティ側がマイノリティに同化を強いる使い方をされることもある。そのような言葉とならないように、皆がこの社会を担っていく人であり、いてよい、全員の居場所や出番、役割を担える社会のことだと捉えている。

山本：日本の社会で「ゆるさ」という言葉、柔軟性について感じることはあるか。

ジギャン：「衣食足りて礼節を知る」という言葉がある。20年日本にいと日本社会から私に対する目も変わる。一方、多くの外国人、特に留学生は安いアパートに何人かで一緒に生活しており、そこで出会う日本人も経済力がなく、生活に余裕がない。それが気持ちに反映されてトラブルが起きることもある。もっと社会側が寛容な気持ちになってほしい。今日、このフォーラムに参加している人は、海外に行った経験やオープンな考え方を持つ日本人が多いのではないと思う。そういった方が、言葉ができなくても関わりあえると世の中に広く紹介して、ゆるい関係性を作っていけるとよいのではないか。

山本：皆さん、最後にこれだけは言っておきたいということ、一言ずつお願いしたい。

新居：私が今日伝えたかったのは、対話が大事、一緒に議論することが大事だということ。それが今日ここで体現できていたのではないかと思う。

富田：日本で留学生、アルバイトの経験もしてきたが、日本の社会で苦労したことはなく、周りの人にフォローしてもらい、受け入れてもらってきた。たくさんの素敵な日本人と出会えた。日本社会へこの恩を返したいと思っている。今日は自分の気持ちを話せたらよいと思って参加した。まだまだ日本語を流暢に話せない部分があるが、今日の分科会を通じて、私自身も成長したと思う。

ジギャン：支援から共生という言葉がよく使われるが、支援がまだ必要な人がたくさんいることは忘れてはいけない。こういう仕事していると、日本語のできる層の人たちに会う機会が増えるので、意識が向

かなくなることがある。支援と共生の両輪で進めていけるとよい。

吉富：私は日本社会に危機感を覚えている。日本社会が変わらなければいけないと思っている。ルールが必要だと叫ばれるが、ルールは暮らしやすくなってこそルールである。ルールを決めるときに、様々な人の意見を聞かなければいけない。また、「ルールだから」と言って人を排除することはやめるべきである。

寛容な社会というのは成熟した社会だと思う。日本を選んで住んでくれている人たちには、一緒に社会を変えてほしいと期待している。

【A分科会 企画・運営担当団体（50音順）】

- 一般社団法人 OCNet
- 共住懇
- 独立行政法人 国際協力機構 JICA 東京
- 一般社団法人 小平市国際交流協会
- 特定非営利活動法人 シャプラニール＝市民による海外協力の会
- 調布市国際交流協会
- 一般財団法人 港区国際交流協会

テーマ 外国ルーツの子どもたちが自分らしく輝くために

昨年度の国際化市民フォーラムB分科会では、外国ルーツの子どもたちをどう高校進学につなげるかを検討しました。そうして高校進学したものの将来活躍するためには解決しなければならない問題があります。色々な社会的な機構上の制約や障害を乗り越えて、一人の子どもが社会に出て活躍するためにはさまざまな人々の助けが必要です。

今年度はそれぞれの立場から外国ルーツの子どもたちが自分らしく輝くために、何をすることが必要か考えたいと思います。

司会進行	仁村 議子	NPO 法人 IWC 国際市民の会 副理事長
パネリスト	角田 仁	東京都立町田高等学校（定時制課程） 主任教諭 文部科学省外国人児童生徒等教育アドバイザー
	柴山 智帆	NPO 法人 glolab 代表理事
	中山 真理子	NPO 法人 多文化子ども自立支援センター 代表理事
	安里 ルイス	味の素ファインテクノ株式会社 社員

参加者 136名

● 事例発表

角田 仁 東京都立町田高等学校（定時制課程） 主任教諭
文部科学省外国人児童生徒等教育アドバイザー



・ 都立高校における外国につながる生徒の現状

都立高校の外国籍の生徒数は2004年から2021年まで一貫して増えている。そしてその多くが定時制高校に在籍している。次に日本語指導が必要な高校生も2002年から一貫して増えている。2009年ぐらいから増え、特に2015年からカーブが上昇している。都立K高校定時制では2007年、外国につながる生徒は4か国5人、フィリピン、

中国、ベトナム、イギリス、無国籍が在籍していたが、2013年になると大幅に増加し、多様化している。難民の生徒達もいた。

次に、都立H高校定時制のあるクラスの3年間の変遷について述べたい。2018年、外国につながる高校生は約38%、日本語指導が必要な高校生は33%であった。2年生になると外国につながる高校生は47%、日本語指導が必要な高校生も41%に増加した。3年生になると外国につながる高校生は71%、日本語指導が必要な高校生が64%に増えている。理由は、外国につながる生徒の転校生がいること、逆に日本人の高校生が中退してしまったことにある。この定時制は多文化、多民族、多国籍、多様化が進んだクラスだと思う。H高校だけではなく、いくつかの定時制高校がこのような現状である。特に夜間定時制高校はその傾向が強いと言われる。

・都立高校での生徒の受け入れの現状と課題

高校に入るために生徒は非常に苦労している。都立高校5教科の入試はとても難しい。特に、社会科や国語の古典などは日本人の生徒にも難しく、外国ルーツの子どもたちがチャレンジするのは大変なことだと思う。そもそも高校入試の情報が少ない。都立高校に入るにはどのような手続きが必要なのか、また日本の中学校を経ないで受験する生徒たちはどこに相談したらいいのか、外国人の特別入試を行なっている都立高校は8校あるが、どのようにしたらその高校に受験できるのか分からない。特別入試を行う8校の他にも、都立高校は申請により、入試でルビ振りや辞書持ち込み、時間延長などの特別措置を受けることができる。しかし、中学校の先生に特別措置を受けたいとうまく伝えられるのか、日本の中学を経由しないで直接来日した生徒たちは手続きができるのか。母語で日本の学校に電話した時に、どこまで対応してくれるのか。ホームページを見ても都立高校の入試について理解することができない。さらに、入試の壁を乗り越えた後には入学手続きの壁がある。手続きの書類は日本語が難しく、読めない。どのように記入したらよいか分からない。次に学校の費用の納入の説明があるが学校側の話が早く聞き取れない、印鑑の使用に慣れていない。さらに手続きの時の名前をどこまで配慮してもらえるのか、様々な課題がある。

2023年現在、外国人生徒の入試募集枠がある都立高校は8校であるが、神奈川県は20校、千葉県は28校もある。日本語指導が必要な外国籍の生徒は、都立高校は700名を越しており千葉、神奈川より多い。

入学後も、日本語の授業はあるのか、教科についていけるのか、プリントや黒板の日本語が分かるか、グループ学習で孤立しないか、先生に声をかけてもらえるのかなど、さまざまな心配がある。クラスで友達ができるか、いじめがないか、同じルーツの友達がいるのか、自分らしさを認めてもらえるのか、名前や文化を理解してもらえるのか、

生徒たちは本当に悩んでいる。学校の教育活動には、ホームルーム、学校行事、部活動など授業以外の活動もたくさんある。クラスの委員になる仕組みが分からない、遠足にどうやって参加したらよいか分からない、提出物の出し方が分からない、修学旅行や体育祭・文化祭とは何か、部活はどんなものがあるのか、相談できる大人がいない、など、本当に課題が山積している。

高校中退について、文科省の数字が出ている。高校中退率は日本人生徒の6倍にもなっている。以前、都立B高校定時制では外国につながる生徒の中退率は64%、そのうち日本語指導が必要な生徒の中退率は65%、都立C高校定時制も外国につながる生徒の中退率が44%、そのうち日本語指導が必要な生徒は30%と多かった。高等学校は2023年4月から日本語の特別な教育課程を導入する。日本語指導が必要な生徒が、学校で日本語の授業を受けるための仕組みがようやくできつつある。今までも学校の中に日本語教室を置いたり、地域の人に学校に来ていただき個別学習などを行う高校もあった。今後は学校が責任をもって実施することになる。

次に進路保障の課題がある。高校の先生の中には日本語ができないから進学ができないのではないかと、就職ができないのではないかと、日本語を使わない仕事、会社がよいのではないかと考えてしまう先生もいる。本来は、生徒が持っている力を認めて、秘めている力を発揮できるように支援することが必要である。例えば、母語や英語を活かし異文化間のコミュニケーションの架け橋人材となる可能性を育むなど、本人の持っている力を活かす進路指導が大切である。こうしたストレングスアプローチの視点が大事になっている。

都立高校の教員の有志が開催している外国につながる生徒の進路ガイダンスでは、高校生たちに大学や専門学校、専門機関の方による説明や相談会を提供している。これまで在留資格による制限のため消防士の夢を諦めたり、奨学金を諦めたりする生徒がいた。進路ガイダンスでは、FRESC（在

留外国人相談センター) や、多文化共生教育ネットワーク東京の弁護士と繋がり、連携していくことで、生徒たちが在留資格の壁を少しでも乗り越えていくことが可能になるよう支援したい。

• 壁を乗り越えていく高校生たち

高校を卒業したCさんを紹介したい。彼は都内の中学から定時制高校に入り、バスケットボールが得意で部長としても活躍した。リーダーシップに優れた模範的な生徒だった。しかし卒業後、在留資格による進路の壁に突き当たる。結局、夜間の専門学校に入り、昼はアパレルメーカーで働いた。今、彼はこのアパレルメーカーの店員として外国

人のお客さんの対応を任せられ、活躍している。

• 地域の市民が参加する教育活動

地域の方々やNPOと協力して、多文化共生学習、シティズンシップ学習の授業に取り組んでいる学校もある。高校と地域、NPOがつながり、連携・協働することで授業や行事、部活動など学校の教育が豊かになる。それは日本人の生徒にとっても素晴らしい多文化共生の学習になる。

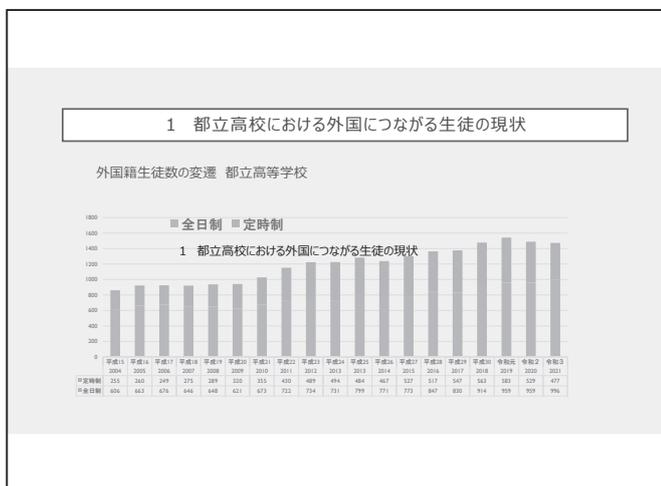
これからの都立高校は、日本語支援と多様性を尊重する多文化共生の教育が柱になっていくと思われる。みなさまには学校の教育活動にぜひご参加ご協力をお願いしたい。ありがとうございました。

2023(令和5)年2月4日
国際交流・協力TOKYO連絡会
一般社団法人東京都つながり創生財団
国際化市民フォーラム in TOKYO

外国につながる子どもたちが自分らしく輝くために
- 都立高校の現状と課題 -

東京都立町田高等学校 (定時制課程) 主任教諭
文部科学省外国人児童生徒等教育アドバイザー
角田 仁

- 1 都立高校における外国につながる生徒の現状
- 2 都立高校での生徒の受け入れの現状と課題
- 3 壁を乗り越えていく高校生たち
- 4 地域の市民が参加する教育活動



東京都立K高等学校定時制課程・・・すすむ多国籍・多言語・多民族

外国につながる生徒数とルーツ数の推移

2007(平成19)年度

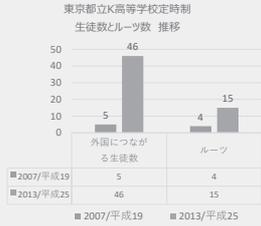
4ヶ国5人

フィリピン、中国、ベトナム、イギリス、無国籍。

2013年(平成25)年度

15ヶ国46人(全校生生徒数214名中)に増加と多様化。

中国、フィリピン、ミャンマー(ビルマ)、ベトナム、タイ、韓国、インド、パキスタン、ニカラグア、コロンビア、ドイツ、フランス、アメリカ、インドネシア、ネパール、 難民(カンマー、ミャンマー少数民族、ベトナム)。



5

東京都H高等学校定時制 あるクラスの推移(多部制の夜間クラス)

1年G組

2018(平成30)年度
外国につながる高校生 38%
日本語指導の必要な高校生 33%

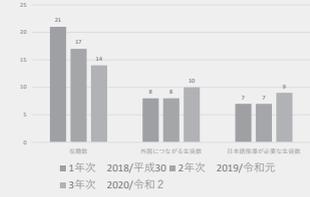
2年G組

2019(令和元)年度
外国につながる高校生 47%
日本語指導の必要な高校生 41%

3年G組

2020(令和2)年度
外国につながる高校生 71%
日本語指導の必要な高校生 64%

東京都立H高等学校定時制 G組の3年間の生徒数の推移



6

2 都立高校での生徒の受け入れの現状と課題

(1) 高校入学時の課題(高校に入るために)

①入試の壁:

入試が難しい
入試情報がない
外国人入試実施校を受ける方法がわからない
ルビ振りや辞書持ち込みの特別申請を知らない
相談相手がない
学校に電話しても通じない
学校や教育委員会のホームページがわからない

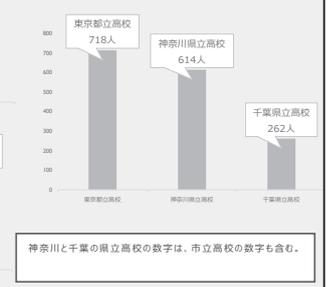
②入学手続の壁:

手続きの書類の日本語が難しく読めない
どのように記入したらよいかわからない
学費を納入できない
学校側の話が早く聞き取れない
印鑑をつくり、捺印するのが慣れない
名前や固有の文化への配慮をしてもらえない

外国人人口 比較 2022



日本語指導の必要な外国籍生徒数 2021



神奈川県と千葉県の県立高校の数字は、市立高校の数字も含む。



(2) 高校入学後の課題(高校に入るために)

①勉強の壁

日本語の授業はあるのか
教科の授業についていけないのか
プリントや黒板の日本語がわかるか
グループ学習で孤立してまわらないか
試験や成績は大丈夫か
先生に声をかけてもらえるか

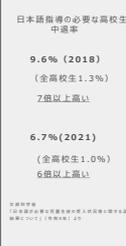
②クラスの間関係

友だちができるか
いじめがないか
仲間ができるか
同じルーツの友だちはいるか
自分らしさを認めてもらえるか
名前や文化を理解してもらえるか

③行事やホームルーム、部活動

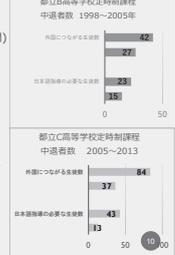
クラス委員の仕組みがわからない
遠征が不安
修学旅行とはなんだろう
担任から声をかけてもらえるか
ホームルームでの話が難しい
提出物を出したいがわからない
体育祭や文化祭が不安だ
楽しめる部活動があるのか
相談できる大人がいるか

④ 深刻な高校中退 どうすれば防くことができるのか?



◆都立B高等学校定時制課程
外国につながる生徒: 42名 (1998~2005年: 8年間)
(中退27名、中退率64%)
内、日本語指導の必要な生徒: 23名
(中退15名、中退率65%)

◆都立C高等学校定時制課程
外国につながる生徒: 84名(2005~2013年: 9年間)
(中退37名、中退率44%)
内、日本語指導の必要な生徒: 43名
(中退13名、中退率30%)



7

4 地域の市民が参加する教育活動

シティズンシップ&多文化共生①
 高校の文化祭で、地域のNGO(大田区のOCNet)の外国人と日本人スタッフ、高校生とが協力する
 都立大森高校定時制の取り組み (2004~2006)

シティズンシップ&多文化共生②
 都立大森高校定時制の国際理解ワーク(特別授業週間)の授業
 地域のOCNetと連携し、日本語教室の見学や市民講師による授業に取り組み (2004~2006)

シティズンシップ&多文化共生③
 市民科「共に生きる」の授業・都立小山台高校定時制
 高校と大学(東京学芸大学国際教育センター)、地域の市民が協働したルーツ学習のワークショップ
 (2011~2013)

シティズンシップ&多文化共生④
 NPO(カタリバ)と連携した授業・コロナ下での主権者学習 都立一橋高校定時制 (2020年9~10月)

高校と学校外とが連携・協働することで、外国につながる高校生が輝く

学校と学校外がつながるために・・・

- 信頼関係の構築
- 対等な関係
- 話し合いと合意形成
- 振り返りと課題の共有
- 課題を協力して乗り越える
- 持続的な関係性(双方が)
- 生徒の声を聞き、受けとめ、考え、実践する
- 外に発信して、つながりを広げる

シティズンシップ・多文化共生をテーマに、
 都立高校で取り組んでみませんか!
 ⇒ 市民が参加する高校へ

資料 2
 文部科学省「外国人の受け入れ・共生のための教育推進検討チーム(報告書)」(令和元/2019年)より

外国人の受け入れ・共生は、我が国に豊かさをもたらすものであり、外国人が日本人とともに今後の日本社会を作り上げていく大切な社会の一員である。

外国人は産業の担い手となるだけでなく、少子高齢化が進む日本社会における日本文化・地域活動の担い手となることも期待される。また、彼らを通じて我が国に多様な価値観・文化がもたらされることは、日本人がグローバル社会で暮らしていく上でも役立つ。

一方、世界に目を向ければ、外国人受け入れに伴って、望ましい形で共生が実現できず生じた社会的な分断は大きな課題となっている。我が国において在留外国人が増加している現状を踏まえれば、日本社会において同様の課題が発生しないよう十分な対策を積極的に講じていくことが重要である。

外国人との共生の実現のためには、外国人の子供たちが、行政の狭間に取り残されることのないよう教育機会を確保し、地域社会で生活していくための日本語や社会習慣を身に付けるとともに、日本文化への理解を養うため、学校におけるきめ細かな指導体制を充実していくことが必要である。

その上で、外国につながる子供たちの母語・母文化などの継承に配慮するとともに、本人の希望と能力に応じて、高等学校や専門学校・大学等への進学、就職など、日本社会へのスムーズな移行を実現できる環境を整備していく必要がある。

さらに、外国人の子供が母語・母文化を学ぶ機会に配慮するとともに、日本人・外国人の子供への基礎的学力の定着や異文化理解・多文化共生の考えに基づく教育を充実し、外国人と地域との相互理解を進めるための環境整備に努めていくことも重要である。

資料2 「新高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説より」

帰国生徒や外国人生徒、外国につながる生徒は、他の生徒が経験していない異文化での貴重な生活経験をもっている。外国での生活や異文化に触れた経験や、これらを通じて身に付けた見方や考え方、感情や情緒、外国語の能力などの特性を、本人の各教科等の学習に生かすことができるよう配慮することが大切である

本人に対するきめ細かな指導とともに、他の生徒についても、帰国生徒や外国人生徒、外国につながる生徒と共に学ぶことを通じて、互いの長所や特性を認め、広い視野をもって異文化を理解し共に生きていこうとする姿勢を育てるよう配慮することが大切である。

これらの日本語の習得に困難のある生徒の指導を効果的に行うためには、教師や管理職など、全ての教職員が協力しながら、学校全体で取り組む体制を構築することが重要である。また、日本語教育や母語によるコミュニケーションなどの専門性を有する学校外の専門人材の参加・協力を得ることも大切である。

ご参照がたいごめい、下記がサイトご参考にておたい

日本語を母語とし、親子のため多言語国際進学ガイダンス東京（オンライン開催中）
<http://www.jokoguide.com/>

帰国・進学ガイダンス主催 帰国文化会
国際進学ガイダンス東京会場 <http://www.jokoguide.com/>

外国につながる国際進学ガイダンス東京（オンライン開催中）
<http://info.jokoguide.com/>

中国語教育支援の拠点センター
https://www.kishikaku-center.or.jp/chin_joho/kishikaku/kishikaku_top.htm

文部科学省国際・外国人受入れ推進事務局
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003.htm

日本語学会誌
帰国・外国人生徒の教育を促す情報誌「留学」——公立高校の入口に「留学」は口で
<http://www.sci.go.jp/ja/info/kohyo/kohyo-24-1289-4-sbstact.html>

公益財団法人 日本財団
多文化共生社会構築プロジェクト、外国につながる生徒の学力向上を支援する「帰国・進学」支援事業の推進
<http://www.jibochi-saadan.org/topics/top/cst073.html>

多文化共生教育プラットフォーム東京（オンライン開催中）
TEAM:Net <http://teamnet.jp/>



• NPO 法人 glolab について

NPO 法人 glolab（以下、glolab）は「逆境を成長の機会に」というスローガンのもと、外国ルーツの若者のキャリア教育を行っている。スタッフの半分は幼少期に海外から日本に来た者で、後の半分はキャリアコンサルタント、日本語教育などの専門知識を持つ者である。私たちは当事者目線と支援者目線を掛け合わせてプログラムを作っている。

• アンケートから見えてくる課題

活動を開始した時に約80名弱の先生と外国ルーツの若者にインタビューをして、外国ルーツの生徒の中退の要因をまとめた。

まず日本語習得、教科学習の困難さが挙げられる。令和5年度から日本語が学校判断で単位認定される仕組みができる。しかし、義務教育段階と比べると質量ともに不十分であり、さらに、高校の勉強は難しくなるため、学習についていく困難さがある。

次に進路を主体的に選択していく力や機会、支援の不足がある。外国にルーツを持つ子どもは留学生と違って自分の意志で日本に来たわけではないので、必ずしも日本を肯定的に捉えているわけではない。そうした中でどうすれば未来が開けるのかを知る必要があるが、ロールモデルとの出会いが不足している。在留資格によっては就職できなかったり、奨学金の受給に制限があったりする。そうした情報は進路の選択に必要なだが、情報を得ることが難しい。アンケートでは、狭いエスニックコミュ

ニティの価値判断だけで進路選択をしてしまった若者もいた。そのように日本社会から孤立してしまう子もいるし、日本人の友達ができないという苦しさを述べる子もいた。

最後に、進路選択に対する保護者の理解不足がある。保護者が母語で進路の情報を得ることは難しく、子どもたちをサポートしたくてもできないという現状がある。このように厳しい状況の話述べたが、彼ら彼女ら一人ひとり素晴らしい個性、力を持っており、これからの未来を担う大切な存在だと思っている。

• glolab の事業内容

様々な壁に直面する外国にルーツを持つ若者だが、一人ひとり将来の夢を描いていたり、前に進もうと考えていたりする若者は多い。例えば、glolabのプログラムに参加した生徒が描いている将来の夢は、日本語が分からない人にも優しくできる歯医者さんだという子、世界を飛び回るフライトアテンダントになりたいという子、一人ひとり個性豊かな夢を持っている。glolabではその子達の夢を支える4つの支援メニューを作っている。

1つ目は「知る」。多言語で進路キャリア支援動画を YouTube で配信したり、外国にルーツを持つ社会人のライフストーリーのインタビューをやさしい日本語にリライトし、教材として配信したりしている。2つ目は「参加する、つながる」。色々なキャリアプログラムを企画・実施している。3つ目は「LINE 診断」。自分の在留資格を把握しておらず進路選択でどのような課題があるのか分からない、知らないという子もいる。これらの対策として、簡単な10個の質問に答えると自分の課題が分かるというツールを多言語で配信している。しかし、これらを提供してもまだまだ乗り越える壁は多い。このため4つ目は「相談する」としてLINE相談の窓口を開設した。相談は多言語で受け付けている。周りの助けを借りながら問題解決に取り組む力を育ててほしいということで、解決す

るというよりも伴走支援をしている。

この進路支援プログラムは現在7つの高校と支援団体に導入している。進路を主体的に選択していく力とは、自らのキャリアについて、どうしたいのか、どうなりたいのか、どうあるべきなのかを主体的に考え行動する力だと考えている。そのためには、自分は何が好きで、何が得意なのか、何が嫌いで何が不得意なのかを自己理解し、自分はあるままでいい、自分ならできるという感覚を持つことが必要である。

外国にルーツを持つある子は「日本に来る前、自分は100だったが、日本に来てからマイナス100になったという感覚を持った」と言っていた。今ではプラス100だと言えるようになったが、「たまたま色々な大人に出会って自分は自信を回復できたが、自分の周りにはマイナスのままの子もいる」と言っていた。そうしたことからこの自己効力感、自己肯定感を育むプログラムは大変重要だと思っている。このプログラムは、キャリアコンサルタントの技法を取り入れ、パッチワークモデルを採用している。ロールモデルは一人ではなくてよい。色々な大人と出会い、自分がよいと思うところを掛け合わせて、自分オリジナルのロールモデルを作っていく。そうしたことから企業、ボランティア等様々な人に関わってもらえるよう設計している。このプログラムは厚労省の「キャリアを作る6つのステップ」に沿って、何が好きか嫌いかを探求し自己効力感、自己肯定感を養う自己理解のコースと、多様にある仕事を知って自分がなぜ仕事をするのか・自分の興味のある仕事を調べるといった仕事理解コースを設けている。現在は、実際に行動を起こすための未来プランニングのコースを作成中である。

そのほか、自主プログラムも行っている。その一つが「みらいチャレンジプログラム」である。北海道・浦幌町は「町の発展は次世代教育」として、様々な若い世代が移住をしたりビジネスをしたりしている町である。その浦幌町で多様な大人と対話をして、10年後の自分を考える。みらいチャレンジプログラムには3本の柱がある。1つ目は地

域社会から「働く」と「暮らし」を探求すること。働くとは何か、暮らしとは何かを探求することを大切にしている。2つ目は多様な大人と仲間と出会うこと。今年度は神奈川、千葉、東京から高校生が集まった。3つ目は実践が自主性を高めること。インプットだけではなくアウトプットも重視している。来日3年目だと日本語で表現することが難しいが、本当は皆よく考えていて、それを引き出すことで、最後には自分の考えを皆の前で発表できるようになる。

もう一つの自主プログラムは「NEWDOOR 進学プログラム」である。これは家族滞在や公用などの在留資格であるために奨学金受給に壁のある生徒を対象にしている。マネーリテラシーや情報収集の仕方を学んだり、思考力を上げるための日本語作文の指導をしたり、経済的に困難を抱えている子たちに大学受験費用として10万円を支給したりしている。

- 本分科会テーマの実現に向けて

外国にルーツを持つ若者が自分らしく輝くために必要なことは、3つあると思う。1つ目は日本語教育にキャリア教育の視点を入れること。JLPT N1、N2 を取ることももちろん大切だが、その高校生にとって日本語とは何かと考えた時に、進路、将来に向けて自分を表現する、考えを述べる、自分を見つめなおす、そのために日本語を学ぶことが必要だと思う。2つ目は、キャリア支援を行える人材育成である。日本語の先生がキャリア教育の視点を学ぶ、あるいはキャリアコンサルタントが外国ルーツの若者の支援をすることも大切だと思う。最後に、外国ルーツの若者が自分の力を発揮できる場づくりである。企業が外国ルーツの若者の力や可能性を理解していない、存在自体知られていないこともあって、高卒就労が難しいと聞く。この分野はNPOや学校だけでなく企業や他のセクターとのコラボレーションが必要である。外国ルーツの若者の課題は彼ら彼女らだけの問題ではなく、私たち社会の課題である。

Our Slogan

「逆境」を
成長機会に

外国にルーツを持つ若者の進路支援
特定非営利活動法人glolab 代表理事 柴山智帆

glolab
逆境を成長機会に

外国にルーツを持つスタッフ
×
専門知識を持つスタッフ

日本語指導が必要な高校生の現状 glolab

	日本語指導が必要な 高校生 令和3年度 (平成30年度)	全高校生	
中途退学率 (高校における)	6.7% (9.6%)	1.0%	中退率は7倍
進学率 (大学等への高等 教育機関への進学率)	51.9% (42.2%)	73.4%	進学率は21.5ポイント低い
就職者における 非正規就職率	39.0% (40.0%)	3.3%	非正規就職率は11.8倍
進学も就職も していない者の率	13.4% (18.2%)	4.8%	進学も就職もしていない者の率は2.8倍

文部科学省 日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査 (令和3年度)

外国ルーツの青少年が直面する課題例 glolab

日本語習得・教科学習
の困難さ

進路を主体的に選択し
ていく力や
機会・支援の不足

孤立・精神面での課題
社会への適応の課題

教育や進路選択への保
護者の理解不足

外国にルーツを持つ青少年の可能性 glolab

未来を担う存在

高校生の夢

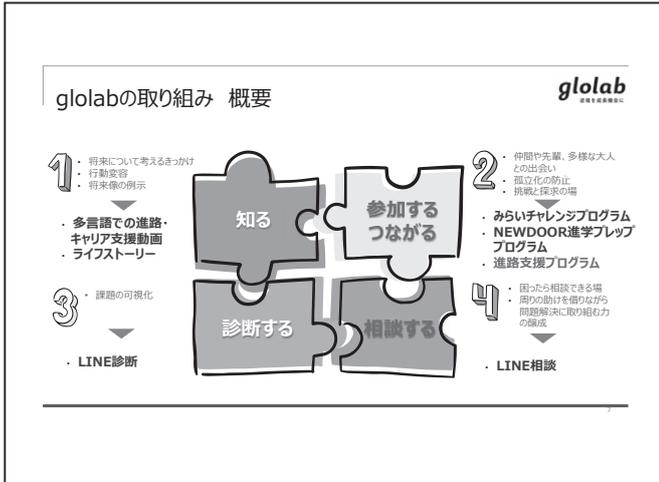
日本とフィリピン
をミックスした新
しいスイーツを作
るパティシエ

新しい命を支える
助産師

日本語がわから
ない人にもやさしく
できる歯医者さん

世界を飛び回る
フライトアテン
ダント

人が幸せになる家
を作る建築士



進路支援プログラム 高等学校・支援団との連携

参加するつながる **glolab**

進路を主体的に選択していく力を養うプログラム

導入校 7校・団体

プログラムの特徴

キャリアコンサルティング

動画等のリソース活用

バッチワークモデル

※ キャリアコンサルティングとは、その個人にとって望ましい職業選択やキャリア開発を支援するプロセスのこと
 ※ glolab YouTube チャンネル： https://www.youtube.com/channel/UCnFT5g_oq02w7rECypAGBQ

glolabが考える「進路を主体的に選択していく力」とは？

進路を主体的に選択していく力 = キャリアオーナーシップ
(自らのキャリアについて、どうしたいのか、どうなりたいのか、どうあるべきなのかを主体的に考え行動する)

計画する力	情報を活用する力	決断力・実行力
自己効力感（自分ならできるという感覚）		
自己肯定感（自分はありのままいていいという感覚）		
自己理解		



コースの種類

自己理解	仕事理解	みらいプランニング
<input type="checkbox"/> 準備中	<input type="checkbox"/> 準備中	<input type="checkbox"/> 準備中
<input type="checkbox"/> お勧め：高校1年生	<input type="checkbox"/> お勧め：高校1～2年生	<input type="checkbox"/> お勧め：高校2～3年生
<input type="checkbox"/> 回数：6回	<input type="checkbox"/> 回数：6回目	<input type="checkbox"/> 回数：TBD
<input type="checkbox"/> 参加後の状態：	<input type="checkbox"/> 参加後の状態：	<input type="checkbox"/> 参加後の状態：
<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分に向き合い、自己理解が深まっている ・ 自己肯定感や自己効力感が高まっている ・ 周囲からの影響について理解を深めている 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 多様にある仕事の目的がわかる ・ 自分なりになぜ仕事をしたのか（したくないのか）を考えることができる ・ 自分の興味のある仕事を調べることができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 卒業後の希望の状態（なりたい自分）を描くことができる ・ 理想の状態に向けて取るべき行動や準備ことが整理できている ・ 卒業後にに向けて計画を立て1つ以上行動を起こしている

みらいチャレンジプログラム
北海道十勝郡浦幌町でのキャリア合宿を中心としたプログラム

夢を叶える
つなげる **glolab**

- 1 地域社会から「働く」と「暮らし」を探求する
- 2 多様な大人と仲間との出会う
- 3 実践から自主性を高める



NEWDOOR進学プレッププログラム
家族滞在や公用など奨学金受給に壁のある生徒対象

夢を叶える
つなげる **glolab**

- 1 壁を乗り越える方法を学ぶキャリアプログラム
- 2 思考力をあげるための日本語作文指導
- 3 大学受験費用として10万円支給



今後に向けて

glolab

- ❖日本語教育にキャリア教育の視点を
 - ❖外国ルーツの若者のキャリア支援を行う人材の育成
 - ❖外国ルーツの若者が自分の力を発揮できる場づくり → 企業とのコラボレーション
-



• NPO 法人多文化子ども自立支援センターについて
NPO 法人多文化子ども自立支援センターは 12 年前に立ち上がった団体で、現在スタッフが 17 名、1 月 1 日・2 日以外は毎日開館している。人数は 45 名、地域は 17 か国・地域に亘る。活動も年齢の幅も広く目的も多様である。日本語の習得、子どもの自立、資格取得、専門学校・大学・大学院入学、入社、就労など、様々な手伝いをしている。学習支援では初級日本語の 2/3 程度まで行くと数学・英語を開始し、初級が終わった時点で理科・社会を開始する。勉強だけでなく情報の収集、面接、論文も見る。社会人支援では就労に必要な日本語や面接・書類審査のサポートなども行っている。

高校進学では、在京外国人特別枠対策として日本語・英語の作文、面接などを看ると同時に、受かるとは限らないので教科学習の支援も行う。母国の中学校を既卒または高校中退で来る子どももいる。短期間で受験しなければならないため、毎日、日本語学習 4 時間に加え、英語・数学・理科・社会・漢字などのサポートを行う。それだけではない。情報収集、学校見学、学校説明会、個人面談、在京外国人特別枠資格の書類の収集、準備、さらに願書のチェック、受験の付き添いもする。合格後は書類の手続きなどもある。特別枠に落ちた子どもは親子面談を 3 回くらい行い、第 2～4 希望と学習の指針を決めていく。将来は何になりたいかから始め、大学へ行くのか専門学校に行くのか、公立高校か私立で専門的な学習をするのか、道筋を立てる。高校に入ってから、将来どのようなことが待ち

受けているかを説明し、在留資格対策として最低 N2 を取ることを提案している。中途退学した子どもも受け入れている。

在京外国人特別枠の問題点は、日本語か英語の面接と作文であるためその学校に適しているか問うことができていないことである。入学後ついていけないというケースが多いが、入った学校では易しすぎるからもう 1 回受け直すという子どももゼロではない。今の在京特別枠の入試制度では、潜在能力が問えないということだ。

• 来日時期と在留資格について

私どもが支援している子たちのほとんどは家族滞在の在留資格である。家族滞在の場合は 18 歳未満までしか入国できない。家族滞在の在留資格は親に扶養されている扱いなので、住民票の移動や別居などができない。家族滞在同士の結婚はできるが、親と同居しなければならない。子どもが生まれた場合、子どもに在留資格はなく、子どもだけ帰国させるか、子どもと一緒に帰国するという方法しかない。扶養者が病気や事故で失業したり、収入が減少したりすると、扶養困難となり子どもも在留資格を失ってしまう。親が死亡、解雇、会社の倒産などで在留資格を失うと家族で帰国するということになる。

来日時期による諸条件では、小学生の時に来て中学校・高校を卒業、就職内定もしくは専門学校・大学に入り就職内定で、在留資格を定住者に変更できる。高校は定時制でも単位制でも通信制でも構わないが、学校教育法の 1 条項に該当しないインターナショナルスクール、民族学校は日本の学校に含まれないので、定住者の対象外となってしまう。

高校に編入した場合は、日本語能力試験 N2 と卒業資格、さらに就職内定があって在留資格を特定活動に変更できる。すべて就職内定があって、在留資格が交付される。この就職内定が都立の普通高校卒業ではなかなか得られない。卒業後仕事ができ企業の内定が取れる工業高校を勧め、将来の夢

を実現できるように導くこともある。

家族滞在の在留資格では資格外活動許可が下りれば28時間の労働が可能であるが、ずっとそのままではいられない。28時間を超過した労働が判明すると在留資格の更新は不可である。社会保障がなく非常に不安定で、親の在留期間の更新時期ごとに怯える子どももいる。

専門学校、大学では留学の在留資格を取ることでもできるが、家族滞在のままでも進学できる。留学の場合、専門学校では卒業後は履修と同じ分野の職業にしか就くことができない。内定を受け就職が決まっていたが、違う分野であったため、帰国させられた子どももいる。また留学の在留資格に変更した場合は、卒業ができない、病気になった、就職内定が出ない場合は留学の在留資格では帰国させられる。家族滞在の在留資格のままにいる時との違いである。

また学費への重圧がある。大学進学時によく利

用される日本学生支援機構（JASSO）の貸与型奨学金（1種・2種）は、居住条件が不安定な家族滞在の在留資格では申し込みできないという課題がある。

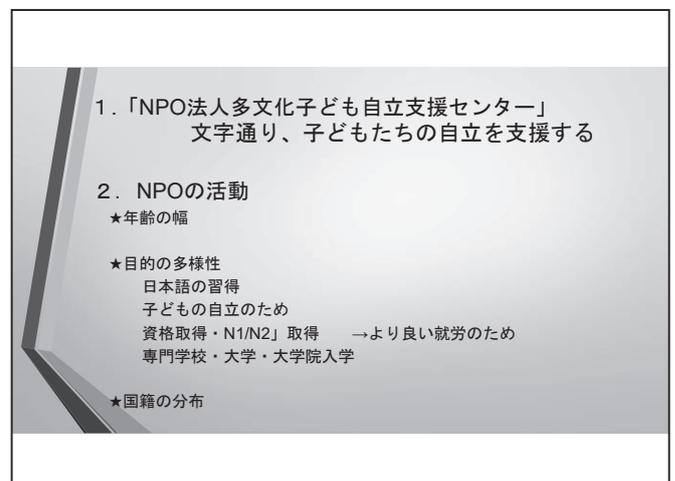
最後に永住者の道であるが、内定を受け就労してからがスタートであり、その道は大変難しい。日本の子どもが次々と将来を定めていく中で、外国ルーツの子どもが自分の夢を実現するには、やはり資格を取ることが大切である。幸い私たちはいくつかの企業や事業団と関係があるため、合致するような子どもには就職の斡旋などもしている。今、外国ルーツの子どもたちが夢を実現するには色々なハードルがある。これは法制度が変わらないと、非常に難しいままだろう。縁があって出会った子どもたちには自立してもらえるよう、私たちは親や本人とコンタクトを取りながら、全力を挙げて一緒に闘っている。



国際化市民フォーラム
in TOKYO

NPO法人多文化子ども自立支援センター
代表理事 中山 真理子

2023年2月4日



1. 「NPO法人多文化子ども自立支援センター」
文字通り、子どもたちの自立を支援する
2. NPOの活動
 - ★年齢の幅
 - ★目的の多様性
日本語の習得
子どもの自立のため
資格取得・N1/N2取得 →より良い就労のため
専門学校・大学・大学院入学
 - ★国籍の分布

3. 目的別多様なカリキュラム

- ★来日後の日本語習得
- ★小学生には適切な段階で、算数・英語学習を開始
- ★初級日本語の3分の2習得時から数学・英語開始、初級終了時から「理・社」学習開始
- ☆専門学校・大学・大学院入学に必要な全て
- ☆進学支援：情報の収集、N2/N1レベルの日本語、英語面接、論文、パワーポイント、
- ☆社会人支援：就労に必要な日本語、面接、書類準備、論文、履歴書

4. 高校進学

- ★ 国内の中学校からの進学
在京外国人特別枠対策：日本語・英語・作文・面接
一般受検対策：日本語、教科学習支援、面接、作文
- ★ 母国の中学校既卒・高校中途退学者の
日本語・英語・数学・理科・社会・漢字
- ☆ 情報収集、学校見学、学校説明会、文化祭・学園祭、個人面談
- ☆ 在京外国人特別枠資格審査書類の情報・準備
- ☆ 願書等書類の準備、必要書類確認・チェック
- ☆ 受検日の付き添い
- ☆ 合格後の書類の手続き

5. 高校進学後の問題点

- ★ 高校進学後の学
高校進学後の日本語学習支援→最低N2取得へ
→将来、自身の就労ビザ（就労が認められる在留資格）
獲得への対策
高校進学後の教科学習支援（英・数・理・社）
→中途退学との戦い
- ★ 在京外国人特別枠の問題点（難しすぎる・易しすぎる）
- ★ 卒業できるか
- ★ 高校生活とのバランス：学業との両立が可能か
アルバイトの必然性、クラブ活動への参加

6. 卒業後に待ち受けている現実 外国の若者に対する日本の法制度、ビザの壁

- ★ 18歳未満まで
- ★ 保護者の在留資格の категорияによる差異
・永住・定住・ビジネス等の在留資格
・家族滞在の在留資格：親に扶養されている扶養家族
→住民票の移動：結婚で別居・自立：不可
・家族滞在の在留資格同士の結婚：
家族滞在者同士の子供には在留資格無し
→本国へ
- ★ 扶養者が病気・事故・失業等で収入減少：扶養困難→子の更新不可
- ★ 扶養者が死亡・雇用会社の倒産等、在留資格を失う：子も在留資格喪失

7. 来日時期による諸条件の差異

- ① 日本の小学校卒業→中学・高校卒業→就職内定 →定住者
(定時制・単位制・通信制高校可)
日本の小学校卒業→中学・高校卒業→専門学校・大学卒業→就職内定→定住者
 - ② 日本の中学校卒業→高等学校卒業→就職内定 →特定活動
(公立夜間学級も含む)
日本の中学校卒業→高校卒業→専門学校・大学卒業→就職内定→特定活動
 - ③ 日本の高校入学者→高校卒業→就職内定→特定活動
日本の高校入学者→高校卒業→専門学校・大学卒業→就職内定→特定活動
 - ④ 日本の高等学校編入者→日本語N2+高校卒業→就職内定→特定活動
※【学校教育法1条に該当 インターナショナル・民族学校は「日本の学校」に含まれない】
- ★ 高等学校に進学しないで就労可能なビザ獲得
 - 1. 「特定技能」の業種に関する試験+N4取得で「特定技能1号」：5年
 - 2. 「特定技能2号」に移行以外は5年以上滞在不可

8. 在留資格の種類による生活の制限と 将来にわたる制約

- ★ 資格外活動許可：週に28時間以内の就労制限
アルバイトの掛け持ちでも総計28時間以内
制限時間の超過が判明⇒在留資格の更新・変更が不可
- ★ 家族滞在の在留資格では社会保証が無く、自身が親になっても、非常に不安定生活に困窮困窮
- ★ 親の在留資格更新の時期に、常に入管からの帰国命令に怯える

9. 専門学校進学への道

- ①「家族滞在」のまま進学
卒業後【専門士】として「技術・人文知識・国際業務」履修と同じ分野の仕事
- ②在留資格「留学」に変更、卒業できない場合
【卒業後家族滞在の在留資格に再度変更不可】⇨ 内定取得が無い場合帰国

大学への道

- ①「家族滞在」のまま進学
- ② (i) 卒業後、「本邦大学卒業生」へ変更、
【日本の大学・大学院を卒業・修了+N1】
高い日本語能力を活用することを条件とし、幅広い業務に従事可能
(ii) 「技術・人文知識・国際業務」への変更
日本の大学を卒業「学士号」取得：履修した内容と同じ分野の仕事に就く必要

10. 学費の重圧

★ 奨学金の資格

- ★ 日本の高校卒業者は厳密に言うと、留学生ではない。
留学生は「母国で高校を卒業した者のみ」

日本学生支援機構(JASSO)に申請可は「留学・永住者・
永住者の配偶者等・定住者」
将来に互る居住要件が満たされない。
⇨ 居住条件が不安定で将来の返済の確証が無い

11. 「永住者」への道

- ★ 扶養する立場の人が同居の家族と一緒に申請
 1. 在留実績が10年以上・就労資格での在留が5年以上
 2. 扶養者の在留期間が5年、または3年
 3. 扶養者を継続的に養えるだけの収入がある（3年以上300万円以上）
 4. 公的義務（納税（所得全・住民税）、年金・保険等2年遅れずに支払い
 5. 国民年金・国民健康保険の過去2年分の納付実績と領収証の写し
 6. 日本国の法令違反が無い

- ★ 扶養する親だけが永住者の場合
配偶者は「永住者の配偶者」
20歳以上の子供は「定住者」に変更不可・家族滞在も不可
 1. 20歳以上の子供を含め一括で永住許可申請
 2. 永住を諦める

12. 自立した就労ビザ（就労が認められる在留資格） 獲得のためには？

13. NPOでできること

14. NPOでしなければならないこと



私は、両親が来日した 1995 年の 1 年後に生まれた日系ペルー人 4 世、在日外国人なら第 2 世代である。小学生の頃から新素材を開発したいという夢を持ち、大学、大学院で化学を専攻した。現在は化学メーカーの研究開発職に就き、世界のモノづくりを支える新素材の開発を行っている。社会人 2 年目で絶賛奮闘中である。

今日は、在日日系人第 2 世代として日本で暮らした経験を元に、私なりの提言を行いたい。はたから見た時、高校、大学、大学院と進み専門職として会社で働いている私は、あまり苦勞が見られないかもしれないが、ではなぜ苦勞をしなかったのか、環境、要因などを分析して、そこから今の子どもたちのためにできることを提言したいと思う。

・ 幼少期

幼少期の頃、家庭で話すのはスペイン語のみであった。両親が働くために私は保育園に入らないといけなかったため、4 つの最低限必要な日本語「水」、「お腹空いた」、「痛い」、「おしっこ」を母に教わって入園した。卒園時には両親よりも日本語でコミュニケーションが取れるようになっていたが、母によると友達となかなかコミュニケーションが取れずにけんかしたこともあったようだ。

私は物心がつく前に保育園を通じて日本語を学ぶことができたため、義務教育に乗ることができたが、外国ルーツの子どもが苦勞する原因を分析すると、1 つ目はいきなり言語環境が変わることがあげられる。例えば外国で学校に通っていたの

に急に日本に来ることになったら、言語環境の変化は大きい。2 つ目は、日本語の習得が進路に関わる成績に絡むことだ。保育園の時は日本語に困ってもコミュニケーションが取れない程度で終わるが、小学校や中学校ではそれがそのまま成績に書かれて、本人のモチベーションに影響してしまう。

・ 中学時代

中学時代、勉強や友達つきあい、部活も順調で化学者になりたいという将来の夢もできたが、この時リーマンショックが起きた。製造系の工場働いている外国人の多くは経済的に大変厳しく、その時の出稼ぎ労働者もしくはその家族は最も影響を受けた。日本での生活を続けられず多くの日系外国人が帰国した。そして私の父の工場も操業停止になった。私は、日本での生活に慣れていて、勉強もやりたい事もあったので帰国に猛反発したが、生活資金がどうにもならず、両親は帰国することを決断した。私は将来の夢、日本での生活を諦めなくてはいけないというショックが大きく、将来どうすればいいのか悩んだ。結果的には運に味方され、航空券を買おうとしたその時に父親の工場が再開をするという電話が来て、日本に残れることになった。厳しい経営状況は続いたが、私は将来の夢を両親に言い続けていたので、両親は何とかやりくりをし、高校受験の塾代も捻出してくれた。夢を後押ししてくれた両親には、感謝の気持ちでいっぱいである。

第 1 志望だった横浜サイエンスフロンティア高校に合格し、新素材を開発するためにさらに勉強に励んだ。高校、大学とその先の進路に進む後押しになったのは、やりたいことが小さい頃から明確になっていたことだと思う。そして、親が教育に理解を示してくれていたという家庭の環境が非常に大きいと思う。

・ 要因から考える教育環境への提言

1 つ目に、日本語での苦勞を最小限にするには、

来日直後や言語圏が変わった直後の支援に最大限のエネルギーを注ぎ込むべきだと考える。しかし、地域や団体はそれぞれがよいアイデアを持っているが、予算や人材に限られる中で大きな効果を出すのは難しい。このため、私のような在日外国人や日本の教育学部で勉強している人々など活用する人材のネットワーク形成が必要だと思う。私のような経験を持っている者や、外国に大変興味があり教育や子どもたちの支援に力を入れている人はたくさんいる。そのような人たちがうまく学校現場につながることであれば、プラスに働くと思う。

2つ目に、催し物や博物館、セミナー、テレビ番組などにかく出会ってみることが大事だと思う。進路の後押しになった要因としてやりたいことが小さい頃から明確になっていたという話をした。私は国際交流団体のイベントや博物館等に参加する機会があった。誰も今の職になるきっかけがあるはず。やりたいことが明確になると、強い意志になり勉学に励めると思う。これは外国籍の子どもたちというよりも、その親御さんへのメッセージでもある。

・ 大学、大学院時代

私は大学生の時に社会福祉法人さぼと21で小中高生向けの教育ボランティアを行った。授業のサポートや高校受験・大学受験を控えている子の受験対策、将来のキャリア相談も行っていった。さぼ

と21では子どもたちが苦手科目や受験勉強をする傍ら、親も一緒に同じ場所で日本語教育を受けることができる。子どもだけでなく親の教育も包括的に支援できるというのは理想の支援環境に近いと考える。先ほど、私は親が教育に関して理解を示してくれたと話したが、子どもの支援にフォーカスしてしまうと、親は子どもが何やっているか分からない、そんなに教育は大事なのかとギャップが生まれて進路の妨げにもなる。親のサポートを得るためにも、親と子の包括的な支援が非常に大事だと考える。

・ 社会人 ～これからの話～

私は今、味の素ファインテクノ社で子どもの頃からの夢である新素材の開発を行っていて、大きなやりがいを感じながら働いている。私の周りにも外国人の子がたくさんいるが、各々プロフェッショナルを目指す仕事や勉強をしている。高校、大学に進んで外交官や教師、建築関係に進む子もいれば、ITや歯科衛生士など自分がやりたい専門的な職業を見つけて目標に向かう日々を送っている子もいる。

私や後輩のような日本の教育課程を受けてきた在日外国人が、在日外国人の生徒・児童をサポートできるし、自身の経験からアドバイスできる部分も多い。このようなサポートが循環していける社会を目指していきたい。



在日外国人2世からの提言

安里 トレス ルイス アルベルト

» 自己紹介

アソト
安里 トレス ルイス アルベルト



1995年1月：両親がベルギーより来日（デカセギ）
1996年9月：出生 “日系ベルギー人4世” & “在日日系人第2世代”

- * 小学生の頃から**新素材を開発したい**という夢を抱き続け、大学・大学院で化学を専攻。
- * 現在は**化学メーカーの研究開発職**として、**世界のモノづくりを支える新素材の開発**を行っています！
- * 社会人2年目、絶賛奮闘中!!

» 本日のお話

在日日系人第2世代として、
保育園～小・中・高・大学・大学院と過ごす中で感じてきたことをもとに
私なりの提言を行いたいと考えています！

“苦労しなかった経験”
→ “なぜ苦労しなかったかの 環境要因を分析”
→ “今の子供たちのために提言したい環境”

» 幼少期のお話：日本語に適應できる？

家庭で話すのはスペイン語のみ…
↓
両親が働くためには、保育園に入れないと…

4つの日本語を母に教わり、入園

- ①みず
- ②おなかすいた
- ③いたい
- ④おしっこ

Q. 日本語で苦労する要因は？
⇒ いきなり言語環境が変わること
⇒ 進路に関わる成績が絡むこと
提言内容①（後のページで）



卒園時には、両親よりも上手く日本語でコミュニケーションが取れていた

» 中学時代のお話：リーマンショック

勉学、友達付き合い、部活も順調で、将来の夢も出来た！
↓
リーマンショック

日本での生活を続けられず、多くの日系外国人が帰国… ⇒ 製造系の工場で働く、経済力の弱い父親の工場も操業停止に…
デカセギ労働者が最も影響を受けた

↓

日本での生活に慣れていたので、帰国に対して猛反発するも…
生活資金がないため、両親が帰国することを決断

↓

将来の夢と、日本での生活を諦めなくてはいけないショックが強く
将来どうすればいいのか、毎晩、毎晩、悩みました…

» 中学時代のお話：リーマンショック

航空券を買おうとしていた際に、父親の工場が再稼働するという電話が来た！
↓

運に恵まれ、日本での生活と、将来への道が繋がれた！
厳しい家計状況が続いていたが、両親は私の将来の夢実現のために、何とかやりくりをしてくれ、高校受験のための塾代も捻出してくれた…
両親には、夢を後押ししてくれた感謝の気持ちで一杯です！

↓

第1志望の、横浜サイエンスフロンティア高校に合格！
新素材を開発するためにさらに勉学にはげみました！



後押しになった要因は？
・やりたいことが小さいころから明確になっていた 提言②
・親が教育に関して理解を示してくれていた 提言③

» 要因から考える 教育環境への提言

日本語で苦労する要因は？

- ⇒ いきなり言語環境が変わること & 進路に関わる成績が絡むこと
- ⇒ 苦労を最小限にするには、来日直後・編入直後の支援
(予算も人材も限られる中で、最大限の効果を出すためには？)

提言① 在日外国人・外国語/教育学部 人材とのネットワーク形成

進路の後押しになった要因は？

- ⇒ やりたいことが小さいころから明確になっていた
- ⇒ 誰しもある 今の職へのきっかけとの出会いが早かった
- ⇒ 子供たちに多くをきかけを届けるには？

提言② 催し物・博物館・セミナー・TV番組 とにかく出会ってみる！
(市区町村の国際交流イベントは良い思い出です)

6

» 大学・大学院時代のお話

さぼろと21での小中高生向け 教育ボランティア

大学～大学院生の間、ミャンマー、ベトナムなど
アジアにルーツを持つ学生に、授業のサポート、受験対策、
将来のキャリアの相談を行いました。

<さぼろと21で見てきた内容>

子供：学校の苦手科目、受験勉強

親：日本語教育

子供だけでなく、親の教育も包括的に支援できるのは理想の支援環境に近いと考えています。

後押しになった要因は？

⇒ 親が教育に関して理解を示してくれていた

提言③ 親と子を巻き込む包括的な支援



7

» 社会人～これからの話

現在は味の素ファインテック社で新素材の開発を行っています。

子供の頃からの夢を叶えられ、大きなやりがいを感じながら働いています。

周りの外国人の後輩達も、各々プロフェSSIONナルを目指して、仕事or勉強しています。
(外交官、教師、建築、IT、歯科衛生士など)

今の在日外国人が、次世代の在日をサポートできる社会を目指していきたいです！



8

● パネルディスカッション

柴山：高校では外国にルーツを持つ生徒が増え、進路のサポートをするのに大変な苦勞をしていると聞いた。先生方の学びの場はどのようになっているのか角田さんにご教示願いたい。

角田：日本語指導が必要な生徒に関する教員研修がまだ少ないのが現状。地域の方や専門家、大学にも参加してもらって研修会を実施していけるとよい。教員がNPOや大学、地域と関わる研修システムを作り、様々な支援団体や高等教育の専門家と繋がり、それを学校に持ち帰って生徒に生かすことが大切だと思う。

仁村：安里さんに伺いたい。かなり早い時期から将来の夢があったとのことだが、何がきっかけで今の仕事に就きたいと思ったのか。

安里：元々工作が好きで、テクノロジーに関係のあることが好きだった。たまたま青色発光ダイオードを取り上げていたテレビ番組を見て、化学に関係する仕事に就きたいと思った。以前、学校の先生が外国ルーツの子どもに、進路について語学に関する職業を中心に話していたことがあったが、人によっては、日本語も母語もままならないこともある。言語にフォーカスしすぎるよりも、色々な世界を見て、その中で興味がある分野が伸ばせるよう、幅広い目線でアドバイスが与えられるとよいと思う。

柴山：同感である。母国の架け橋になる人材だというのは、その子にとって重苦しいこともある。私自身も「7歳ぐらいまでしかいなかった国の架け橋にどうやってなるの?」と言われた事があり、支援者として気をつけなければならない言葉だと思った。glolabのプログラムをとおして興味があることを見つけていく子もいるが、人でもテレビでも、様々な情報に接して視野を広げていくことが大切である。

中山：情報、支援団体にたどり着くことが課題である。全く孤立無援の存在であるとたどり着けない。学校との密な連携が大切だと考えている。

柴山：市役所の企画でglolabとFRESCを高校に呼び、進路のワークショップと相談を行うというものがあった。ワークショップで課題を発見した子が、FRESCの相談で課題を解決していた。関係機関に学校に来てもらって相談ができるというのは、大変よい事例だと思う。

角田：私が勤めた学校では、外国につながる生徒に対応する組織があった。しかし、ほとんどの学校ではそのような組織がないのが実態で、約180校中まだ数十校あるかどうかである。学校長のリーダーシップでこのような組織を創り、また学校を支える教育委員会は、こうした組織がどれだけあるかなどを調査していただきたい。

また、都立高校には全校に、地域の卒業生や町内会などの声を聞く学校運営連絡協議会や評価委員会という組織がある。地域の方や専門家、大学の関係者にこうした組織の委員になっていただき、日本語の支援が行われているか、多文化共生の教育に取り組んでいるか、日本語指導が必要な生徒の中退はどうなっているのか、学校の評価も合わせてしていただくのがよい。地域や有識者の声を受けとめる組織があるが、有効に活用されていない。是非、これからは教育委員会や学校、地域が一緒になって、こうした組織を生かしていくことが一つの案ではないかと思う。

中山：企業との協働もしているが、外国ルーツの子を雇用するまでの企業側の努力も大変なものである。何か月もかけて分厚い書類を作り、申請しなければいけない。ある企業の方に「日本にいる外国ルーツの子どもたちの在留資格はさまざまだが、日本で仕事がしたいと思っている子が大勢いる」という話

をしたら、「そういう子どもの存在は知っていたが、就労の対象として見ていなかった」と言われた。企業にしてみれば、今まで採用したことのない子どもたちに新しいポジションを設けるよりも、技能実習生などで採用するほうが楽だと考えることも理解できる。しかし私は、彼らの若い力は、どこまで伸びるかわからない宝だと思っている。それを企業にアピールして、訴えて、インターンシップ等に送り出すことを考えている。

安里：glolab さんのようなキャリア合宿に企業を呼んでコラボレーションするという取り組みは、企業側にも様々な情報が入るため、企業の理解・努力といった点もうまく改良できるのではないかと思った。このキャリア合宿は大変よいと思う。逆に、ネックとなっていることなどがあれば伺いたい。

柴山：glolab のプログラムでも、都立高校にコンビニの会社を招いて進路ガイダンスをさせていただいたことがある。企業側は子どもたちの存在を知らないため、まず知ってもらうことが必要である。日本語教育の中で外国ルーツの子に向けた特別なメニューを組み込むことができるかもしれないと思っている。私たちのプログラムの中で、インターンを導入してくださる高校も出てきており、今、企業の組合との協働を図っている。最初、その企業組合は外国ルーツの子どもたちのことを全く知らなかったが、多様なセクターが入ることで、この支援が点ではなく面になっていく。今、これを見ている企業の方がいらっしゃったら、ぜひ外国ルーツの子たちを共に支えていただければありがたい。

中山：私は大手のスーパーや焼き鳥屋さんに飛び込んで、アルバイトのお願いをすることもある。すると「JLPT N1 を持っていますか」と聞かれた。JLPT N1、N2 といった日本語教育が社会に浸透しているのは嬉しいが、高校生が取得するのはなかなか難しい。また就労ができてプレゼン資料の作成、発表、原稿の直し、報告書の作成など、試用期間の3か月にできなければ、採用が取り消され転職を考えなければならないこともある。企業とマッチングをして終わりではなく、就職してからも、様々な日本語が求められる。日本語ができないことにより、日本に滞在することや就労していることが脅かされることもある。ぜひ、最後まで必要な支援を続けていただきたい。

角田：日本の生徒も同じように、外国につながる生徒も多様であり、進路について多様な支援が必要である。母語も日本語も困難な生徒もいる。都立高校、特に定時制高校は不登校の生徒をたくさん受け入れた。いわば教育と福祉が一体になっているような学校もある。小さな学校で先生方が寄り添い、自分のペースで勉強していく、そのような教育の受け皿もある。地域の方や中学校の先生は、ほかの日本人の不登校の生徒と同じように、多様な支援、そして寄り添っていけるような学校もあるということも紹介していただきたい。

仁村：登壇者の皆さんの話を伺い、外国ルーツの子どもが輝くためにと言っても、それぞれの輝き方があるということに気付かされた。では、それぞれが輝くために、学校、行政、民間団体、さらに今日ご参加の皆さま、また私たちは、これからどう手を携え、連携していったらよいか。

柴山：glolab の外国ルーツのスタッフは、進路を一緒に悩んでくれる大人がほしかったと言っている。市民一人ひとりにできることは、一人ひとりに寄り添い、回答を出すのではなく一緒に悩んであげる存在になることなのではないか。

安里：外国人の生徒に限らず一人の生徒として輝くことを考えたとき、そのきっかけがあるかどうか大事だと思う。母校では学生により始まった進路ガイダンスがずっと続いていて、運営のOBは、在校生がこういったことで困っているから来てほしいと、幅広い学部のOBに声かけてイベントを行っている。外国ルーツの子どもを対象としてこういったことができれば、自分のロールモデルを見つけることができると思うし、やりたいことを見つけるきっかけになると思う。

中山：子どもたちには、待ち受けている色々な問題を自分で解決する力を身につけ、最後は自分で進む道を選択して行ってほしいと思っている。私たちは、子どもたちが幼い時に思い描いていたことはなにか、それがどうなったのか、次にそれはどうなっていくのかを話し、失敗しても、親と一緒に何度も話し合いを重ね、これからの方針を検討する。親が理解することがとても大切で、親が子どもの未来を描けないと、子どもも描くことができない。思春期には、親と子の関係や色々な葛藤もあるが、若い力で開拓してくれることを期待している。

角田：先ほど生徒が孤立しているという話が出たが、実は支援者、日本人側も繋がっていない。私たち大人、先生、支援者、専門家、若者たち、研究者が繋がり、交流をすることで、新しい可能性、力が生まれる。今日、これだけの方がこの問題に関心を寄せて、このイベントに参加されているということは、まさに化学反応が起きている証拠だと思う。ぜひ、こういう機会を行政、東京都、各地域で取り組んでいく必要がある。

仁村：時間が近づいてきたので最後に一言ずつ伺いたい。

安里：以前は支援の情報がなかなか手に入らなかったのが、今、非常にアップデートされていることはとてもよかったと思う。また今日の話では glolab のキャリア合宿に非常に興味を持った。このような活動に触れる外国人の子どもが増えていけばと思う。また逆に、自分のような在日外国人が、スポットでも協力できればと思う。

中山：自治体であったり、個人であったり、NPO であったり、いろんな形で支援に携わっている方がいらっしゃると思うが、その時々局面だけでなく、その子が将来どうなるのかに焦点を合わせることを、今の支援にプラスしてくださるとありがたい。

柴山：glolab の外国ルーツのスタッフが、いつか私の代わりに団体を率いて、こういうところで話してほしいと思っている。また安里さんのように第二世代の若者たちが支援のフィールドに入って、色々な人たちとつながって、後輩のために動くということも一つの支援の在り方ではないかと、今日は強く感じた。

角田：私が高校現場にいて何よりも痛感することは、外国につながる生徒たちと関わることで、日本人の生徒たちが教育的に非常に高い学びを得ているということである。こういう子どもたち、若者、さらには大人たちが活躍することで、東京が輝き、ひいては日本社会も輝く。外国ルーツの子どもたちを受け入れるということが日本社会の輝きになる。今日がその一歩になったらと思う。

【B分科会 企画・運営担当団体（50音順）】

- 特定非営利活動法人 IWC 国際市民の会
- 中野区国際交流協会
- 特定非営利活動法人 八王子国際交流協会
- 日野市国際交流協会
- 公益財団法人 武蔵野市国際交流協会

テーマ みんなで創る多文化共生

これまでの多文化共生は、外国人への支援が中心テーマでした。ただ、フォーラムを通じてみんなで話し合いを進めていく中で、外国人とその周りの日本人とがつながることが大切だと分かってきました。では、外国人に関心のない日本人にはどうつないだらよいのでしょうか。外国人も日本人も同じ地域住民ならば、むしろ地域からの視点で考えてみてはどうでしょうか。

そこで本分科会では、多文化共生を地域で試みる方々をお招きし、地域づくりの専門家とともに、みんなで創る多文化共生の可能性について話し合いたいと思います。

司会進行 松井 和久 JICA 東京 国際協力推進員

パネリスト 米田 雅朗 新宿区立大久保図書館 館長

よぎ（プラニク・ヨゲンドラ）元江戸川区議会議員、全日本インド人協会 会長
茨城県立土浦第一高等学校・附属中学校 副校長

楊 淳婷 東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科 特任助教

アベベ サレシラシェ アマレ NPO 法人アデアババ・エチオピア協会 理事

コメンテーター 竹上 恭子 三鷹市井の頭一丁目町会 会長

山崎 亮 studio-L 代表、コミュニティデザイナー

参加者 145名

● 事例発表

米田 雅朗 新宿区立大久保図書館 館長



大久保図書館の取り組みについて簡単に説明させていただきます。新宿区は1月1日現在の人口が346,279人、外国人が40,279人、比率にすると11.6%。131か国の方が住民基本台帳に登録されており、一番多いのが中国の15,414人。比

率にすると38.3%で、多い順に、韓国、ネパール、ベトナム、ミャンマーである。アジア系の方が圧倒的に多く、特に中国、韓国が非常に多い。

大久保図書館周辺地域は大久保百人町地区と言われているが、外国の方が非常に多く住む地域で、図書館は大久保二丁目にある。人口は大久保一丁目3,857人、そのうち外国の方が1,486人、比率にすると38.5%。比率に注目すると、大久保二丁目31.7%、百人町一丁目33.4%、百人町二丁目38.1%、平均34.8%になり、大久保図書館周辺に限ると3割以上の方が外国人という地域である。またコロナ前では42%までいっていた時期があった。

こうした特殊な地域のため、「多文化サービス」

という外国語資料の収集や、外国の方を対象とした事業を積極的に進めている。具体的には外国語による絵本の読み聞かせや日本語習得のプログラムであり、こうした外国の方を対象にした事業は日本人にとっても外国の文化を知る機会になる。館内には36言語 2,845冊の本があり、その内訳は一般書約1,300冊、児童書約1,400冊、絵本約880冊である。また、韓国語と中国語のネイティブスピーカーが勤務している。

コロナ前は毎週土曜日、現在は月1回のペースで外国語のおはなし会がある。韓国語のおはなし会では、韓国出身職員と日本人職員が1ページずつ交互に読み進めていく形をとっている。タガログ語のときは地元NPOの協力のもと、フィリピン出身のお母さんに来ていただいた。アムハラ語のときは、エチオピア文化を紹介する団体に協力いただいた。アラビア語のおはなし会にはエジプトの方が家族で参加し、その場の日本人と仲良く交流していた。

色々な言語のお母さんや日本語学校の学生にも協力いただいている。「やさしい日本語の本を読んでみませんか？」というワークショップでは、皆でどの本を読んで楽しかったかといった話をしている。

日本と外国の人がおすすめの本を紹介しあう「ビブリオバトル」というイベントも毎年行っている。このビブリオバトルを発展させ、日本人と外国人が大切なものを紹介し合うといったスピンオフ企画も大変盛り上がった。

スタンスとしては「目の前のひとりを大切にしていこう」、「ひとりいれば、その背景にはたくさんの方がいる」、どこまでも「関わっていこうという姿勢」を持っている。理念は「国境を越え、人種を超え、差異を認めあい、尊重する、誰も置き去りにしない」図書館。キャッチコピーは「お国はどちら？——地球です」。日本人も外国人も皆一緒に楽しくつながっていく、そういった図書館を目指している。

新宿区の人口

(新宿区の統計から https://www.city.shinjuku.lg.jp/kusei/index02_101.html)

2023年1月1日現在

新宿区の人口 346,279人

うち外国人の人口 40,279人

全体の11.6%

(小数点2位四捨五入)

※131か国の方が、住民基本台帳に登録をしている。

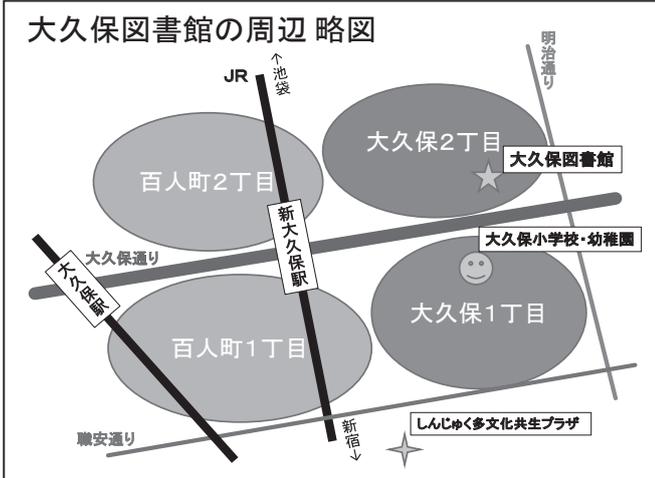
新宿区 外国人住民国籍・地域別人口(上位)

区内: 40,279人(2023年1月1日現在)

出典: 新宿区住民基本台帳の外国人住民国籍別男女別人口 令和5年1月1日より作成
(新宿区の統計のHPから <https://www.city.shinjuku.lg.jp/content/000356844.pdf>)

	国名	人口	比率(%)
1	中国	15,414	38.3
2	韓国	8,966	22.3
3	ネパール	2,501	6.2
4	ベトナム	2,278	5.7
5	ミャンマー	1,968	4.9
6	台湾	1,693	4.2
7	米国	1,070	2.7
8	フランス	705	1.8
9	フィリピン	639	1.6
10	タイ	621	1.5

大久保図書館の周辺 略図



大久保図書館の周辺 2023年1月1日現在

大久保図書館:住所 新宿区大久保2-12-7

(新宿区の統計のHPから<https://www.city.shinjuku.lg.jp/content/000356817.pdf>)

町名	人口	うち外国人	比率(%)
大久保1丁目	3,857	1,486	38.5
大久保2丁目	7,627	2,415	31.7
百人町1丁目	3,851	1,286	33.4
百人町2丁目	4,622	1,761	38.1
合計	19,957	6,948	34.8

多文化サービスの実際

1. 外国語資料の収集
2. 外国の方を対象にした事業
 - ・韓国語、中国語ほか外国語による絵本の読み聞かせ
 - ・日本語習得のプログラム ⇒「読む」「話す」

日本人にとっては外国の文化に触れる場をつくる ⇒国際交流、相互理解
3. 韓国語と中国語を話すことができるネイティブ・スピーカーが勤務
 - ・母語で相談を受けた場合は、母語による対応が可

住所
大久保2-12-7

4階建ての複合施設

- 1階 特別出張所
- 2階 図書館
- 3階 地域センター
(会議室、和室など)
- 4階 地域センター
(多目的ホール)



外国語資料所蔵数

(2022年4月現在)

・36言語

・2,845冊

一般 1,386 冊

児童 1,459 冊

うち絵本 880 冊

多言語の絵本



外国語の絵本の読み聞かせ

【コロナ前】

- ・毎週土曜日おはなし会
 - 第2土曜：英語と日本語
 - 第4土曜：韓国語と日本語
- ・随時様々な言語で
(中国語、ネパール語、ベトナム語、アラビア語など)

【現在】

- ・月1回のペースで、外国語のおはなし会

スタンス

目の前のひとりを大切に

ひとりいれば、その背景には複数いる

関わっていかうとする姿勢

理念

国境を超え、

人種を超え、

差異を認めあい、尊重する

誰も置き去りにしない

お国はどちら？

— 地球です

よぎ（プラニク・ヨゲンドラ）

元江戸川区議会議員、全日本インド人協会 会長

茨城県立土浦第一高等学校・附属中学校 副校長



giよぎ (社会福祉家・講演者)

「みんなで創る多文化共生」というテーマでお話をさせていただく。はじめに簡単に自己紹介をするとインド出身、日本の滞在期間はインドで過ごした19年を超え、23年になる。日本では集合住宅に住み、団地の理事としてまた全日本インド人会会長として多文化共生を推進してきた。

まず、我々は基本を忘れがちであるが、多文化共生とは何だろうか。日本には外国人が多く住み、日本人も外国人もそれぞれの立場で互いに不安や不満を持つ部分がある。それは何かというと、生まれ育った環境や道理、道徳、様々な違いによるものであり、いわば客観性がなく主観的な部分である。パーフェクトな答えで解決できるかということではなく、最終的にはお互いのことを受け止めて楽しくやっていこうというのが多文化共生ではないだろうか。

次に、「本当に日本に外国人が必要か」ということだが、様々な人に聞くと、要るという人もいれば、必要ないという人もいる。私はつい先ほど、中野駅に降りた時に日本人からひどい嫌味を言われた。常日頃ではないものの、時々そうした経験をするの

が現状であるが、日本には少子化や人手不足、スキル不足、社会保障等の課題があり、どちらかといえば外国人は必要である。

では、多文化共生を進めるにはどうするか。身近でできることはいくらかでも考えられる。互いの言葉について考えたり、一緒に病院に行ったり、ご飯を作ってみたり、限界や制約は何もない。楽しいと思えることであれば何でも、どんな小さなことでもやってみればよく、そうしたところから「みんなで創る多文化共生」を進めていけるだろう。

ただ、「みんな」と言った時に、僕らが日常でやることだけかと考えるとそうではない。これらの問題を解決するための「みんな」の定義は自助、共助、公助である。外国人や日本人が自分で努力すべき部分は自助。そして、町会、職場、企業やNPO等、コミュニティの努力(=共助)も必要になってくる。例えば、町会の祭りに外国人が参加しないのであれば、共助の部分として外国人を誘って一緒に集うといったことを町会や協会がやるべきである。また、外国人のニーズを聞いて国が正しい政策を作っていく公助の部分も大きい。法律、警察、出入国在留管理庁、様々なところの政策を考えなければならない。日本の公立の学校では多様性、多文化共生の教育が進まず、そうした現状も変えなくてはいけない。

最後に、外国人を一括りに見てはいけない。それぞれの国から来た人はそれぞれ違った環境で育っており、皆違う人間である。小さい子ども、大人、年配者、ハーフ、帰国子女等、それぞれの人を理解して多文化共生を進めなければならない。

多文化共生
Diversity, Multicultural symbiosis

みんなで創る多文化共生

国際化市民フォーラム
in Tokyo

よぎ (フランク・ヨゲンドラ)
2023年2月4日

© Yogendra Puranik 'Yogi' <jnkjapan2020@gmail.com> 1

目次

03 よぎについて

04 多文化共生とは？

05 そもそも外国人は必要？

07 どこに課題がある？身近で何が出来る？

10 外国人が抱える課題はこれだけではない

11 多文化共生における役割分担

12 外国人は一括りではない、外国人代表者会の設置

増えていく外国人

www.prof.aichi.jp/sochi/ki/tabunka/gaikokujinjumousu-330-6.html

© Yogendra Puranik 'Yogi' <jnkjapan2020@gmail.com> 2

Hello!

I am Yogi (よぎ)。

社会福祉家・講演者・著者
本名 フランク・ヨゲンドラ (Puranik Yogendra)

- 1977年6月インド・ムンバイ市生まれ。現在、45歳で20歳児のパパ。
- インド・日本・中国・仏国で理系、情報技術、経済学、経営学、言語を学ぶ。
- 生産企業・IT企業・銀行・政界・教育界の27年以上の国際的な勤務経験。
- 日本初のアジア出身の議員、日本初の外国出身公立学校長になる。
- 国内では50以上の大学、省庁、役所、企業にて講演。国際講演も。
- 日本在住23年。長年都内の集合住宅に住み、理事として団地内の共生を促進。
- 江戸川印度文化センター設立。日印文化交流を促進。全日本インド人協会会長。

© Yogendra Puranik 'Yogi' <jnkjapan2020@gmail.com> 3

多文化共生とはなんぞや？ ⇒ 一緒に楽しもうと！

日本人の悩み
外国人の悩み
日本企業の悩み
外資系企業の悩み

外国人は生活のルールを守らない。仕事を奪われる不安。

外国人人材は必要だけど、社内カルチャーに合わない。

ずっと頑張っているのに認めてもらえない。もう少しオープンになってくれないかなあ！

ずっと日本で投資してきたのに、成果が出ない。日本の顧客や行政はフェアではない！

このギャップを、互いの文化的背景などを理解し、認め合って、みんなでハッピーになろう、ということ。

先ず理解するべきことは、このテーマは主観的で、感情が関わるもので、パーフェクトアンサーがないこと。

© Yogendra Puranik 'Yogi' <jnkjapan2020@gmail.com> 4

外国人って要る？ ⇒ 多様な意見がある！

国の意見

- 人手が足りない。
- 少子高齢化で社会保障制度が維持出来なくなる。

明確なビジョンと政策の打ち出し。

要らないわ！

- 仕事が奪われる。
- 社会の秩序が乱れる、犯罪が増える。

外国人の良いイメージづくり。

いいんじゃない！

- 日本の文化、言葉が好きな方々もいる。
- 日本文化が世界移住に広がる。

特に、直ぐ近くに外国人がたくさん住んでいないまたは外国人との付き合いで悪い経験のない方の意見。
外国人と結婚している、海外に行ったことがある方など。

共生社会創りの担い手に。

© Yogendra Puranik 'Yogi' <jnkjapan2020@gmail.com> 5

外国人って要る？ ⇒ 要らない訳ではない！

少子高齢化

- 人口減が起きている。
- 社会保障制度の維持が難しくなっている。

社会構造精緻化に向けての政策。

人手不足

- 人手不足の分野がある。
- 外国人職員を必要とする職場がある。

移民受入に向けた確かな政策。

スキル不足

- 国内の失業者が多い。
- 国内人材向けのリスティング育成が進まない。

学校・企業内教育の再出発。

● ITや高度研究などへの分野においては人手不足が激しい。
● 輸出入または教育分野などにおいては外国人の参加が必要。

● 企業や社会のニーズの変化に見合うよう人材育成が進まない。
● 企業でも時間をかけて人材を育てていくやり方をやめてしまっている。

© Yogendra Puranik 'Yogi' <jnkjapan2020@gmail.com> 6

2023年4月に自伝を出版予定 ⇒ 移民社会の全てを語る yogi



- よぎ(プラニク・ヨゲンラ) <https://ja.wikipedia.org/wiki/Yogenra_Puranik>は日本でいつものバリアを乗り越え、テレビ、新聞などにより取り上げられる。彼は移民のロールモデルであり、移民社会、多文化共生、教育、国際ビジネス、持続可能な開発などのようなテーマで著作、大学、学校、起業ワークショップなどで数多くの講演を行っている。
- 1977年、田んぼに半が蓮を植える自然豊かな印度の田舎でよぎ(プラニク・ヨゲンラ)が生まれた。親戚でサッカーの練習に明け暮れる元気な子ども。印度流の多言語環境で多彩な教育を受け、1997年に20才で国費留学生として来日。日本に恋するが、留学を終え、印度に戻って家族と暮らす。
- 2001年、職場から日本に派遣され、留学中に好きになった中国人女性と運命の再会。二人の恋愛はスタートするが、彼女はとある事情で中国へ帰国。よぎは彼女を追い掛け、中国で結婚式を挙げ、印度で長男が誕生する。
- しかしよぎは「日本に導かれた運命」の持ち主。再び会社から日本に派遣され、シングルバリエとして子育てしながらIT企業で働く。大型団地に住み、印度人コミュニティのボランティアをやる日々。明命の母屋として夢を実現し、日本人と外国人のトラブルを解消する。
- 2011年、東日本大震災、バングラदेशに母国へ逃げる在留インド人の姿を見て、情報や連携の不足を痛感した。一つの解決策として全日本インド人協会を立ち上げ情報網を作り始める。もっと広い意味の助けが必要だと感じ、江戸川区議会選挙に挑戦し、日本初アジア出身の議員になる。
- 2022年、茨城県で民間校長として採用され、日本初外国出身の公立学校校長になる。IT企業の社員、銀行マン、人気印度料理店経営者、社会活動家、政治家、そして教育者。超コネクなストーリーを通じて日本の「共生」「教育」について語る。

© Yogenra Puranik 'Yogi' <jnkjapan20@gmail.com> 13

Thank you!

Do you have any questions?
jnkjapan20@gmail.com
www.rekacorp.com/about-us



© Yogenra Puranik 'Yogi' <jnkjapan20@gmail.com> 14

楊 淳婷(やん ちゅんていん) 東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科 特任助教



アートと多文化共生についてお話させていただく。東京芸術劇場の話をするが、東京芸術劇場を代表して話をするわけではなく、日本で暮らす台湾人という一個人としての観点からお話しさせていただきたい。

東京芸術劇場（以下、芸劇）は公立の劇場で、大、中、小のホール、ギャラリー等のスペースを持ち、年間を通してクラシック音楽、舞台芸術の上演や美術展示を行うほか、市民による展示ができるスペースも持っている。芸劇は人材育成・教育普及の拠点になることをミッションに掲げ、多文化共生の活動は人材育成・教育普及事業の一環として行われている。劇場ツアーでバックステージを見せる等、芸術に敷居の高さを感じている人でも入りやすい間口を用意することが教育普及の

ミッションである。

芸劇は、所在する豊島区の在留外国人が多いにも関わらず、外国人コミュニティとのつながりを持っていなかった。そのため、リサーチを通して外国人コミュニティとつながりを作り、劇場としてどう芸術と多文化共生を結びつけられるのかについて考えようとした。2020年より講座をはじめ、2021年には活動が広がった。その中の「アーティストの視点から多文化社会を捉える」という公開講座で、影絵の活動のレクチャーパフォーマンスを行なった。それが高い評価を受け、2022年度の「多文化共生とアートに関するリサーチ」プログラムへと発展した。

その後、豊島区にある団体を調べ、区内在住のキーパーソンの話を聞きに行く等した結果、プログラムは3つの活動に集約された。1つ目はインターナショナルイスラミーヤスクールという、大塚にあるイスラーム児童が通う学校との活動。2つ目は、日本語学校のメロス言語学院との活動。3つ目は豊島区で出産・育児をしている母親達を支援するNPO団体と連携した活動である。特筆すべきは、イスラームコミュニティと活動を行うにあたり、イスラーム文化を知るためにマシッド大塚というモスクを訪れて話を伺ったことである。イスラーム

ム文化では偶像や動物等崇拜されるものをモチーフにしてはならないということで、植物を用いた影絵を行うことになった。

影絵のプロジェクトを通じて一番伝えたいことは、影を見つめる経験は、日光に当たって自分の影を見つめ自分を発見するようなものであり、それほど知識・教養を前提としないため、非言語的コミュニケーションが有効に働くということである。またストーリーの中で普段見せることのできない自分や他者の内面が投影され、より深い認識を促すことができる。

ここで、影絵にちなんでアートは素晴らしいという話に留まらず、アートを用いる懸念もお話し

したい。それはうわべの多文化主義になりかねないということである。参加する一人ひとりの想い、困難を露呈するようなストーリー構成にしなければ多文化共生の理解につながらない可能性がある。一方で、それらをアートで表現することは裏を返すと、社会で弱い立場のマイノリティのストーリーを暴露することにもなりかねない。どこまで開示してよいかという倫理的な配慮も非常に大事な話である。また、アートの活動の中には簡単にヒエラルキーが生まれることもある。このため、芸劇は活動におけるプログラムのガイドラインを作り、それに従って行動するよう規定した。



楊淳婷 ヤンチュンティン
台湾台北市生まれ
学術博士：東京藝術大学、2019年
専門：芸術運営
キーワード：多文化共生、移民、移住、アートプロジェクトなど

◆台湾-日本間の移住を繰り返す。在留資格は「高度専門職1号」(5年、「永住者」資格をいまだに持っていない。)

→日本に長年住む予定はなかったが、結果として長年住んでいる。
→(コロナ禍以降)ジェンダーギャップ指数が大きい日本で女性として生きていくことに不安を抱える。

◆ちなみに、1年間フランスに語学留学した経験あり。

→社会に関心を持つようになる。

→日本において、地域に在住する人々や市民一般と密接に連携しながら協働的に行うアートプロジェクトを実践する研究室に入った。

→自身の背景と関係するテーマ(移住、移民)に焦点を当てて研究・実践に取り組んできた。(関心はアート×社会にある。)

・アートプロジェクト「イミグレーション・ミュージアム・東京」の企画統括(2019年度、足立区)
・シアター・コーディネーター養成講座《多文化共生・基礎編》の監修(2021年度)や多文化共生とアートに関するリーサープログラムの参加経験(2022年度、東京芸術劇場)
・海外にルーツを持つ子どもたちに向けた「性的多様性について考えるワークショップ」(2022年度、可見市国際交流協会の進学支援教室)

東京芸術劇場×多文化共生

芸劇の意図：豊島区において、リーサーを通して外国にルーツを持つ方々とのつながりを作り、「芸術はどのように多文化共生と結びつけられるのか」について考えること

・研修生、スタッフ向け多文化共生講座(2020年)
・多文化共生に向けたアートプログラム(2021年～)
→レクチャー、人材育成講座、劇場ツアー(やさしい日本語)、ワークショップなど
・「多文化共生とアートに関するリーサー」(2022年～)
→《東京と変身 他、影絵掌編》

参照：芸劇HP <<https://www.geigeki.jp/performance/event299/>>

東京芸術劇場 多文化共生とアートに関するリサーチ

《東京と変身 他、影絵掌編》



主催:公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場
協力:日本イスラーム文化センター、学校法人香川学園メロス言語学院、NPO法人 Mother's Tree Japan

出所:芸術HP<<https://www.geigeki.jp/performance/event/306/>>

東京芸術劇場 多文化共生とアートに関するリサーチ

《東京と変身 他、影絵掌編》

企画・構成
宮本真典(みやもとまこと)

キュレーター:東京芸術大学准教授、海外子女教育振興財団の派遣プログラムでバンコク赴任。武蔵野美術大学パリ賞受賞により渡仏。原美術館学芸部を経て2006年に東北芸術工科大学へ。2019年3月まで同大学教授・主任学芸員を務め、東北各地でアートプロジェクトや東日本震災の復興支援事業を展開。2014年に『山形ビエンナーレ』を創設しプログラムディレクションを3期にわたって手がける(2018年)。2019年に角川武蔵野ミュージアム(隈研吉氏設計)開館事業にクリエイティブディレクターとして参加。2022年に東京芸術大学美術学部絵画科油画専攻准教授に着任。



撮影:Kohki Shikata

影絵と音楽
川村夏平(かわむらこうへい)

影絵師、ミュージシャン。インドネシア共和国・バリ島のべ2年間滞在し、影絵人形芝居「ワヤン・クリット」と伝統打楽器「ガムラン」を学ぶ。アジアを中心に世界各国で影絵と音楽のパフォーマンスを発表。また、日本各地でフィールドワークやワークショップを通じて、土地に残る物語を影絵作品として再生させる活動に取り組み。ガムランを使った音楽ユニット「薄空時間」主宰。第27回五島記念文化賞美術新人賞受賞(2010)。



撮影:小笠原

+東京芸術劇場スタッフ・研修生、プロジェクトメンバー/参与観察、記録

出所:芸術HP<<https://www.geigeki.jp/performance/event/306/>>

《東京と変身 他、影絵掌編》

掌編1「ニュー・トーキョー・アラベスク」

インターナショナルイスラミーヤスクール大塚の児童による影遊び



写真:ヤン



《東京と変身 他、影絵掌編》

掌編1「ニュー・トーキョー・アラベスク」

インターナショナルイスラミーヤスクール大塚の児童による影遊び



写真:ヤン

《東京と変身 他、影絵掌編》

掌編2「東京と変身」日本語を学ぶ若者たちのポートレート

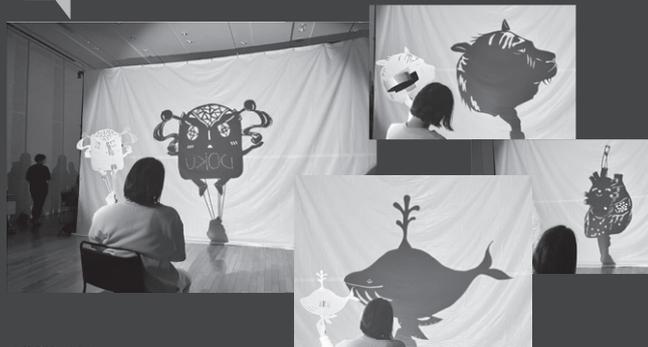


写真:プロジェクトメンバー

《東京と変身 他、影絵掌編》

掌編2「東京と変身」日本語を学ぶ若者たちのポートレート

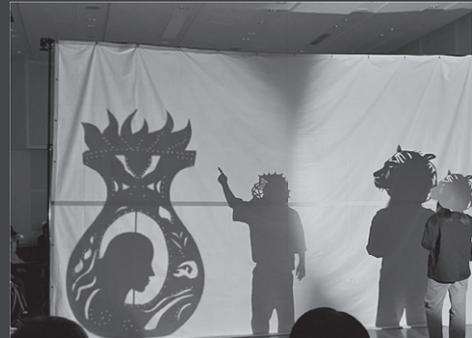


写真:プロジェクトメンバー

《東京と変身 他、影絵掌編》

掌編2-「東京と変身」日本語を学ぶ若者たちのポートレート



写真:プロジェクトメンバー

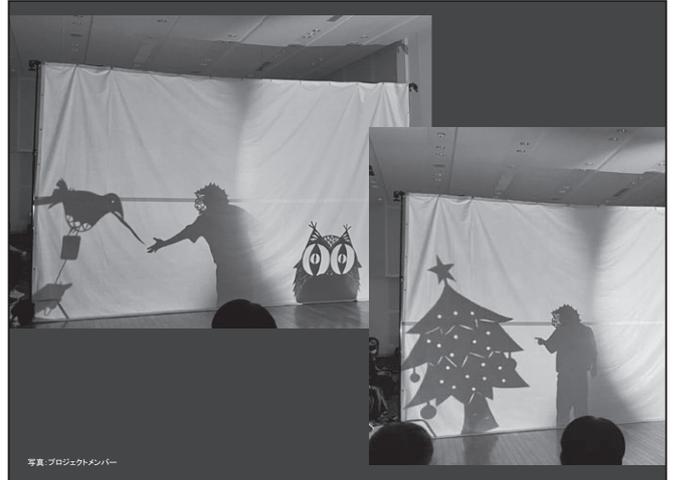


写真:プロジェクトメンバー

《東京と変身 他、影絵掌編》

掌編3-「わたしのこもりうた」海外ルーツの母たちの声を聴く



写真:ヤン

《東京と変身 他、影絵掌編》

掌編3-「わたしのこもりうた」海外ルーツの母たちの声を聴く



写真:ヤン

《東京と変身 他、影絵掌編》

掌編3-「わたしのこもりうた」海外ルーツの母たちの声を聴く



写真:ヤン

アート×多文化共生の可能性とは？

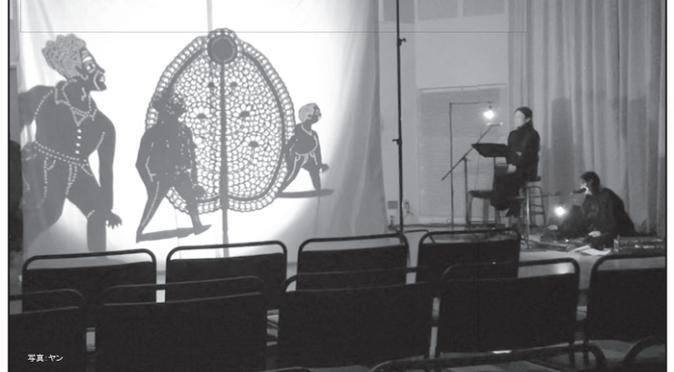


写真:ヤン



アベベ サレシラシエ アマレ NPO法人アディアベバ・エチオピア協会 理事



1996年に留学生として来日してから日本に住んでいる。当時勤めていた会社で私は日本語が全然分からず、テーブルの向かいにいたおばちゃんが「日本語が分からないのに、どうしてこんなに高い給料をもらえるの。」と言っていると教わり、ショックを受けた。しかしおばちゃんが言ったことは、日本語が分からないと日本という国が分からないということだと捉え直し、独学で勉強を続け、おばちゃんのおかげで日本語ができるようになった。日本語が分かると日本という国も分かり、日本に住むために日本語は大切な道具だと分かった。

我々エチオピア人には、元々日本エチオピアコミュニティという任意団体があり、理事として私も少し活動していた。その任意団体は毎年1回正月に集まり、エチオピア料理やダンス等をしていた。

役員も、会員も、イベントに参加している人もエチオピア人で、日本人とつながる場所や機会は何もなかった。

2005年、エチオピア総選挙の動乱で大変な状況になり、エチオピアの若者達は欧米、日本を含め様々な国に逃げたり亡命したりした。これまで日本にいるエチオピア人は学生や国際結婚した人達がほとんどだったが、それを機に急にエチオピア人が増え、それと共に交通事故、病気、生活困難、就労問題、労働紛争等様々な問題が出てきた。言葉の壁、文化やエチケットの知識不足、ストレンジャーコンプレックスが影響し、エチオピア人が日本社会とつながりにくくなっていると実感した。2009年9月22日に総会を開き、日本の法律のもと責任感のある組織と、日本人と一緒に活動を行う必要性を認識し、NPO法人アディアベバ・エチオピア協会が誕生した。

このNPOの活動は3つの柱で構成されている。1つ目は在日エチオピア人支援、2つ目はエチオピアと日本の文化・スポーツ交流促進、3つ目は本国エチオピアの貧困層支援である。メディア等は我々をエチオピアコミュニティと言っているが、我々には地域社会の一員になりたいという気持ちがある。なぜならヨーロッパ等の海外を見ると、外国人が自

分達の「～～タウン」を作ったことで、現地の人との間に壁ができ、問題になっているからである。そこでコミュニティということをやめ、社会の一員になることをミッションとして決めた。

そしてこのミッションを達成するために食事外交という戦略を考えた。誰かを相手に座って食事をすれば、心を開いて話し合える。まずはこうした交流会から始めた。初めはほとんどエチオピア人だったが、今はだいたい60%が日本人である。日本人と一緒に活動するため、会員、役員、ボランティアの加入を促進し、今では日本人もたくさん活動している。

必要なことは隣人を愛する、尊敬する態度である。それから現地の法、ルールを尊敬することである。町内会にも加入し、地域の祭りや活動イベン

トにも参加した。また、各団体や大学、学校、一般市民とコラボしたイベントやトークショー等をしてしながら我々は変わってきた。

結果、たくさんの日本の皆さんとつながり、親睦を深めた。日本人の役員、ボランティアのおかげで日本語を学び、文化とエチケットを身につけた。現地の人々とつながり、葛飾区もエチオピア人の故郷だと感じる。メディアが気を配り、我々の意向も一般市民に届けてくれた。

我々にとって国籍というのはパスポート上に書かれたものであり、国は心の中で育った感情だと考える。当会の理念は、葛飾区で独立したエチオピアタウンを作るのではなく、現地の社会人として共に生きることである。

皆で作る多文化共生

国際化市民フォーラム in Tokyo
アベベ サレシラシェ

初めに：

私は、NPO法人アディアベバ・エチオピア協会理事のアベベ・サレシラシェと申します。エチオピア人です。来日している時代はエチオピア人留学生しかなかったし、日本語も分からなかったので生活の困難、人間関係の問題もありました。

ある日、一緒に働いた年寄りの女の人が、あなたは日本語からないでどうしてこんなに給料受けているのと突然に話、私もショックを受け、言葉を分からないと心の中抱えている夢や目標は達成することが出来ないだろうとストレスが高まった。

私は、おばちゃんコメントを聞いて否定的な態度を取りましたが、落ち着いて考えると日本語を勉強する必要性を理解し、当日仕事帰りに本屋で文法や漢字の本を買って独学を始まりました。おばちゃんコメントのおかげで数年渡って日本語を学び、生活や人間関係も良くなりました。

NPO法人アディアベバ・エチオピア協会の設立きっかけ

元々Ethiopia Community In Japan「日本エチオピアコミュニティ」という任意団体がありまして、エチオピアの正月集まって伝統的な料理やダンスなど交流会を毎年一回開催してきたが、

在日エチオピア人はほとんど留学生であり人数が非常に少なかった。

団体の役員や会員は100%エチオピア人で、日本人と繋がる機会なかった。

直面した課題：

2005年のエチオピアの総選挙混乱によって沢山若者が欧米へ亡命し、日本に来る人たちも増えてきた。それで、交通事故、病気、生活困難、就職問題、労働紛争、難民の課題など発生

そして、言葉の壁、文化とエチケットの知識不足、ストレンジャーコンプレックスの影がさし、

日本の社会と繋がりにくくなったことを実感。

問題の解決の方針を話し合い

2009年9月22日元任意団体の総会を開き

- 日本の法律の下で責任感がある組織の必要性を認識
- 日本人と一緒に活動を行う必要性を認識

従って、NPO法人アデアベバ・エチオピア協会という組織が誕生。

活動は三つの柱で決定

- 困難している在日エチオピア人支援
- エチオピアと日本の間橋渡しとして文化・スポーツ交流促進
- 本国エチオピア支援

エチオピアと日本の間橋渡しとして文化・スポーツ交流促進するための戦略

食事外交「food diplomacy」施行、毎年3回主な文化交流会開催

日本人と一緒に活動するため、会員やボランティア派遣

現地の人々とつながるため：

- 隣人を愛する、尊敬する態度
- 現地の法（書かれた、書かれなかった）ルールを尊敬
- 町内会メンバー登録「渋谷区町内会」、参加
- 現地の活動、イベントなど参加
- 団体、大学、一般市民とコラボ、イベントやトークショー

結果は

沢山日本の皆様とつながり親睦も深めた

日本人の役員、ボランティアのおかげで日本語を学び、文化とエチケットも身に着けた

現地の人々とつながり葛飾区もエチオピア人の故郷と感じました

メディアが気を配り我々の意向も一般市民にお届けしました。

まとめ

私にとって、国籍はパスポート上で書かれたもので、国とは心の中で育った感情と思います。私は、日本とエチオピアでは同じ期間居住しているので国という心の中育った感情はほぼ同じと思います。だからこそ、ただの外国人ではなく日本の社会の一員と感じております。周りの日本人たちも同様に受け入れていて思っております。

当会の理念は、葛飾区で独立したエチオピアタウン作るではなく現地の社会の一員として、ともに生きるという思考である。

ご清聴ありがとうございました。

竹上 恭子 三鷹市井の頭一丁目町会 会長



井の頭一丁目町会は、三鷹市の東の端にあり、約2,000世帯のうち、800世帯が町会に加入している。戸建が多い地域だが、世代交代の建て替えて新築戸建・低層アパートが増え、それに伴い、単身者・若いファミリーが増加している。

町会活動の目的は3つ、「安全安心な町」、「いつまでも住み続けたい楽しい町」、「やりたい人を応援する町」。現在3つ目の「やりたい人を応援する」に力を入れている。私はずっと町会活動を楽しみたいと思っている。楽しくなければ続かない。様々な世代が関わってくれているが、やはり多世代は発想も広がって面白い。「おたがいさま！」で支え合える地域にしていきたい。子育ても年をとっていくことも大変だが、交流することでお互い大変さも理解できる。そうすると何かお手伝いしたいという気持ちになるのではと思う。

地域の課題解決は町会くらいがちょうどよい規模なのではないか。顔が見える関係の中で取り組みたいと思っており、コロナ前には子育てパパママチームが町内の三鷹台児童公園を地域のリビングしようと「いのいちリビング」というイベントを開催した。これがとても好評で、メンバーが次々とイベントを企画し開催してきた。

コロナ禍では、3密を避けるようにという時には3つの青空イベント、外出自粛の要請が出た時には3つのステイホーム応援事業、そして、シニアこそオンラインで交流をということで、Zoomでおしゃべりクラブを立ち上げ、今も活動を続けている。

外での活動も大事にしたいということで、三鷹台児童公園で日曜カフェや、絵本の読み聞かせ、太極拳、ラジオ体操を行っている。また、火曜日は町会デーとして、「赤ちゃんとママの会」、シニア向けの「スマホ相談サロン」、小学生の居場所づくりのための、「あつまれ！いのいちキッズ」といった各世代の居場所づくりを行っている。

国際交流の事例を少し紹介させていただく。「絵本を多言語で」というのは、「いのいちリビング」の活動で、アメリカ、ベルギー、トルコ出身の3名の方に協力いただき、日本やそれぞれの国の絵本を読んだ。コロナの前には「井のーリレーおもしろ講座」を開催し、第2回は町内にいるカナダ人で和紙の研究者ポール・デンホード氏に、日本語で和紙についてお話いただいた。

町会は自分達の町をよくする組織だと私は思っている。地域で孤立を防ぎたい。これが一番の願いである。大きな社会問題になる前に、地域のつながりの中で解決できることもあるのではないか。町会の役目は、人と人が出会う場、つながる場を作ることだろう。どうすれば皆さんが新しい土地で打ち解けられるようになるかということは、町会としても大きな課題だと考えている。



■米田氏（新宿区立大久保図書館 館長）の発表

本が好きだという人達がたまたま日本人だったり、外国人だったりするという構図が非常に大切ではないか。外国人と「どう暮らすか」「どうするか」といったものを前面に出すより、本や料理、あるいはスポーツ、音楽が好きの人に、「国籍・人種は関係ない」、ということが大事なテーマになる気がする。これはいわゆる興味に基づいて集まる人達で、便宜上これを興味型コミュニティと呼ぶとすれば、もう1つは竹上さんから紹介いただいた町会のように、地縁型コミュニティというものもある。この興味型コミュニティがどのようにしたら地縁型コミュニティに近づいたり、接続したりすることができるのか。図書館の事例を聞き、本というとても大きなコンテンツには料理も陶芸も、スポーツも音楽も入っていてジャンルが豊富で強いと感じた。

■よぎ氏（全日本インド人協会 会長）の発表

日本にとって外国人が要るか要らないかという話があったが、要らないわけではないと謙虚な立場であった。一方、同じ人間として、役に立つから日本にいてよいと誰が言えるのか。必要性から考える必要はないということ、はじめに言わねばならないだろう。

その上で、共通の興味に基づいて交流しているのは米田さん達と非常に近いところがある。まさに興味型のコミュニティであり、これが多文化になっていけばいくほど、日本人ばかり集まるよりも興味の幅が広がって楽しい場所になっていくだろう。外国人を一括りにしてはいけないということで、具体的なニーズの分析が必要だということも伺った。

■楊氏（東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科 特任助教）の発表

アートと多文化共生ということで影絵の話があった。影を見つめるというのは、どの国の人も参加できる非言語コミュニケーションだという話があり、なるほどと思った。一方で、アートを用いることの課題もいくつか挙げてもらった。アートは魅力的だが表面的な美しさ、楽しさで終わってしまう危険性があり、人間の生きづらさも含め、しっかり伝えていく必要があるということであった。ただし、個人が抱える生きづらさを暴露してしまう可能性もあるため注意が必要という話があり、これは深い話だと思った。じっくり交流する時間資本を用意できるのであれば、表面的な楽しさから始める、最初から深いことを暴露しないといったやり方もある。その意味では貨幣資本、つまりお金はそれほどかからないが、時間をきちんと資本として用意できるかどうか重要になってくるだろう。

■アベベ氏（NPO 法人アディアババ・エチオピア協会 理事）の発表

一緒に働いていたおばちゃんから「日本語分からないのに高い給料をもらっている」と言われたにも関わらず、そのおばちゃんのおかげで勉強するようになったと言える、心の広い方である。衝撃的だったのは食事外交という興味型のコミュニティが、町内会に入ることを基本ルールにするまでに発展していったことである。興味型コミュニティから入り地縁型コミュニティに接続していくということを、ここまでできるというのは見事だと思う。これは理想的な展開に見えるが、そこに更なる課題はあるのか聞いてみたい。

■竹上氏（三鷹市井の頭一丁目町会 会長）の発表

面識社会という少し造語のような言葉だが、その可能性というものが最近気になり始めている。人と人の顔が見える関係の中だからこそ乗り越えられる課題がある。これはごくごく基本的なことだが、多文化共生においても顔が見える関係づくりが重要ではないかを感じる。

● パネルディスカッション

松井：米田さんは本が媒介だと言っていたが、地域とのつながりで考えた時に興味型コミュニティの出発点としての図書館はどのようにその意味を感じるか。

米田：興味型コミュニティという言葉聞き、大久保図書館の取り組みがまさしく当てはまるだろうと強く感じる。おはなし会やビブリオバトル等様々な面白いイベントをやっているが、そうすると区内や遠隔地から興味を持った方がお見えになる。逆にこちらから図書館に来た外国の方に声をかけ参加する方もいる。一番参加に結びついているのは直接声をかけた方であり、そこからつながりを広げていく。興味型がいかに地縁型になっていくかというところは発展途上で、そこに向けて進んでいるところである。

松井：よぎさんにお聞きしたい。江戸川区で実際に団地に住まれて、地縁型のコミュニティで人を集めたり一緒に活動をしたりする時に、どのような苦労、あるいは成功・失敗があったか。

よぎ：インド人コミュニティから見ると、インドは1つの国の中に様々な言葉、習慣、祭りがあり、その祭りの時期も異なっており、まるで全然違う国がたくさん存在しているようなところである。このため、どこかのインドの伝統的な音楽や舞踊をやっても集客が難しいというのがコミュニティの課題である。

また、団地で理事をやった時、夏祭りにインドの踊りを入れたいかと説得し、時間はかかったが実現した。江戸川区には中国人、韓国人も沢山いるが、中国の踊りを入れようとする、歴史が皆さんの頭の中にあってインドの踊りのようにはいかない。

協働する範囲を広げていくことも必要である。大使館や区役所等の行政がコミュニティに声をかければイベントの参加者は増えるが、いくら行政に言ってもさほどの協力は得られない。防災や様々なメッセージを送る等は、行政が関わることがやはり必要だと感じる。コミュニティはコミュニティで動くが、行政の大きな役割として地域のコミュニティと関わることを投げ出してはならないだろう。

松井：竹上さんは実際に町内会で様々な場を作ったり、イベントをやったりされているが、町会と行政の関係というのはどういう形か。

竹上：防災イベントは防災課や消防署に協力してもらうが、向こうから声がかかるというよりは町会から情報を発信している。もう少し大きなエリアで考えれば行政と関わることで集客につながると思うが、小さな町会では行政との関わりというのはあまりないと思う。

行政とよい関係を作りつつこちらがやれることは率先してやり、協力してもらいたいところをお願いをしていきたいと思う。

松井：規模というのはポイントだと思う。アベベさん達が町内会に入ったのは、やはり活動は自分の町内会から始めるという意味か。

アベベ：町内会に入ったのは日エチオピア人を支援するためでもある。地域の人と一緒に働き、活動することが大切で、我々外国人は地域の人から反感を持たれると大変な問題になるが、逆に地域の人として受け入れられれば活動がスムーズになる。

松井：山崎さんにお伺いしたい。全国のコミュニティデザインあるいは地域づくりで、行政と行う場合と単位の小さい生活空間で行う場合とでは、特徴やアプローチに何か違いはあるか。

山崎：行政と言っても、500人ぐらいの村と500万人ぐらいの市があったりする。規模が小さければ小さいほどやりやすく、500万人ぐらいの市でやるときは区域を区切って大きくても小学校区ぐらいまでの規模で実施する。

また規模だけではなく、そのコミュニティの種類、どこに実行力や推進力があるのかを考えている。この意味で言うと、よぎさんの話は大変複雑である。祭りにインドのお祭りを入れるとなると、他のも全部入れようという話になったりもする。一見、祭りという興味型コミュニティで集まっているように見えるが、実は地縁型コミュニティのど真ん中の精神性のところに突っ込んでいたりする。こうした地縁型のコミュニティにアプローチする時には入り方に考慮が必要である。

一方、町会側もうまいやり方でないと入れないと言っているのは駄目であり、入りたいという人達と一緒に顔の見える関係を作り、地域をよくしていく新しいタイプの町内会を作っていかなければならない。それには昔から日本に住んでいる凝り固まった人達だけで話し合っても、未来は見えてこないだろう。

よぎ：このような議論から早く卒業したいというのが、率直な感想である。防災や教育等、日本人と外国人が一緒になって日本のためにどう貢献して行くかというところを考えていきたいが、いまだ同じところに留まっている。町会レベルで言うと言語の壁が高く、コミュニケーションが進まない。では、自分が対応マニュアルを作って、それを全ての町会に共有できるかというそれは難しく、そうした経験等を共有する役割はやはり行政にあると感じている。

また、防災に関しては様々な壁があり、例えば避難所の準備委員は学校職員、行政の職員、町会の役員等が中心で、外国人がなかなか入っていけない。地域によっては、消防団は準公務員として外国人の入団を許していないところもある。このような状況をいつまで続けるのかと思う。

山崎：僕は元々兵庫県庁に5年半いたが、役所はいまだに地縁型コミュニティが集まって市や町や県ができていていると思っている。だがそれは戦前の話である。役所は町会だけに話を進めるのではなく、興味型がいずれ地縁型に発展していく可能性を認め、外国籍のコミュニティもパートナーと一緒に仕事をしていくべきであろう。

例えばそのパートナーが基本的なマニュアルを作ったなら、これをどう展開できるか考えていくのは存分に役所の仕事のはずである。自分自身できていなかった自戒の念はあるが、役所は地縁以外のコミュニティにも目を向けるべきである。また一部の人の話を聞くとえこひいきになるというような言い分は、もう70年前の話であると理解しなければならないだろう。

松井：行政という意味で楊さんから見て、東京都がアートを通じて多文化共生のプログラムを東京芸術劇場で行うというのは、東京都にとって意味のあることだとお考えか。

楊：ご質問は私の専門外であり、私が評価するのは気後れするが、私の所属していた研究室は足立区のシティプロモーション課と連携して活動に携わった期間が長いため、その経験からお答えしたい。

先ほど山崎さんがアートに関するコメントの中で「時間資本があれば、楽しいことから入ることも考えられる」という話があったが、まず、アートの役割といった視点を補足しながら、地域づくりにアートを活用する意義をお伝えしたい。

アートが地域の活性化や地域づくり、つながりづくりに応用できるのは、スポーツや料理等の興味型コミュニティが日常とは違うレイヤーの層にあるなかで、アートはさらに出会うはずのない人々の出会いを作ることである。例えばスポーツをしながら自分の話をしたり、料理をしながら過去の辛い経験を話したりすることはなかなかできない。一方、アートはアートを作るという意識的な創作活動をとおして、初めて伝え合えるものがあると思う。

足立区がアートに着目したのは、最初はアートの幻想的な面を用いて町のイメージを変えることを期待したからである。そうした活動の中で、アートを通じて外国人コミュニティのことを考えること

の有効性に気付いた。時間はかかるが、いつもと違うレイヤーで地域活動が深まっていく可能性を創出するのがアートではないかと思う。豊島区はそれを始めたところである。継続してみないと何をどこまでできるかはまだ分からないが、今年の活動から言うとアートの活動や理由がなければ、イスラームコミュニティや出産・育児のコミュニティと接することさえ難しく、つながりの起点としては非常に意義があるだろう。

山崎：先ほどの影絵については、時間資本を兼ね備えているからこそできることと評価したものである。影絵もそうだが多文化共生に対してアートができることは、時間の幅を味方につけ、回数を重ねる中で対話の可能性を醸成し、さらに深い理解につなげていくことができると思った次第である。

松井：先ほどの前のA分科会でもあったように、興味本位だけではなく、つながらなければならぬこともあると思われる。竹上さんが実際に町内会で経験した話はあるか。

竹上：難しい問題にはできるだけ皆関わりたくないというのはあると思うが、今の町会活動に関しては楽しいこと、興味のあること、やりたいことから入ってもらっている。防災等まさしくそうだが、イベントに来て話をしていく中で大事だということに気が付いてもらう。入口はやはり楽しさや興味があることで、そこから交流が深まっていけば、次の段階に進めるのではないかと町会では考えている。

松井：よぎさんはインドつながりの方から様々な相談を受けていると思うが、楽しいことから入らないとそういう人達とはつなげられないか。

よぎ：正直に言うと育ちで違ってくる。この話は金になるか、この話は恋人を作れるか、といったことに興味を持つ人達もいる。だから、どこの国のコミュニティも楽しいことから始まるかということ、自分の経験では疑問を感じる部分はある。

松井：今のような話も含めてだが、無関心な人や、あるいは外国人なんか出て行けというような人に、地域はすでに多文化共生の状態であるという話をしていくために、山崎さんならばどのように対応されるか。

山崎：先ほどの話と重なるが、楽しさを一番大きいところに置く。外国人に興味がない、国から出て行ってしまえと言う人達が考える外国人は、直接知っている、顔や名前がある人とは違う人をイメージしている。それには外国籍かどうかはあまり関係なく、コロナの時に東京ナンバーの車が来たら帰れと書いてしまうのと同じことで、その車の運転手と何の関わりも無いからである。

先ほど文化の違いで、ある国の人達は楽しいだけでは集まらないという話があったが、少なくとも多くの人を楽しんでいるということで集まるのであれば、その時に外国の方々も来てくれれば、そこで顔と名前が一致することになる。

僕らは地域で大体3年ぐらい仕事をさせてもらうが、3年の間に顔と名前が一致しつながりができ、助けたり助けられたりして、最終的には僕らではなく本人達が企画をして実行していくようになる。そこまで来ると相当な面識社会になっているだろう。

アベベ：来日した頃は電車で横に座ると逃げられたり、話しかけても無視されたりしたが、20年間をとおして見ていると、日本の社会は大きく変わっている。一部そういう人はいるが、それは個人の問題であって社会の大きな問題にはならないだろう。特に、ソーシャルメディアが進歩し、世界中で何が起きているかすぐに分かるので、そこまで心配していない。

米田：私が館長になったばかりの頃は様々な投書があった。だが、大事なことはまず自分がへこまないこと、負けてたまるかと諦めないことである。声高に叫ぶのではなく、楽しくやることによって、外国の人と一緒に何かやることはよいことなのかもしれないと思う人が一人二人と増えていく、これが実は一番確実な道ではないか。

松井：最後に他の方にもコメント・感想等を一言ずつお願いしたい。

楊：時間をかけ皆で楽しめることに取り組み、その中で様々な交流が起こることで、問題解決のきっかけにつなげることができるということだろう。本質的にはアートの話と全く同じで、皆で1つの目標を目指し、その周縁的な参加から始まって遠い目標に歩いていけるような環境作りができればよいと思う。

アベベ：我々は何をすればよいかというところから始めれば、日本の皆さんにも理解してもらえ、互いの問題解決に向けた話し合いをする道を作ることができるだろう。私達が日本の文化、エチケット、言葉など様々なことを学ぶと、日本の皆さんも我々の文化と一緒に学び、我々の考え方も分かるようになるので、外国人からもアプローチする役割があると思う。

よぎ：日本人は少し島国根性を捨て、外国人は少しグローバルという見方を捨て、いかに双方が近寄り、かつ社会として自助、共助、公助、この3つを突き合わせて多文化共生を進めていくか、そこに尽きるだろう。

竹上：地域の中には孤立した人がかなりいる。皆さんのお話を伺い、様々なヒントをいただけたと思う。やはり顔がつながる場を作るということは町会活動のポイントだろう。様々な居場所づくりをこれからも続けていきたい。

山崎：ある人のつながりの中に顔と名前が一致する外国人がいて、その外国人と仲良くなった時、その人が別の外国人と出会った時にひどいことを言わない人になる可能性を信じられるかどうか。楽しいこととつながっている時は、その練習をしているということである。

やらねばならないことがたくさんあるのは事実である。しかし、だからと言って楽しいことに価値がないというわけではない。儲かる、モテるというところから相互理解を深めることもあるだろう。それでは駄目だというより、それもいいねというたくさんの道があることが今回示されたのではないか。

松井：今まで言われてきたことを簡単にまとめると、まず楽しいということが最初にあり、人が集まり、そこで皆の顔と名前の見える世界になって初めて様々なつながりができ、多様な人が見えてくる。そうしたプロセスが、強制的に行われるのではなく、自然に起こってくるような働きかけをして、それが楽しくて続いていくということが大切だということであった。そうした関係を作っていけば、互いに助け合うこともできてくる。そしてそれは、国家が何か大々的にやるというよりは、自分の身の回りの小学校区、コミュニティ、あるいは顔の見えるところ、そういう身近なところから始めて広げていくのである。

そうなると、地域づくりから見て多文化共生がどうなのかとかいう話ではなく、多文化共生という言葉が本当はもう要らなくなる。よい地域をどう作っていくかということの中に多文化共生の話も自然に包含されていく。そんなふうに物事を考えていったほうが、自然に多文化共生が実現していくのではないだろうか。

【C分科会 企画・運営担当団体（50音順）】

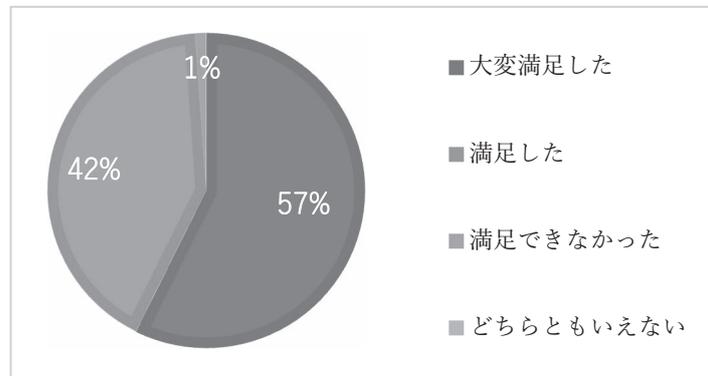
- ・特定非営利活動法人 IWC 国際市民の会
- ・公益財団法人 板橋区文化・国際交流財団
- ・共住懇
- ・独立行政法人 国際協力機構 JICA 東京
- ・調布市国際交流協会
- ・一般財団法人 港区国際交流協会

Ⅲ 国際化市民フォーラム in TOKYO アンケート結果

■ A分科会

アンケート回収結果 89名（参加者数：226名） 回収率：39%

大変満足した	: 51
満足した	: 37
満足できなかった	: 1
どちらともいえない	: 0
合計	: 89



《主な感想》

大変満足した

- 支援者、当事者、双方の立場から、様々な視点でお話しいただき、これから取り組むべき課題へのアプローチのヒントをいただけたから。特に、当事者が「参加」していることに満足してはいけない、というお話を聞き、携わる事業の中で企画から、ふりかえるところまで、当事者と共に進めることを大切にしたいと思った。また、マジョリティ側の自分は、特権を持っていることを常に忘れてはいけない、ということのを改めて戒めたい。
- 包括的、多文化などなどあいまいなまま使っていたことに思い至りました。また、支援する側が内容を決めて押し付けている活動が、自分がかかわるものではあるのではないかと改めて思いました。
- パネルディスカッションがとてもよかった。パネリストの半分以上が外国ルーツであったことも、好ましかった。
- 「支援」という視点だけでなく、社会の一員としての外国由来住民をとらえた内容であったこと、そのため色々なヒントをいただけたこと。
- 外国人が支援されるだけでなく、主体的にかかわっていく過程のお話が聞いてよかったです。特にネパールコミュニティの方のお話を聞く機会が少ないので、増加する在住ネパール人の方が抱える課題を実際にうかがうことができ貴重でした。
- 最近「支援から共存へ」が強調されていましたが、ジギャンさんの「支援も必要な人がいる」という言葉に、分かっていて自分も日常的に支援のお手伝いをしているのに、改めて気づかされました。その他にも新たな気づきがたくさんありました。
- 様々な視点から「多文化共生」について聞くことができ大変良かったです。双方向的で「ゆるい」感じが、素晴らしかったです。
- 和気藹々とした雰囲気になによりでした
- 魅力的な方々のプレゼン、意見交換から学ぶことが多かっただけでなく、純粋にワクワクし楽しかったです。
- 多文化共生に関して改めて考えさせられる機会となりました。共生とはマイノリティがマジョリティに融合することでは無いと、心では分かっているにも実際に自分がそのように行動できているかハッとしました。言語が特に難しい日本に来てくれた外国人が、よりよい環境で過ごしてもらえるように私も何かできること

とがないか模索したいと、きっかけをいただいた講演会でした。ありがとうございました。

- 色々な場所で活躍されている人の話が聞けて参考になった。私は特にジギャンさんが最後に話していたこと、多文化共生をしている私たちが、外国人に対して排他的、無関心である人に対して働きかけてほしいということがとても印象に残った。
- 自分もどこかで何かに参加してみようと思えるような、活きた内容でした。NHK 総合で放送してほしい感じ。政治家たちの何だかつかみどころのない討論会より身近です。
- 行政職員として職務上で必要な視点やアプローチ、考え方を学ぶ機会となりました。また、一個人として生活の中で少しずつできることから始めることで、より多文化共生を推進していきたい、そのために自分ができることは何か、と考えるきっかけにもなりました。
- 「包摂」という難しいタイトルがついていたので少し緊張して参加しましたが、様々な実情を知ることができました。まだまだ勉強中の身ですが、日本で暮らすことを選択して母国ではない国で地域の中で様々な困難や楽しさの中で暮らしていらっしゃる方と協同し、一方通行ではない双方向のお互いが win-win の関係を築ける社会の一員でありたいと、パネリストの皆様の発表や討論を聞いて強く思いました。
- 様々な現場で関わっている方の現実的な声を聞くことができました。登壇者もおっしゃっていたように、多文化共生は非常に難しいと思います。海外ルーツの人から見ておかしいと思うことは（たとえばブラック校則）、本当は日本の人も考え直してよい事柄で、「なぜそうなのですか？」と問われることは日本が変わるチャンスであると個人的には考えています。しかし、「入試を通るためにはしかたがない」というような理由でそのチャンスを逃す「多文化共生」も実際にあると思います。ひとつひとつのケースで考える、個人として相手を見るということに心がけていくしかない、お話をうかがって改めて認識しました。
- ファシリテーターの山本さんがすばらしく、4人の登壇者のみなさまの本音を交えたお声を聴くことができました。地域でご活躍の方々日本人だけに偏ることがなかったのも、多文化共生を実現していたように感じました。
- 様々なお話を聞けて、よりよく共住するためには、まず日本人側の意識が変わる必要があると思いました。最近、身近にネパールの方が増えてきているので、ジギャンさんの話が聞けてよかったです。
- 経験豊かなパネリストの皆様から、体験・経験に基づく多くの知見やお考え、ご意見を披露していただき、今後の国際交流業務を進める上で、またこれからの日本社会、都市地域の中で、どうやって市民との協働を具現化させていけるのか、多文化共生社会の具現化に向けて、大変に参考になるディカッションでした。こうした、機会は今後も定期的に設けていただけると嬉しいです。ご出演の皆さま、企画・準備された皆さまへのご尽力に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。
- 多様な活動・ご出身のスピーカーからご経験とお考えをお聞きできました。地域の多文化共生のために自分たちができることに限界を感じる今日この頃でしたが、自分たちの活動の範囲のなかでも、「つながり」を持つことで貢献ができるということを学びました。
- 色々な経験を通して感じていることを分かり易くお話しされ、講師同士がお互いに共感し合っている姿もとてもよかったです。わたしが普段の活動の中で感じていることを色々な表現で言葉にされていてとても参考となりました。
- 初めて参加いたしました。実際に活動なさっているの方々からの、具体的な話で、これを、やっています的な内容ではなく、今後の課題などにも触れていて、有意義な時間でした。ありがとうございました。
- CINGA の新居さんがこれまでの活動を踏まえ、今私たちが考えなければいけない大切なことを改めて共有してくださったこと。
- 力強いお話で未来の明るさを感じました。

- ・タイトル通りの中身のある内容だったため、全体的に早口だったが勉強になった。マジョリティがマイノリティを受け入れることだけが包摂、多文化共生になってはならないと思う。個々の人として関わられる機会を持ち、同じ立場で一緒に何かをしたいと思う。寛容であることはとても大事。
- ・パネリストの人选が多様で、それぞれ異なる立場で地道に真摯に活動され、熱い思いも伝わってきて、とても勇気づけられました。新居さんがおっしゃっていた地域格差は大きな問題だと思っており、これをなんとかしたいと思っています。地域で活動していると目先のことに追われて、視野が狭くなってしまうので、こういう機会は貴重です。

満足した

- ・支える、支えてもらう立場ではなく、共に歩むのが多文化共生であるとよくわかりました。
- ・様々な活動をしている人の意見を聞いて、自分の知らなかった新たな発見があったから。また、「日本は完璧な言語を求めすぎている」という発言にとっても共感しました。在日外国人に対しての発言だったかと思いますが、日本人にも同じことが言えると思いました。私は今高校生なのですが、英語の授業を受けている中で、もっと実用的で実践的な英語を学びたいと感じることが多々あります。これからより一層日本が国際社会になっていくにあたって、日本人も外国人もそれぞれが互いのことを考え、歩み寄る必要があると思いました。本日はありがとうございました。
- ・ブリッジ人材、1.5世、日本人が日本語にこだわり過ぎる、社会的包摂とは、外国人が『『そこに居ていい』と思えること』などのキーワードをいただくことができ、大切な気づきが得られたこと。
- ・ウェビナー形式ではなく、より多くの方が議論に参加できるようにしていただきたいと思います。ご登壇いただいた皆様の話・意見をうかがうことができ、よかったのですが、テーマの「自立支援から包摂、社会の一員としての外国人へ」の議論には時間が足りなく、Q & A が上手く活用されず、深入りできなかったことはとても残念に思います。
- ・今日はどうもありがとうございました。参考になることもありました。ただ、多文化共生についての概念をどうとらえているのかももう少し具体的に欲しかったことと、民間やNPOが、行政側にどう反映させるか、働きかけていくかが知りたかったです。
- ・支援ボラ活動のため、途中からの視聴で失礼しました。最後の方のやり取りでは（寛容性をもって、ゆるく）や（両輪の意識を忘れずに）（日本社会が変わるべき）の語を耳にしたので、キーワードは聞くことができましたと思います。（批判的な意見の人への働きかけ）こそが大切。皆様と同じく、これに賛意を覚え、活動の展開へと意を新たにしました。【MUST やルール】で追い詰めるのではなく、双方向性や楽しさを忘れずに、を心がけます。
- ・日本の社会は外国人を受け入れることによって、より寛容な成熟した社会を実現できる。その道筋についての示唆に富むパネルディスカッションでした。
- ・少なくとも日本の置かれている一部の現状においてわかりました。その分かった中で如何にその社会作りの現状が貧困、質素なのかに驚きました。ネパールの方が言われていた日本人であれば10万人都市であれば行政の仕組みができていのに、それを超える外国人のネパール一つをとってもなぜその仕組みが当てられないのかここが最も問題でわかりやすく言い換えると、日本人やる気あるの、やる気ないのであれば外国人日本から出て行きますよと言われている気にさえなります。
- ・日本社会で多文化共存ができるように、皆さんが真剣に考えて立ち上がっていることを尊敬しますし、一つの目標に向けて真摯に話ができる場があったことでよりコミュニティの大事さがわかりました。

- ・ネパールの方が意外に多く日本に移住されていることと多くのお子様日本で生活されていることに驚きました。
- ・幅広い切り口で今現在の多文化共生の課題を取り上げていて、とても面白かったです。特に新居さんのお話は示唆に富むものでした。これは私が東京都職員だから思うのかもしれませんが、新居さんが「地域日本語教室が様々な支援の入り口になる」みたいな話をした部分について、ちょうど東京都も地域日本語教育のあり方についてそういう方向にもっていきたいなあ、と考えていたところなので、それ（同じことを考えている自治体もあるよ、ということ）を何らかの形で補足できれば最高だったのに、と思いました。

満足できなかった

- ・司会の方の通信回線が不安定で、聞き取れない等の問題がありました。

《その他のご意見》

- ・参加者も音声を出して意見し、議論に参加できたらよいと思いました。
- ・ご登壇の皆様の関係性も垣間見ることができ、とても素敵な分科会でした。ありがとうございました。
- ・何の特技もない自分でも参加できるようなホントに身近なレベルの活動などを紹介いただけたら嬉しく思います。
- ・オンラインでの開催は事務局の方々にはたいへんお手間をおかけいたしますが、遠方からの参加や時差のあるところからの参加もできますので、来年もぜひ、オンラインで続けていただきたく存じます。
- ・「多文化共生」、「社会的包摂」、「やさしい日本語」などの言葉の概念や理念は、レベル高い系の人々には、一定の納得感、説得感をもって、共感、シェアできるかとは思いますが、大事なことは、そのレベルに至らない外国人の人々に対して、「お客様扱い」、上から目線で「教えてあげる」ではなく、真の意味で、同じ人間として、地域で、国で、地球で生きているという共通の土台に立ちつつ、具体的な形で取り組んでいくことが大切であると感じます。日本人の側の「心の意識改革」、「外国人イコール少数者意識というバリアフリーからの脱却」、「地域に住む同じ人間としての目線、視点、感覚、コミュニケーション対応」などをも基本に据えた、学校教育、生涯学習、地域学習、そして日本語学習も大切であると思いました。
- ・司会進行・パネリストのお話がとても興味深くあっという間の2時間半でした。来年度もぜひ参加したいです。お疲れ様でした！
- ・標語だけでない、例えば自治体の人権への取り組みが改善される（当地では、まだ残念ながらその弊害を見聞きしますので）などの、具体的なアクションへ繋がることを期待します。有り難うございました。
- ・在住する外国人の20年後、30年後の将来を見通した福祉や教育のあるべき姿はどのようなものでしょうか。来年度のフォーラムに期待しています。
- ・ほとんどの外国人は生活のために、働きに日本にやっけてきていると思います。若くて働かなければ生活が成り立たないです、ボランティア活動をする時間がほとんどないと思います。日本の文化に馴染んでいる若い外国人がたくさんいると思います。その人達がボランティアとしてではなくて、仕事として多文化共存のために活躍できれば、もっとスムーズにやっけていけるし、多文化共存ができるいい社会になるんじゃないかと思います。
- ・もっと成功（先進）事例または取り組みなどがあればよいかと思えます。例えば、ジギャンさんのお話では、ネパールの方々から「教育の相談」や「在留資格関連の相談」がありましたが、どうやって対応されたか？どこまで対応されたか？などについて詳しく聞きたいです。また「コロナ禍のサポート」がリストアップされていますが、どうやって連携してサポートを行われたのかなども聞きたいと思えました。質問

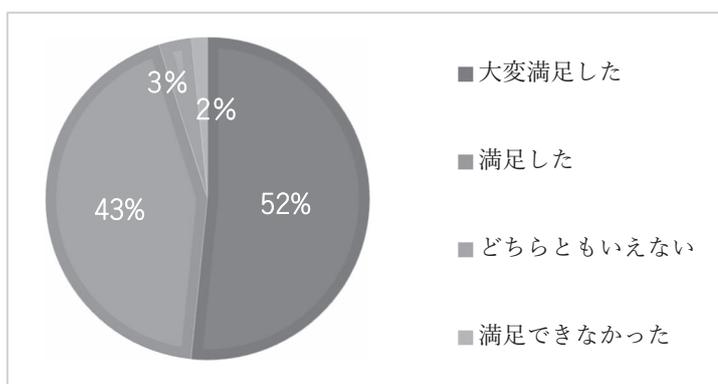
の時間がありますが、参加者が多く、質問するかどうかちょっと躊躇していました。講演の中でお話をうかがいできれば嬉しいです。

- ・ 若者やお子様の意見も聞きたいと感じました。

■ B分科会

アンケート回収結果 62名（参加者数：136名） 回収率：47%

大変満足した	: 32
満足した	: 27
どちらともいえない	: 2
満足できなかった	: 1
合計	: 62



《主な感想》

大変満足した

- ・ 日本語教師として生徒に日本語を教えるだけでなくメンタルの支えにもなりたかった。
 - ・ 仁村さんのファシリテーションの下、地域の支援団体の方、学校教員、そして外国につながるの社会人が深くつながり、現在の支援から将来の姿まで対話をしつづけていたことが印象に残りました。
 - ・ 在住外国人の子どもたちが増える中で、彼らが不安や問題なく高校に入学し、卒業する環境を整備することが必要で、そのためには制度の壁や異文化理解などあらゆる課題があることがよく理解できた。
 - ・ パネリストの方が違った立場から活動の説明をしてくださって、視野が広がりました。長い期間をかけて自分と関わる外国人ルーツの方達と接していく事の大切さを学びました。
 - ・ 昨年のテーマより一歩進んだ高等学校やその後の進路についての的確な情報をいただけた。
 - ・ 安里さんと柴山さんのお話にありましたが、進路相談にのる先生はよかれと思って「言語の分野に進んで」と勧めがちなのではないでしょうか。前半の柴山さんの資料で学生さんの夢が、言語関係のみではありませんでしたし、ダブルリミテッドの学生さんもいるはずなので、じっくりと何に興味があるのか聞いてあげられたら嬉しいです。学校の先生は多忙を極めているのは存じ上げているので、周りのサポートする人でもよいですが。
- 安里さんは、ご両親がペルー出身ですが日本生まれ日本育ちで日本の文化で育った方なのに、在留資格の関係でご両親の出身国に行かなければいけない可能性があったというのが、本当に残酷ですよね。在留資格に関しては、親御さんの出身国と繋がりが無いお子さんには特に柔軟に対応していただきたいですね。
- ・ 高等学校入学したらよしとするのではなく子どもたちにとってはその後も日本語習得に向けてとても大変だということがわかりました。
 - ・ 外国につながる子どもたちの置かれている状況や課題、それらへの取り組みを具体的に知ることができたからです。また、支援に取り組んでいる方たちや、外国ルーツの方がどのような思いでいらっしゃるのかなど、多くのことを学ばせていただきました。ありがとうございました。
 - ・ 様々な立場から、子どもたちの自立にむけてのお話しをうかがうことができ、支援者として希望が持てた。

- 外国にルーツのある子どもの現状が、学校、民間の立場からの情報がとても役立った。子どもだけではなく、親との関係の構築も重要、キャリアデザインの観点も重要 新鮮な発見でした。
- 今は中学校までの子どもたちの学習支援に携わっており、主な目標は高校に入学させることですが、実際高校に入学できてその後も多難な社会が待っていることを改めて学びました。それを改善するために色々な団体等がどのような活動をしているかよく理解できました。
- 外国ルーツの子どもたちを様々な角度から支援、サポートするみなさまのお話はとても興味深かった。外国ルーツの子どもたちの将来は、私たち日本社会にとっても宝であると強く感じた。また、子どもたちのビザに関する問題の大きさを知る機会であった。
- A分科会では、日本社会の寛容性が必須であることを痛感した。B分科会では、日本で就労するハードルの高さを知ることができた。またボランティア活動を通じて、子どもたちに寄り添いながら、将来に向けた展望を一緒に描けるような活動をしていきたい。
- 先生達は、潜在的な力を認めて、発揮できる支援、ストリングスアプローチということに、自分自身に気づきがありました。安里さんがおっしゃられていたように、小さいころから目標を持つのは、大切です。自分をみつめるキャリア教育がもっと、高校でもされることを期待したい。
- 外国ルーツの子どもたちが置かれている、学業、就職、定住生活権利の獲得に際して、こんなにも日本社会の制度や仕組みの壁が多くあることに、驚きました。また、この世界や分野での、自分自身の学習不足、経験・体験不足、色々な点での無知について自省いたしました。本日のフォーラムが、外国人ルーツの当事者・ご家族をはじめ、多くの市民、教育関係者、行政やNPOの関連機関などと、理念ではなく具体的な行動と実践を伴って、連携・協働していくための、気づきときっかけになったことは、大変に有意義な機会でした。ご準備にあたられたパネリストの皆さまをはじめ、準備にあたられた関係者の皆さまに、お礼を申し上げます。
私も、傍観者ではなく、「多文化共生社会の実現」を単なる理念や謳い文句に留めるのでは決してなく、具体的な実践と行動に結びつけられるよう、多くの方々とともに、ともに伴走させていただければと思います。
- 現在、在日外国人の小学生の日本語学習のボランティアをしています。本日聴講させていただき、担当している子どもたちの何名かが中学を日本で卒業し、高校に進学する時に必ずや直面する問題点や解決方法、更にその後日本で就職するにあたっての難題、昨今の事情について深く知ることができ大変勉強になりました。ありがとうございました。
- 今年4月に開始される外国につながる高校生への特別な教育課程という視点で各事例発表者よりお話を聞いたが、この制度開始により高校間の格差がなくなることを期待する。中学生の進路において、高校でのロールモデルを紹介していたが、社会に出た元当事者のロールモデルをもとに、10年後の未来を想像できるような指導、サポートが必要であると感じた。
- 外国につながる子どもたちが高校生になって直面する問題がよくわかりました。外国につながる保護者の方々が、子どもの教育に見通しを持って、日本で生活をするためには、就学前からの情報提供が必要だと感じました。

満足した

- 時間が限られているため、講師の方々はどうしても早口になってしまわれるため、消化できないまま進んでしまうこともありました。PPTなど資料をいただいていたので再度自分で確認していきたいです。今回、それぞれの先生方のお話と最後に話された安里さんのお話につながり、より理解が深まりました。

- 高校進学から就職までの道筋の問題点や具体例がわかった。
- ビザの種類による区別を詳しく確認することができた。
- 外国にルーツをもつ若者の具体的な進路について様々なアプローチの方向を示してもらってよかったです。
- 貴重なお話を聞くことができたためです。安里さんのお話、提言がとてもよかったです。
- 話題が多岐に渡っていましたが参考になりましたが、もう少し話題を絞って掘り下げていただけるとありがたいです。
- 高校進学の問題点、将来へのキャリア、ビザ等について、とても参考になった。
- 様々な立場で支援する方々の活動を知ることができた。親に連れられてきた子どもの在留資格のこと、就職内定を取らない限り定住者への資格変更が難しいことなど日本の入管はいつまでたっても硬直的なのだなと再度実感しました。また安里さんのケースは本当に恵まれたレアケースかもしれませんが、ロールモデルとなり今後も彼が発信することにより後輩たちの目指す形になればと思いました。角田先生のような方々がもっと増えていただきたいと感じました。
- 様々な立場の方のお話が聞けました。みんなで力を合わせて明るい未来につなげていければいいなと考えました。
- 外国ルーツの子どもを取り巻く環境の厳しさや、懸命な取り組み支援の現状を知ることができてよかった。次回はぜひ地域別や自治体別の情報収集や意見交換ができる場も紹介してほしい。連絡先一覧資料もあればなおうれしい。
- 外国ルーツの子どもたちも多種多様で、一緒に悩んで寄り添うことが大事だと思いました。在留資格の問題は本当に悩ましいが、新たなキャリア支援の話も聞けたので、今後自立の可能性が広がって欲しいです。
- 高校に進学したあとの問題や課題、とくに在留資格について理解することができた。またキャリア支援を考えた、中山先生や柴山先生の取り組みも興味深かった。中でも、柴山先生がお話しされた「進路を一緒に悩んでくれる大人がほしかった」というスタッフの方の意見が印象に残った。これらを踏まえて今自分ができる支援を考えると、保護者の方が情報弱者にならないようにサポートすることと、子どもが相談しやすい環境を作ることだと感じた。
- 在住外国人の義務教育以上の教育にかかる種々の問題点とその対処方法のヒントを得ることができましたが、これら日本が抱える問題でもあります。根本的な外国人を受け入れるための方策改善は政治や行政の改革に求めざるを得ません。政治や行政を巻き込んだ動きにするための動きをどのように進めていращやるかをうかがいたかった。

満足できなかった

- お世話になります。明るい面をお伝えいただいたのは、励みになりました。また、大人の問題である＝（イコール）日本社会の抱える問題でもある、という認識に賛同いたします。しかし、現状では、法制度や無理解による原因が大きな障壁なので、それに対する解決策が望まれます。改正すべき時間は十分に経過し、苦しむ当事者も多数なので、実効的な方策を周知する場と催しが早く・広範囲で実施されるべきだと考えます。

《その他のご意見》

- A分科会でもそうでしたが、進行の方の音声が聞き取りづらかったです。通信量の問題などもあったのでしょうか。来年度は、事前にテストをされて改善をしていただければありがたいです。またA分科会のアンケートにも書きましたが、オンラインですと参加がとても楽です。来年になってコロナ禍が落ち着いて

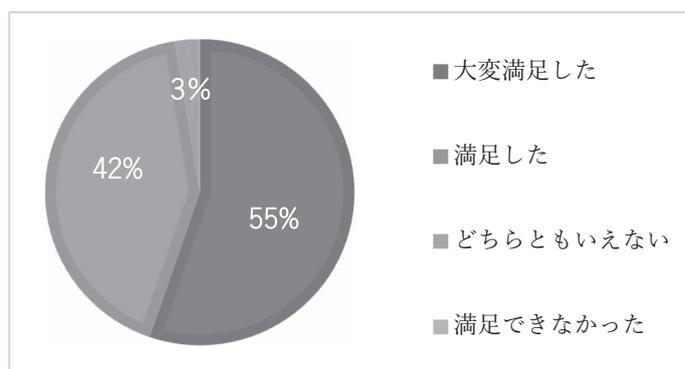
きても、オンラインでも参加できるようにツールを残してくださると助かります。今日は貴重な機会をありがとうございました。

- とてもよかったです。2時間半が、あっという間でした。
- ボランティア初心者なので視野も狭いため、色々な現場のお話がとても勉強になりました。安里さまの様な当事者（経験者）ご本人のお話もうかがえて非常に参考になりました。ありがとうございました。
- A、B分科会とも、パネルディスカッションでの発言に共感する部分が非常に多かった。ディスカッションの結果、今後どのように発展していくのかを知りたい。
- 在留資格による生活制限や就職制約をはじめ、外国人ルーツを持つ青少年・若者たちへの将来にわたる日本の法制度上の制約・制限について、人権、教育、人材資源、本人当事者の輝く未来の人生という側面から、改善すべき課題が、いまだに多くあるのではと、強く感じました。総論レベルではなく、具体的な課題解決に向けた取り組みに、踏み込んだ討論や議論までできるかどうか、この場でのTPOとしての妥当性もあるものの、私自身、傍観者ではない視点からも今後に期待したいです。
- 角田先生がおっしゃったように、日本社会が外国人を受け入れることで得られるメリットがたくさんあります。多文化共生が日本の社会にプラスになる作用をする…。子どもたち世代により化学反応が起きるでしょう。しかし、そのために、私たちが今しなくてはならないことがたくさんありそうです。
- 急に外国から日本に来た、日本語能力のない児童にどう対処すべきか？自治体間格差にどう取り組むべきか？などは大きな問題だと思いますので来年度はスポットを当ててください。
- 自宅から視聴でき、様々なことを学びました。また、スライドを事前に送っていただいたのもよかったです。来年も楽しみにしております。
- 私はごく最近、江戸川区の日本語指導員として公立小学校の支援に入り始めたが、自分のやり方の良し悪しや改善点がいまいちわからない。日本語教育者どうしの交流の場がないので、情報交換ができる場所があればうれしい。
- 児童が、ロールモデルになる方の母国語でのお話を聞く機会を、作ってほしい。

■ C分科会

アンケート回収結果 38名（参加者数：145名） 回収率：26%

大変満足した	: 21
満足した	: 16
満足できなかった	: 1
どちらともいえない	: 0
合計	: 38



《主な感想》

大変満足した

- パネラーたちの内容がとてもよかったです。
- 楊 淳婷さんのお話をお聞きするのが目的で参加申し込みしましたが、よぎさんのお話に共感することも

多く、山崎さんがとても分かりやすくまとめてくださりコメントもいただけて、とても面白い2時間でした。ありがとうございました。

- 外国ルーツの方と地域で活動している図書館・町会双方からのお話が聞けてとても面白かった。
- 様々な立場・場所で多文化共生に力を尽くしている方々のお話を聴き、自分の周囲や職場でできることを考えました。
- 外国人との関係はもとより、日本人との間でも同様の課題があると悩んでいましたが、賛同できるご意見や共感できる苦労のお話が多数聞けて、勇気づけられました。
- とても考えさせられる Keyword が多かったところです。例えば楽しいことに時間をかけてじっくり一つ一つ、アートをツールに（影絵）、顔と名前が繋がる地域づくりがポイント、多文化共生とは ⇒とても考えさせられるテーマ、今まであまり重要視してなかったテーマでした。ヤダと思ったこと、楽しいこと、それじゃダメじゃなく、それもいいね（金儲け、男女交流等）、小学区のスモールコミュニティから始める。
- 身近でいきいきとした発表だったからです。
- 多文化共生とは詰まるところ地域コミュニティ（地縁型、テーマ型を問わず）の課題だと感じています。では、それをどうやって実現するのか。日本人同士のリアルな関係性が希薄化した現代社会、特に都市部の実情を前提としたアプローチが求められていると感じています。C分科会はこの課題に相当程度迫ったと思います。
- 外国人と地域コミュニティという枠組みを超えて、まちの図書館や町会のイベント、公共の劇場でのアートプログラムなど身近で具体的な事例から、人と人が楽しいこと、興味のあることで出会い、互いに関心を持ち、時に支え合うことに向かえるかもしれない、大変だけでなく豊かにもなりうる時間の流れをイメージしました。
また、共に楽しむ、何かを一緒にすることで、一緒に〇〇をした何々さんという関係ができ、支援する、されるの一方的な関係、するべき、しなくちゃという義務的な関係でなく、相互に与え合い感謝し合える関係につながっていく可能性を感じました。
- 登壇者4名のお話、コメンテーターの山崎様のコメント、その後の司会者の仕切りによるパネルディスカッションの話がとてもよかったです。特に、コメンテーターの山崎様が各登壇者の発表内容について、一つずつコメントを出し、かつ、興味型コミュニティ、地縁型コミュニティ、時間資本というキーワードを用いてお話してくださったことはとても参考になりました。
- どなたの話も素晴らしかった。特に山崎さんのコメントでは気づきが多く、納得することばかりでした。
- 国の中にも様々な方がいることを改めて思い知りました。日本も同じで、人それぞれなんだ。「〇〇人で」というより、一つのテーマに興味関心に持つ人同士であれば、国籍・言葉なんて些末なこと（仲良くできる）、のほうがりっくりきます（できそう）。こうした知り合いが増えていけば、同じ国の人同士だけで固まるだけにならないし、コミュニケーション・情報伝達の突破口にもなり得る気が。また、アベベさんの「エチオピアコミュニティより地域社会の一員として」は感銘を受けました。ただ悲しいかな、ほとんどの日本人には日本語しかないの、ある程度日本語習得を受け入れてもらわないと難しいと思います。日本人も易しい言い方をするなど（相手に失礼（馬鹿にしている）という方が割と多い）、互いに歩み寄ることは大事。
- 自身も地域で国際交流の団体を作りたいなと思っているので、山崎さんの「興味型コミュニティ」と「地縁型コミュニティ」の分類がとても参考になりました。「興味型」から始めて「地縁型」をどう巻き込むかという道筋がなんとなく理解できた。
- アートの視点が、今までにない視点で興味深かった。うわべの多文化共生になり得ること、マイノリティ

の暴露をどこまでしていいのかなど。時間資本があれば「楽しさ」が入口でも問題ない、など、A分科会にも通ずる話があり、深く掘り下げて聞きたかった。豊島区との具体的な話があれば、足立区とのプロジェクトの話など地域行政との協働をもっと知りたかった（足立区は他の自治体と比べ地域協働やボランティアが盛んだと聞いたので）。

- よぎさんは、お話の内容も、他のパネリストへの配慮も含め、素晴らしい人格者だと思いました。ぜひまたお話聞きたいです。
- 外国人支援（多文化共生）起点ではなく、地域起点でのディスカッションで学びが多かった。

満足した

- 東京の実態を知れたし、多方面で多文化共生社会を実現しようと努力されている方を知ったから。
- 内容面はよかったが、部分的に聞こえづらい音声があった。
- チャットでもinteractionができ、実際に参加している感じでした。皆様の経験や取り組みは新鮮で、よかったです。大勢の方がいたため、詳しい話ができなかったのが、残念でした。
- パネリストの皆様の発表もすごく興味深くうかがうことができました。個人一人、個人一集団、集団一集団、集団一地域、地域一行政などなど様々な繋がりの中で生きているのは外国人の方だけでなく生まれた時から日本で暮らしている日本人もそうだと改めて気づきました。生きていればよいことも嫌なこともあるのは当然で、それは日本人だろうが外国人だろうが変わりはない。けど、慣れない環境やルールの中で生きにくさを感じる部分がお互い少しでもよくなればよいなと思います。日本人のようになれるよという意味ではなく、個性やお国柄も活かしながらお互いが高め合える社会が「多文化共生」なのかなと感じました。理論や定義も大切だけど、お互いを気にかけて心配しながら、楽しいことは楽しんで、悲しい時は一緒に涙するような友人のような関係が目指せると心の壁も低くなっていくのは…。そのために、準備の大変さや当日の楽しさなど様々なイベントが有効なんだろうなとも感じています。外国人対して何かをするという視点ではなく、好きなものを一緒に楽しむそれがたまたま外国の人だった…からの裾野の広がりを大切にしていきたいと強く感じました。国際保健を大学院で学びながら、看護大学の教員をしている身からすると、学生や若い人に、固定概念の少ない、共通の趣味や興味で大人がびっくりするくらい盛り上げられる年代のうちにこのようなフォーラムにぜひ参加して欲しいと思いました（今年初めて参加させていただきましたが、来年は勤務先の大学の学生にも広報活動します！）。
- スピーカーの方々の話しになった内容が、今回のテーマと少しずれていると感じる部分がありましたが、山崎さんのコメントでつながったのかな、と思います。「楽しいところから」入る多文化地域づくりの重要性が分かった一方、最後に「やらなければいけない嫌なこと」をやる立場があるのを忘れてはいけないこと、肝に銘じます。
- 「みんなで創る多文化共生」を拝聴させていただきましてありがとうございました。皆さんのみなさんの活動やお考えに聞き入りました。八千代町にWIFAという国際交流の団体が立ち上がって間もないところですよ。米田図書館長さんの読み聞かせや書物の紹介を通して多國の方々との交流を持つという話を聞き、わが町の多国籍の割合を知り、図書館に多言語の書物がどのくらいあるかを把握して、国々の読み聞かせ会を参考にいたします。よぎさんのおっしゃるとおり、自助・公助・共助の町づくりの会議の中でも外国の方々が見えていない印象を持ちます。今、交流会に参加して下さっている外国人の方々から話し合いを持っていきたいと思っています。ヤンさんの伝えたいことは、影絵という形で、美しいアートの奥にある内に秘めた思いも理解してほしいことだと感じた。アベベさんの同国の人たちの楽しい集まりから地域の一員としての生活はその過程。コメンテーターの竹上さんの取り組みも見本のような取り組みです

ね！ご自分が多国での生活を余儀なくされて経験を生かし、地域の皆さんの活動の盛り上げの実行力に感銘を受けました。山崎さんのなるほどと思う本音の解釈により一層ワクワクしながら拝聴させていただきました。〈お国はどちらですか？地球です！×国籍はパスポートに書かれたものです。国とは心の中で育った感情だと思う。〉の言葉が残りました。

満足できなかった

- 多種多様な切り口の話があって大変面白かったのですが、結局「言いたい放題」で終わってしまった印象です。それは受け止める側次第、というのであれば、さすがにそれは発信としてどうかな、と思います。また、山崎さんの論考にせよよぎさんの主張にせよ、鋭いし勉強になるのですが、ああまで「行政」と一括りにして大きな主語で語るのはいかがなものかと思ひますし、(開催中にコメントにも書きましたが)あそこまで行政について語るのであれば行政の人間も呼ぶべきではないでしょうか。あれは欠席裁判です。C分科会のサブタイトルは「みんなでつくる多文化共生」ですが、「みんなでつくる多文化共生(行政を除く)」とお書きになったらいかがでしょうか。

《その他のご意見》

- 来年度以降も聞いている側もチャットなどで話に加われる形を継続してほしい。
- たいへんよい学びになりました。ありがとうございました。コメンテーターの山崎亮さん、竹上恭子のコメントが大変参考になりました。
- プレミアム企業勤務内勤40年、定年退職した夫が同じ部屋にいて、フォーラムを一部盗み聴いておりました。ひとこと「全く異次元の話で、とても勉強になった」と申しました。私は「ああ、こういう人って日本に多いのだろうな」と思いました。夫はともかく、こういった元企業人(もちろん現役重要!)は「多文化共生事業」を進めるにおいて、もったいない存在だと思ひました。行政の話が出ていましたが、行政より企業を借り出した方が、現実的で社会的な活動につながるような気がします。企業に対してのアピール、それが行政の仕事かもしれません。行政からの指示だと企業は動きますから。
- 地域における多文化共生を考えるための多角的な知見を提供していただいたと感じます。ありがとうございました。「(非言語コミュニケーション手段である)アート×多文化共生」の話をもっと聞けるとより深まったと思ひます。ちょっと盛りだくさんだったですかね…。
- 現場の方々のお話をお聞きでき、たいへん充実したセッションでした。楊さんのお話は、多文化共生と表裏の関係にある「マイノリティの搾取」の問題に関わるものであったと思ひます。非常に重要なトピックですが、議論があまり深められなかったのがちょっとだけ残念です。コメンテーターの方が「アーティストが密室にこもって作るアートと、みんなで作業をしながら作るアートは違う」とおっしゃっていましたが、皆で作業をしながら作るアートにも搾取や非対称性の可能性はあり、マイノリティの搾取となってしまうかどうかは、プロジェクトを始める前からよく検討しなければならないと思ひます。次回は、楊さんのように(アート系の、あるいはアート系のバックグラウンドのある方で)プログラム設計に現場で関わっている複数の方に登壇していただくとよいと思ひます。
- 松井さん、大変お疲れ様でした。皆さんの発言がとても自身に響き、強烈なパネルディスカッションでした。
- 子どもの視点での企画、アート、演劇、ワークショップなどを取り入れた体験型の企画があると、テーマを楽しく自分の中に取り入れやすいように思ひました。
- チャットでの内容を適宜拾っていただければ、視聴者が置いてけぼりにならず、会場との一体感が増し更にいいなと思ひました！(よぎさんがコメント返信してくれたので、よかったです)

- 行政との連携は避けられないと思うので、チャットにもありましたが、行政からのパネリストかコメンテーターもいたらよりよいのかなと感じました。
- ハイブリッド開催を期待します。
- 色々な角度から多文化共生を論じてほしいので、行政や町内会の関係者などからの意見も聞きたいです。
- C分科会はよかったのですが、参加者が多かったため、チャットでみんなへの質問があっても、全員が答えなかったのは残念でした。運営は大変かもしれませんが、分科会の数を増やし、もっと深くテーマに沿って、全員が参加できるようにしていただけたら、ありがたいです。本日はありがとうございました。
- オンラインで参加できる環境は関東住まいではない者からするととてもありがたいです。
- 色々な人の話が聞けたことがとても贅沢だったと思うと同時に、時間に対してパネリスト4名・コメンテーター2名は多過ぎるのではないかも感じた。十分に掘り下げて話をできなかった登壇者もいるような気がした。パネルディスカッションの時間にカメラをオフにしていた登壇者がいたのは、ディスカッション感が薄れてしまい少し残念だった。
- 日本の多文化共生も国際化もなかなか進みません。確実に次のステージに持っていきましょう。

令和5年3月発行

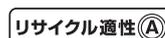
国際化市民フォーラム in TOKYO

編集・発行 一般財団法人東京都つながり創生財団
〒163-0808 東京都新宿区西新宿2丁目4番1号 新宿NSビル8階
新宿NSビル内私書箱6102号
電話 03-6258-1237

印刷 社会福祉法人 恩賜財団 東京都同胞援護会 事業局



古紙配合率70%再生紙を使用しています
石油系溶剤を含まないインキを使用しています



この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。

